津山市埋蔵文化財発掘調査報告第70集

的場古墳群

2001

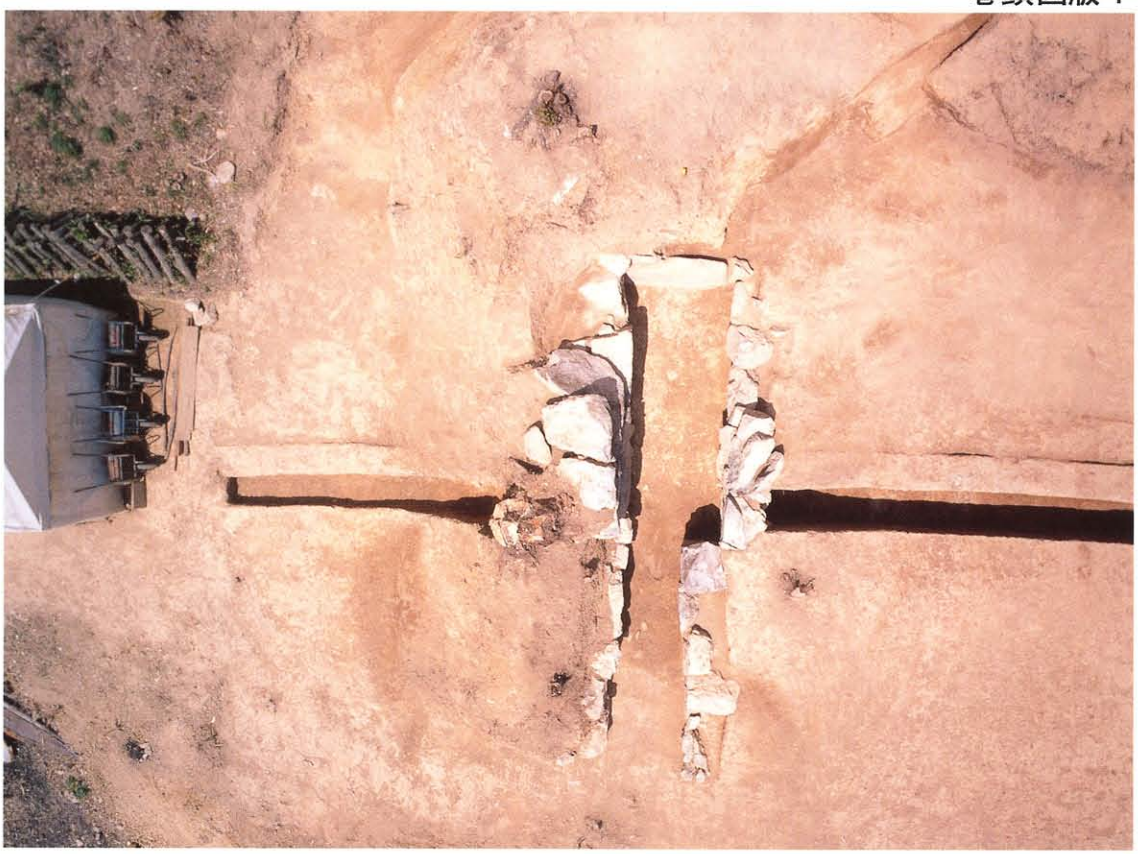
津山市教育委員会

的場古墳群

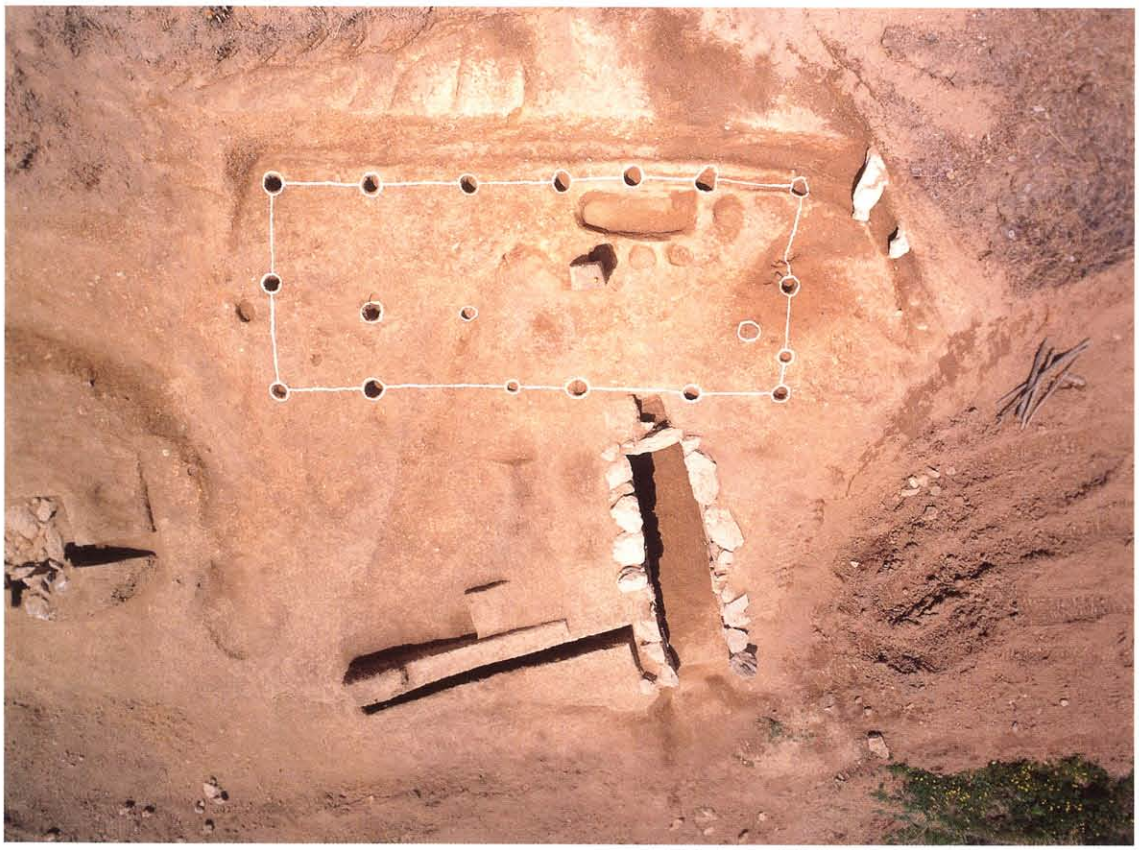
津山市埋蔵文化財発掘調査報告第70集

2001

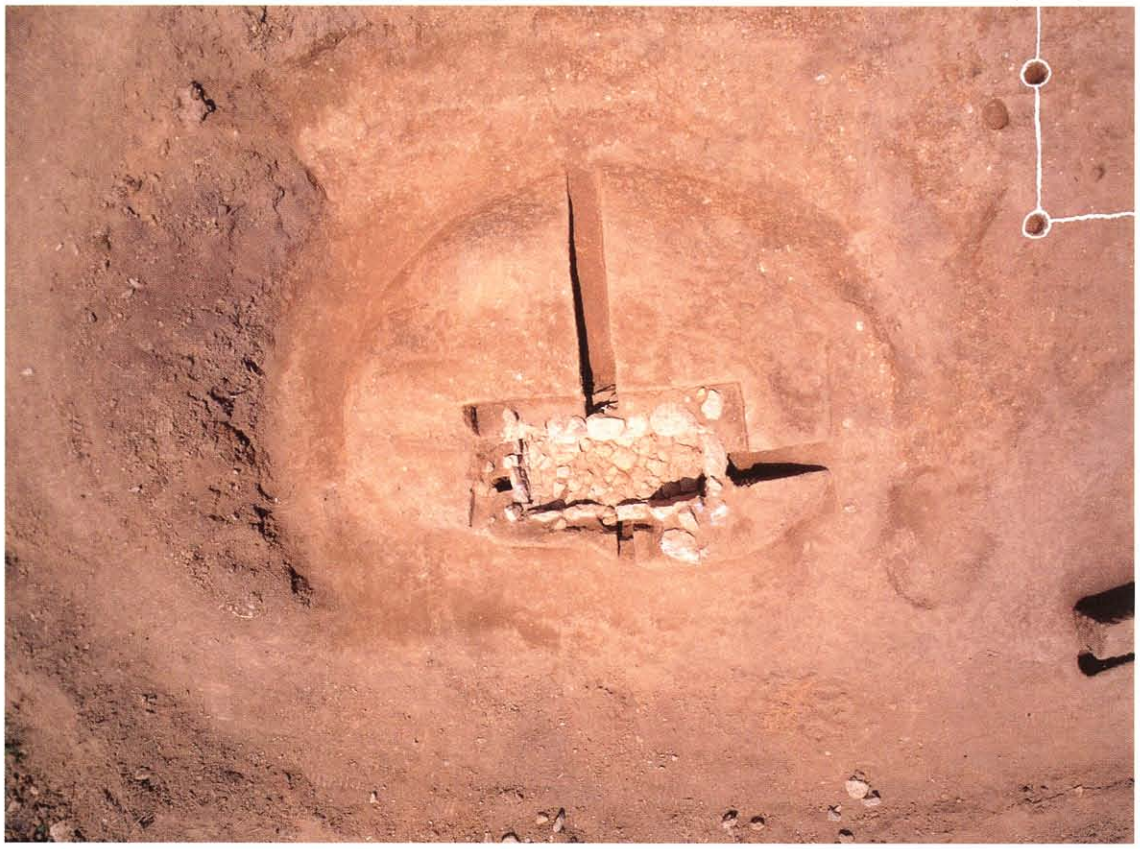
津山市教育委員会



的場1号墳全景



的場2号墳と建物跡



的場3号墳全景

35　39　42

的場2号墳出土馬具

序　文

ここに報告する的場古墳群は、市内を貫流する吉井川沿いに位置する津山市金屋地区に所在します。

平成10年10月17日の夜から18日の朝にかけて岡山県に上陸した台風10号は、各地に大きな被害を与えました。なかでも津山市の被害は特に大きく、吉井川、皿川などの河川沿いを中心に3,206戸の家屋が浸水するという深刻な事態となりました。本地区も例外ではなく、多くの農地や道路が甚大な被害を受けました。そのなかで、一頭の子牛がはるか下流の瀬戸内海まで流されながらも奇跡の生還を果たした出来事は、津山市民に大きな励ましと勇気を与えてくれました。この子牛が住んでいたのが本地区の牧場です。

このたびの調査は、護岸工事とそれに伴う牧場整備が契機となりました。対象となった古墳は工事計画の策定後に発見されたため、応急の発掘調査となりましたが、予想以上の成果を得ることができました。これまで、この地区の埋蔵文化財についてはあまり良く知られていませんでしたが、本調査を通じて金屋地区にも重要な古墳群が存在することがあきらかとなりました。本書が地域の歴史を知るための基本資料として利用されれば幸いです。

終わりになりましたが、調査にあたってご理解と積極的なご協力をいただいた地権者を始めとする地元関係各位に対し、敬意を表するとともに心からお礼申しあげます。

平成13年3月31日

津山市教育委員会
教育長　松　尾　康　義

本文目次

Ⅰ　位置と環境

1　遺跡の立地・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

2　周辺の遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

Ⅱ　調査の経過

1　発見経過と調査契機・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

2　調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

Ⅲ　調査の記録

1　古墳群の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

2　１号墳・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

A　墳丘・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

B　周溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

C　石室・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

D　遺物の出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

E　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

3　２号墳・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19

A　墳丘・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19

B　周溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19

C　石室・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20

D　箱式石棺・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22

E　遺物の出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22

F　陶棺・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23

G　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27

4　３号墳・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32

A　墳丘・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32

B　周溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32

C　石室・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32

D　遺物の出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33

E　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35

5　中世の遺構・遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38

A　建物跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38

B　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39

Ⅳ　まとめ

1　古墳の築造と埋葬時期・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40

2　古墳群の特徴と問題点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45

挿図目次

第１図　的場古墳群と周辺の遺跡・・・２
第２図　的場古墳群分布図・・・・・・３
第３図　的場古墳群調査区全体図・・・７
第４図　的場古墳群採集遺物・・・・・８
第５図　１号墳平面図・・・・・・・・９
第６図　１号墳墳丘断面図・・・・・・９
第７図　１号墳石室平面図・・・・・・10
第８図　１号墳石室実測図・・・・・・11
第９図　１号墳遺物出土状況・・・・・12
第10図　１号墳出土遺物１・・・・・・14
第11図　１号墳出土遺物２・・・・・・15
第12図　１号墳出土遺物３・・・・・・16
第13図　１号墳出土遺物４・・・・・・17
第14図　２号墳平面図・・・・・・・・19
第15図　２号墳墳丘断面図・・・・・・19
第16図　２号墳石室実測図１・・・・・20
第17図　２号墳石室実測図２・・・・・21
第18図　箱式石棺実測図・・・・・・・・22
第19図　２号墳遺物出土状況・・・・・・22
第20図　陶棺実測図・・・・・・・・・・24
第21図　２号墳出土遺物１・・・・・・・25
第22図　２号墳出土遺物２・・・・・・・26
第23図　２号墳出土遺物３・・・・・・・27
第24図　２号墳出土遺物４・・・・・・・28
第25図　２号墳出土遺物５・・・・・・・29
第26図　２号墳出土遺物６・・・・・・・30
第27図　２号墳出土鉄滓・・・・・・・・31
第28図　３号墳平面図・・・・・・・・・32
第29図　３号墳墳丘断面図・・・・・・・32
第30図　３号墳石室実測図・・・・・・・34
第31図　３号墳出土遺物１・・・・・・・36
第32図　３号墳出土遺物２・・・・・・・37
第33図　建物跡・土坑実測図・・・・・・38
第34図　出土銭貨拓影・・・・・・・・・39

表目次

表１　出土銭貨一覧表・・・・・・・・39
表２　１号墳出土須恵器観察表・・・・42
表３　２号墳出土須恵器観察表・・・・・43
表４　３号墳出土須恵器観察表・・・・・44

写真図版目次

表紙写真　　的場古墳群（上空から）
巻頭図版１　的場１号墳全景、的場２号墳と建物跡
巻頭図版２　的場３号墳全形、的場２号墳出土馬具
図版１　調査区全景・１号墳
図版２　１号墳石室・遺物出土状況
図版３　２号墳
図版４　２号墳遺物出土状況・石室
図版５　３号墳・建物跡
図版６　１号墳出土土器
図版７　２号墳出土土器
図版８　２・３号墳出土土器
図版９　１号墳出土鉄製品・２号墳出土馬具
図版10　２・３号墳出土鉄製品・耳環・陶棺

例　言

1　本書は牧場造成工事に伴う的場古墳群の確認調査報告書である。

2　調査は平成10年度から平成11年度にかけて、津山市教育委員会が実施した。

3　的場１号墳から３号墳までの３基を調査し、これらの行政区画は岡山県津山市金屋字的場367番地の１ほかに所属する。

4　調査は津山市教育委員会文化課が担当し、中山俊紀、安川豊史、行田裕美、平岡正宏、豊島雪絵があたった。

5　調査にあたり、本文中に記すとおり多くの方々から援助や教示をいただいた。

6　調査には第Ⅴ直角平面座標系を使用した。本書第３図で使用した方位は座標北を示し、高さは海抜高である。

7　本書の執筆は津山弥生の里文化財センター職員が分担した。執筆分担は次のとおりである。中山（Ⅰ）、行田（Ⅲ-３-ＡＢＣ）、平岡（Ⅲ-２-ＡＢＣ・５-Ａ）、豊島（Ⅲ-２-Ｄ）、その他の執筆と編集は安川が担当した。

8　出土遺物および図面等は津山市教育委員会津山弥生の里文化財センターに保管している。また、本書の内容はPDFファイルとして保管している。広く活用を望む。

Ⅰ　位置と環境

1　遺跡の立地

的場古墳群は、津山市南東端の金屋に所在する。津山市街地中心部の吉井川にかかる今津屋橋南詰から、川沿いに主要県道津山柵原線を南東に3.5ｋ進むと、国道53号線の新兼田橋東詰から国分寺を南下し柵原に抜ける県道と渡船場橋で合流する。その合流点南西に広がる集落が金屋で、的場古墳群は、その合流点から柵原方面にやや南下した吉井川右岸の山裾に開けた狭小な段丘上に存在する。

金屋の地は、古代の行政区画として美作国久米郡に属していたとみられるが、吉井川対岸の瓜生原など、勝田郡に属する河辺地域一帯との結びつきも伝統的に強かったようである。古墳群の西には、背後に標高351mを最高所とする山塊が迫り、南は柵原町と境する峡谷となっている。

吉井川を挟んで北方に開ける河辺の台地には、日上天王山古墳(1)や美作国分寺跡(2)、同尼寺跡(3)など美作を代表する遺跡が集中し、弥生時代以降特色ある地域圏を形成している。

2　周辺の遺跡

この地域における古墳時代の開始を物語るものに、日上の畝山丘陵南端、吉井川を見下ろす位置に築造された前方後円墳日上天王山古墳が存在する。日上天王山古墳は、平成６年に発掘調査が実施され、墳長57mで、後円部三段、前方部二段で葺石をもって築成されていることが明確となった。前方部は低くバチ形にひらき、整った墳形は箸墓古墳や岡山市の浦間茶臼山古墳と酷似する。この畝山丘陵には、56基の小墳が遺存する畝山古墳群があって、この大多数は５世紀後半から６世紀前半に築造されたいわゆる古式群集墳であること、尾根筋に天王山古墳に継起する前半期の方墳が少数存在することが、平成７年度から９年度に行われた確認調査で明らかとなった(4)。

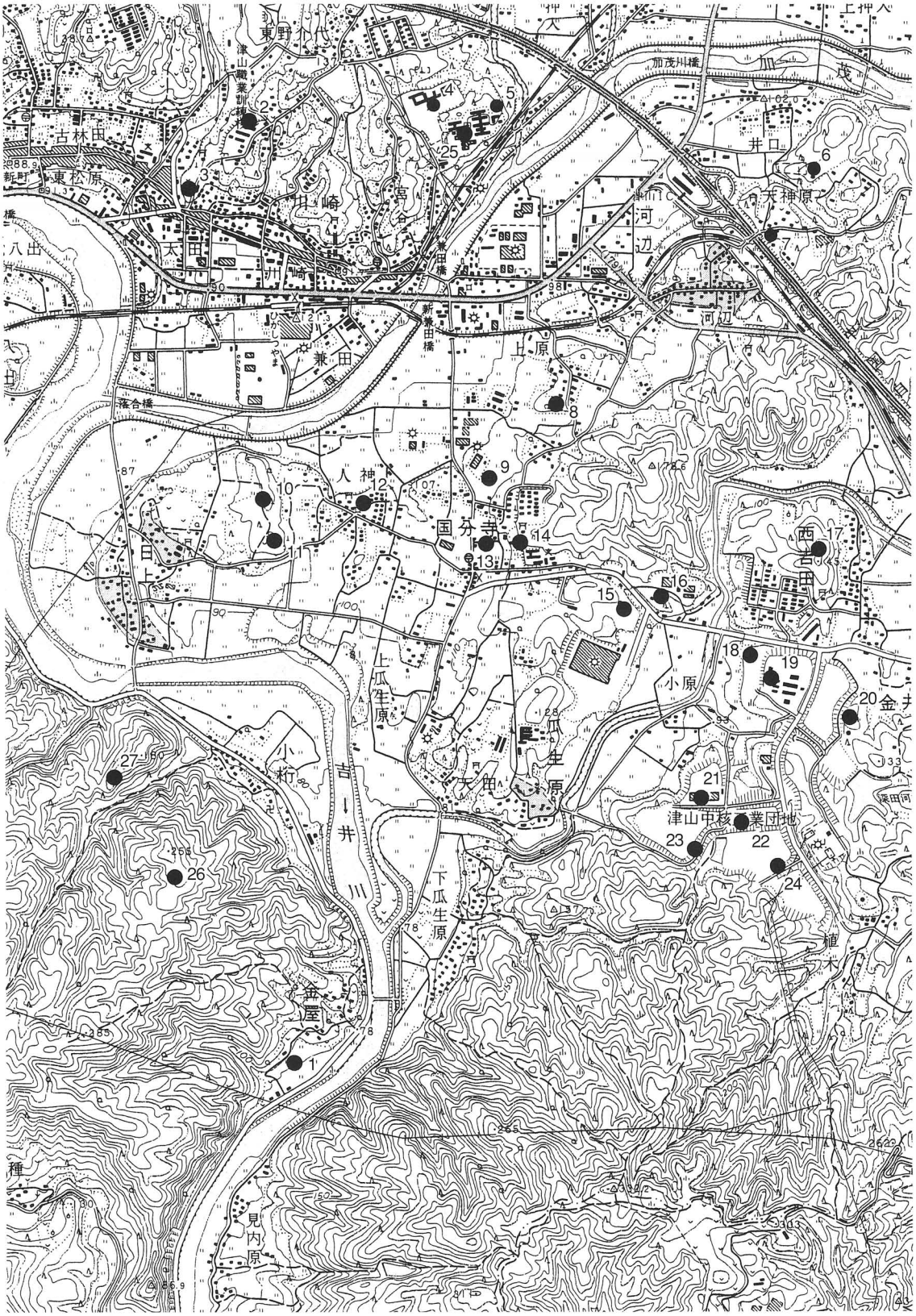
古式群集墳の時期の30mを越す規模の古墳として、河辺地域には井口車塚古墳(5)（帆立貝形、全長35m）、国分寺飯塚古墳(6)（円墳、直径35m）、日上畝山80号墳(7)（前方後円墳、全長30m）等が代表的なものとしてあるが、この他直径ないしは一辺10mから20mほどの小円墳ないしは方墳多数も、群在ないしは点在して広く分布する。

それらのうち日上畝山古墳群を西のグループとすれば、それに対応する東方グループの群集墳代表には長畝山古墳群(8)（８基）・長畝山北古墳群(9)（12基）が存在する。長畝山古墳群は、昭和46年度に１、２号墳が調査され、うち２号墳の木棺直葬で礫床をもつ埋葬施設から鉄鉗、鉄槌などの鍛冶工具が発見された。また長畝山北古墳群も、平成２年度と６年度の２度にわたり発掘調査が行われ、３号墳では、木棺直葬の埋葬施設から鉄剣や鉄鏃とともに馬具が副葬されていた。

これら一群に先行する古墳が広戸川対岸の丘陵上に点在するが、そのうちの一つ西吉田北１号墳（方墳、辺10m）では、箱式石棺からも鉄鉗や鑿などの鍛冶工具が発見され(10)、また一貫西３号墳（方墳、辺８m）には在地製作されたとみられる馬具が副葬されていた(11)。

鍛冶工具などが古墳に副葬されること、古式群集墳のありかたなどから、これら群集墳の被葬者集団は、鉄製品加工を含む技術者集団としての性格を強くもっていたのではないかと推測されている。

この地域のその頃の古墳には、鉄製品が一般に多く副葬される傾向があって、飯塚古墳北東に位置す



第１図　的場古墳群と周辺の遺跡（国土地理院1：25,000「津山東部」）

1 的場古墳群	2 川崎六ッ塚古墳群	3 玉琳大塚	4 狐塚遺跡	5 押入兼田遺跡	6 井口車塚古墳
7 天神原１号墳	8 河辺上原古墳群	9 国分寺飯塚古墳	10 日上畝山古墳群	11 日上天王山古墳	12 美作国分尼寺跡
13 美作国分寺跡	14 河辺小学校裏古墳群	15 長畝山古墳群	16 長畝山北古墳群	17 西吉田北１号墳	18 茶山古墳群
19 一貫西古墳群	20 一貫東古墳群	21 小原古墳群	22 柳谷古墳	23 大畑古墳群	24 クズレ塚古墳
25 能万寺古墳群	26 名称未定(横穴式石室墳)	27 名称未定(横穴式石室墳２基)			

る上原１号墳（円墳、直径16m）の礫槨、２号墳（円墳、直径11m）の直葬木棺からも多数の鉄製品とともに鉄製馬具が発見されている[12]。なお、特異な鉄器として、西吉田北１号墳から鉄鐸が、また上原３号墳（円墳）から舶載とされる鋳・鍛造鉄斧が発見されている。

この地域には横穴式石室墳はあまり知られておらず、加茂川右岸の能万寺古墳群[13]、井口車塚古墳南西部に位置する天神原古墳群[14]、長畝山古墳群の南東部に位置するクズレ塚古墳[15]、柳谷古墳[16]など６世紀後半から７世紀前半に築造されたものが少数知られているにすぎない。その分布も、国分寺跡や国分尼寺跡を中心とみれば外延部に位置し、古式群集墳の立地と対称的である。

第２図　的場古墳群分布図（縮尺1：5,000）

そのうちの一つ天神原１号墳は、昭和28年に土取工事中に発見された横穴式石室墳で、応急調査されたため正確な規模などは分からないが、無袖式石室で石室内から陶棺２体、木棺１体の埋葬が発見された。副葬品に金銅装の双竜環頭大刀がある。クズレ塚古墳は、東西12m、南北９mの円墳で、長さ９m、幅1.1～1.8mの無袖式の石室が築かれており、陶棺１体が内蔵されていた。古く盗掘され、詳細は明らかでないが、昭和62年度の津山市教育委員会の調査で、提瓶などの少数の須恵器や甑、金環、鉄鏃などが発見されている。なお、クズレ塚古墳北西の山間の谷あいに位置する柳谷古墳も、同年度の中核工業団地造成に伴う発掘調査で発見されたもので、墳丘規模は、南北7.5m、東西5.6mで、石室も奥行き復元長3.3m、幅約80ｃｍと極めて小さい無袖式の石室をもった古墳であったが、石室内から銀象嵌亀甲紋が施された頭椎大刀が発見されている。同じ工業団地造成に伴い発掘調査された一貫西遺跡[17]では、７世紀から８世紀にかけての製鉄遺構が発見され、工房とみられる掘立柱建物跡など多数も検出されている。

的場古墳群は、知られている８基の古墳すべてが横穴系石室墳とみられ、位置的にみても、クズレ塚古墳や柳谷古墳などとの関連が考えられる。律令体制形成過程を考える上で、重要な位置付けが与えられよう。

文　献

1　『日上天王山古墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第60集　津山市教育委員会　1997
2　『美作国分寺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第２集　津山市教育委員会　1980
3　『美作国分尼寺跡確認調査報告書』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第12集　津山市教育委員会　1983
4　『日上畝山古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第63集　津山市教育委員会　1998

5 『井口車塚古墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第52集　津山市教育委員会　1994
6 今井堯『津山市史』第１巻原始・古代　津山市　1972
7 近藤義郎・今井堯「群集墳の盛行」『古代の日本』第４巻　角川書店　1970
今井堯『津山市史』第１巻原始・古代　津山市　1972
8 「長畝山２号墳出土の資料について」『年報津山弥生の里』第３集　津山市教育委員会　1996
9 『長畝山北古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第45集　津山市教育委員会　1992
『長畝山北11号墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第57集　津山市教育委員会　1996
10 『西吉田北遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第58集　津山市教育委員会　1997
11 『一貫西遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第33集　津山市教育委員会　1990
12 『河辺上原遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第57集　津山市教育委員会　1994
13 今井堯『津山市史』第１巻原始・古代　津山市　1972
14 行田裕美、保田義治「津山市天神原１号墳」『古代吉備』第11集　古代吉備研究会 1989
15 『崩レ塚古墳群・クズレ塚古墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第31集　津山市教育委員会　1990
16 『柳谷古墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第24集　津山市教育委員会　1988
17 『一貫西遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第33集　津山市教育委員会　1990

その他文献

平岡正宏「河辺小学校裏古墳群発掘調査報告」『年報津山弥生の里』第５集　津山市教育委員会　1998
『茶山古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第27集　津山市教育委員会　1989
『一貫東遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第43集　津山市教育委員会　1992
『小原遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第38集　津山市教育委員会　1991
『大畑遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第47集　津山市教育委員会　1993
「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（７）』　岡山県教育委員会　1975
『日上和田古墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第24集　津山市教育委員会　1981
『日上小深田遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第66集　津山市教育委員会　2000

Ⅱ　調査の経過

1　発見経過と調査契機

岡山県教育委員会による県内遺跡詳細分布調査の初年度として、津山市分の調査が平成10年度から実施されることとなった。県教育委員会から協力依頼を受け、分布調査の未実施の部分について本市も共同で行うこととなり、平成10年11月から12月にかけて市内数カ所で分布調査を実施した。

この現地踏査の過程で、金屋地区においても既知の古墳以外にいくつかの古墳の存在が明らかとなり、代表的な小字名をとって的場古墳群と命名した。新しく発見された古墳の内２基については、土地所有者からの聞き取りによって、近く予定している造成工事の対象となっていることが判明した。

平成10年12月28日付けで、所有者の石岡　基氏から文化財保護法第57条の５第１項にもとづく遺跡発見届けが提出された。

造成工事は、台風10号により甚大な浸水被害を受けた牧場地の改良を目的とするもので、地盤高を上げるための造成用の土取り予定地に、古墳が存在するというものであった。２基の古墳はいずれも過去の畑地造成などによって半壊の状況であったことと、工事計画上、現状保存は不可能であると判断されたため、事前に確認調査を実施することとした。

2　調査の経過

対象地は樹木や笹などの繁茂が激しく、平成11年１月21日から伐採に着手した。１号墳と２号墳の周辺を伐採した後、２月25日から１号墳の発掘作業を開始した。

石室玄室部には奥壁の巨石が倒れかかっていたので、これを重機で除去して石室内外の掘り下げを行った。発掘開始当初は、天井石は存在せず横穴式石室の中央部の石積みがわずかに残存していたのみで、墳丘も大部分は失われているように思われた。石室内を掘り下げる過程で、羨道部に閉塞装置と思われる石材の堆積状況が検出され、石材を露出させながらさらに掘り下げたところ、当初の予想以上に石室内が残存していることが判明した。

石室北西の山側は急斜面となっていたが、発掘の結果、墳丘と周溝がわずかに残存することが判った。北西以外の墳丘は残存していなかったが、石室に直行するトレンチを設定して掘り下げたところ、石室の北東側には盛土層がかなり深く遺存していることを認めたので、トレンチを延長して盛土範囲を確認した。

１号墳の調査と併行して２号墳の発掘を開始した。発見当初はわずかに１枚の天井石が丘陵端部に認められる程度であったが、天井石南東側の崖面に側壁らしい石積みの存在を認めたので、古墳上面の掘り下げと同時に崖面の削り出しを行った。その結果、石室の大半が遺存し、新たに３枚の天井石が山側に存在することが判った。天井石を露出する過程で中世の土器等が出土し、墳丘盛土はほとんど残存しないことが明らかとなった。精査の結果、周溝の痕跡が山側にわずかに認められた程度であった。

石室入口側から掘り進めたところ、陶棺が存在することが判明した。陶棺の身は、ほぼ完形で原位置を保っていたが、入口側の蓋は遺存しない。奥側の蓋は破壊されて身の中に落下していた。天井石に支持用のポストを添えて調査を進めたが、側壁の残りが悪いことと陶棺の存在により作業が困難となり、

重機で天井石を除去して石室内の掘り下げを行った。石室内への流入土の除去の途中で多数の銅銭が出土した。炭化物も同時に検出され、中世の段階において石室内が何らかの形で利用されたことを示していた。陶棺から奥の石室床面は荒らされておらず、副葬品が原位置のまま出土した。陶棺手前の南西側壁面に沿って箱式石棺が存在した。この周辺からも遺物が出土したが多くは攪乱を受けている。

2号墳の上面は、かつて畑として利用されていたが、墳丘に設置したトレンチの観察から中世の遺物を含む厚い土層堆積が認められたので、調査区を拡張して掘り下げたところ、掘立柱建物跡1棟を検出した。また、調査の後半になって、2号墳の南西隣で重機を用い排土作業をしていたところ、石室状のものを丘陵端部で検出した。広げて精査した結果、1基の古墳が半ば埋もれた状況で検出された。墳丘の南半部は過去の造成ですでに失われていたが、中心の竪穴式石室はほぼ全形をとどめていた。

平成11年4月17日には現地説明会を実施した。地元住民を中心に約200名の参加があった。その後、実測等の作業を続け、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行い、4月30日にすべての発掘作業を終了した。

測量および発掘調査、遺物等の整理作業は下記の体制で実施した。

津山市教育委員会　教育長　松尾康義
教育次長　菊島俊明（11年度まで）、森元弘之（12年度）
文化課長　永禮宣子（10年度）、森元弘之（11年度）
内藤正剛（12年度）
文化財センター所　長　中山俊紀
次　長　安川豊史
主　査　行田裕美
主　任　小郷利幸
主　事　平岡正宏、豊島雪絵
嘱託員　野上恭子、岩本えり子、家元弘子（整理）
臨時職員　上原香里、三谷淳子、仁木智子、上原恵美
学生アルバイト　秦　愛子

現地の発掘等の作業は津山市シルバー人材センターにお願いした。作業従事者は下記の方々である。

（調査作業員）　稲垣裕史、梶尾嘉明、加藤文平、末澤敏男、高山　守、谷口末男、野口定男、藤沢淳一郎、森二三夫

現地調査にあたっては、地権者をはじめとする下記の方々のご協力をいただいた。記して感謝いたします。

石岡牧場、石岡　基、石岡儀則、久保　惺、久保　博、久保農夫雄

発掘調査ならびに整理作業の過程で、下記の先生方および諸氏、機関からご教示いただいた。記して感謝いたします。

近藤義郎、河本　清、土居　徹、亀田修一、福田正継、中野雅美、渡邊恵理子、岡山県古代吉備文化財センター

Ⅲ　調査の記録

1　古墳群の概要

的場古墳群は、現状では８基の古墳からなる群集墳である。今回の調査の過程で、１号墳の南西には、かつて２基の古墳が存在したことを知った。２基はいずれも円墳で、横穴式石室をもっていたという。これらの古墳は、約80mから110m付近までのほぼ同じ標高沿いに、南東に向いた丘陵端部または斜面に立地する。平面分布は、南西から北東にかけて帯状をなし、今回発掘調査を実施した１・２・３号墳から北東に向かい順に古墳番号を付けた。分布の両端をなす１号墳と８号墳の直線距離は250m程である。

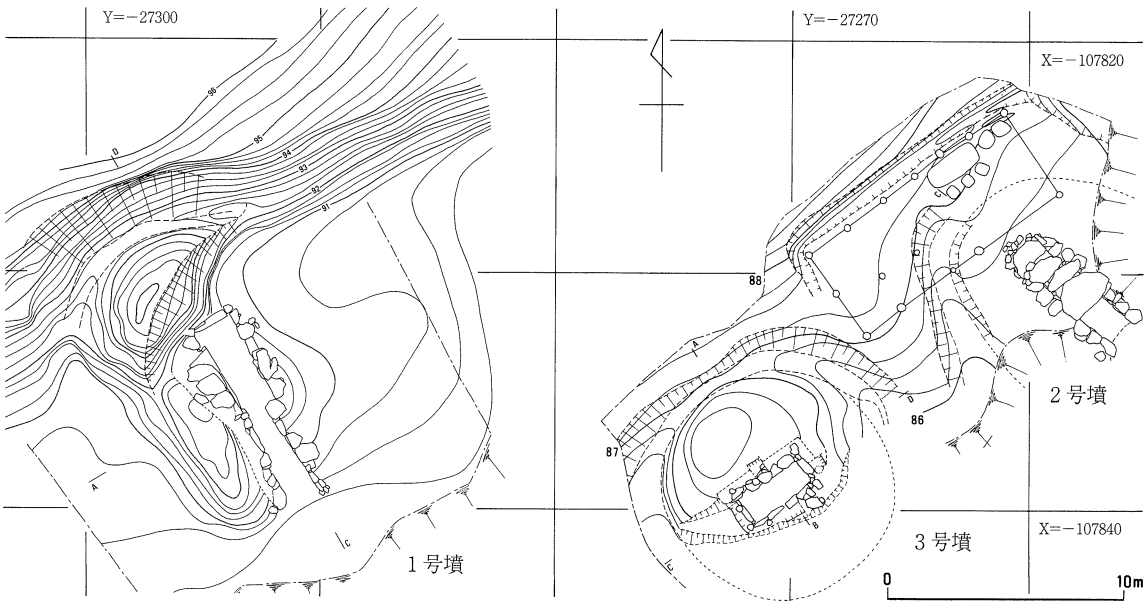
今回の調査対象となった古墳は、古墳群の西端に位置し、西から１号墳、３号墳、２号墳の順に並ぶ。山裾の丘陵端部に所在する（第３図）。

以上の古墳のうち、５号墳は今も水田のなかにほぼ完全な墳丘を残し、金屋を代表する古墳として知られてきた。さらに８号墳までは、その存在が地元民によって認識されていた。５号墳と６号墳からは遺物も採集されていて、今回の調査時に教示を受けるとともに遺物の寄贈を受けた。以下、遺物の説明を含め、発掘調査対象外の古墳について説明する[(1)]。

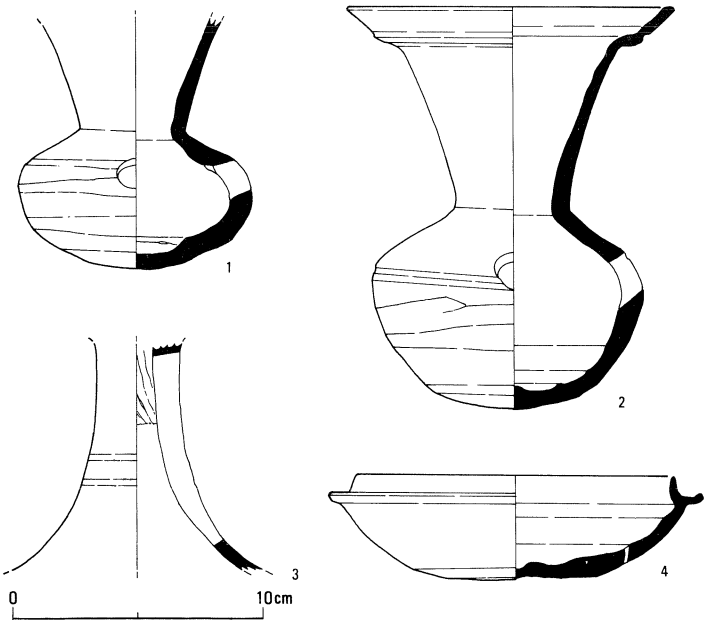
４号墳は、水田の斜面に不自然な高まりが残されているもので、石が集積されている。確実に古墳であるかどうかは断定できない。

５号墳は直径約12mの円墳で、横穴式石室が南西に開口している。石室は無袖式で、現長8.5m、同幅1.9m、高さ1.9mである。石室内に箱式石棺の可能性がある板石が存在する。所有者の久保　惺氏によって須恵器と陶棺の破片が採集されている。

須恵器には高坏脚台部の破片と瑤の頸部以下の２個体がある。脚台（３）は、今回の調査時に石室内で採集したもので、９cm程の高さをもち、２方に１段透しがある。瑤（１）は、肩部付近までヘラ削



第３図　的場古墳群調査区全体図（１：400）



第４図　的場古墳群採集遺物（１：３）

りしている。肩部以下は使用によると思われる磨滅が著しい。陶棺は、長さ30cm、幅20cm程の身底部の破片で土師質である。１辺に切断面を、底面には脚台の接合部をとどめる。底面から側面にかけての立ち上がりが緩やかなので、亀甲形であると思われる。

６号墳は人家の間に墳丘の一部と横穴式石室が残されている。円墳であろう。６号墳に由来すると思われる須恵器が久保　博氏によって発見されている。

須恵器には蓋と坏身がある。いずれもほぼ完形で、蓋の表面にはベンガラとみられる赤色顔料が付着する。坏身は、口径12.3cm、器高4.2cmで、底部の調整方法は、全体を回転ヘラ削りするａ手法に分類される。体部には棒状具による直径1.5mmの孔が底面側から焼成前に開けられている。

７号墳は道路により半壊されているが、古墳と考えられる高まりが認められる。

８号墳は半壊されていて、横穴式石室の一部が残存する。

以上の古墳の他にも、６号墳の南方の丘陵先端部にかつて古墳が存在したという伝えがあるほか、８号墳が所在する丘陵の上方に古墳が存在したという伝えもあるが、現状では確認できない。

以上のように、現在消失したものを含めると的場古墳群は総数10基以上の古墳からなる。内部主体の確認あるいは想定できるものはすべて横穴式石室のようで、墳形も円墳に限られるようである。こうした横穴式石室を埋葬主体とする古墳の群集としては、津山市内でも有数のものである。

註

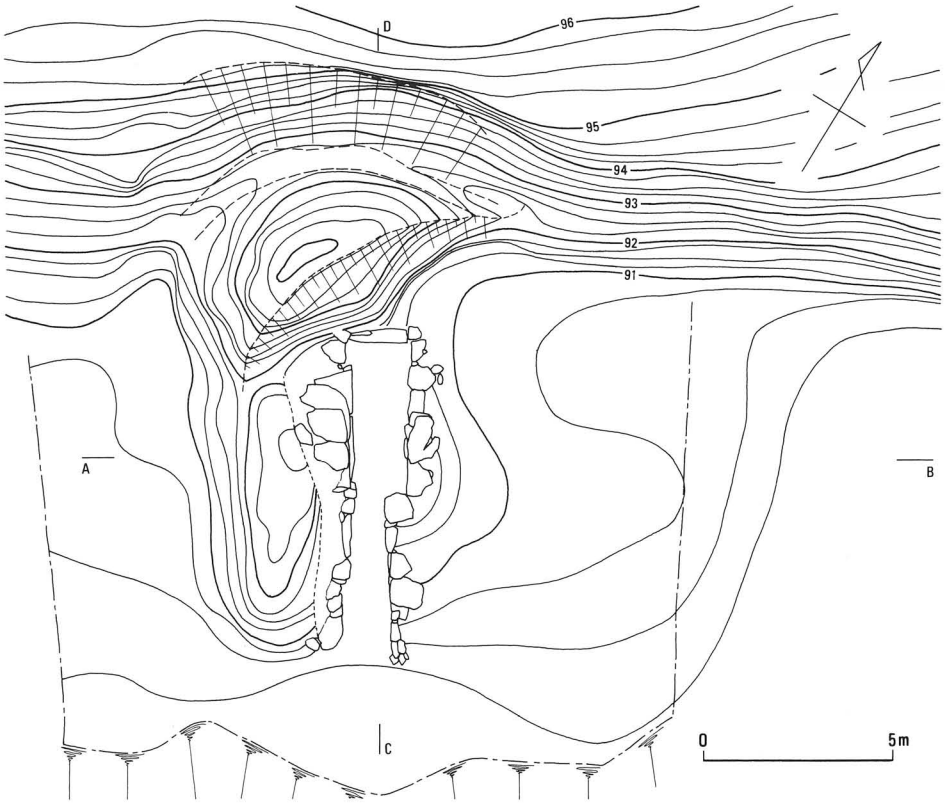
1　以下の古墳の記述にあたっては、岡山県古代吉備文化財センターが実施した遺跡分布調査データを参考にさせていただいた。記して感謝します。

2　1号墳

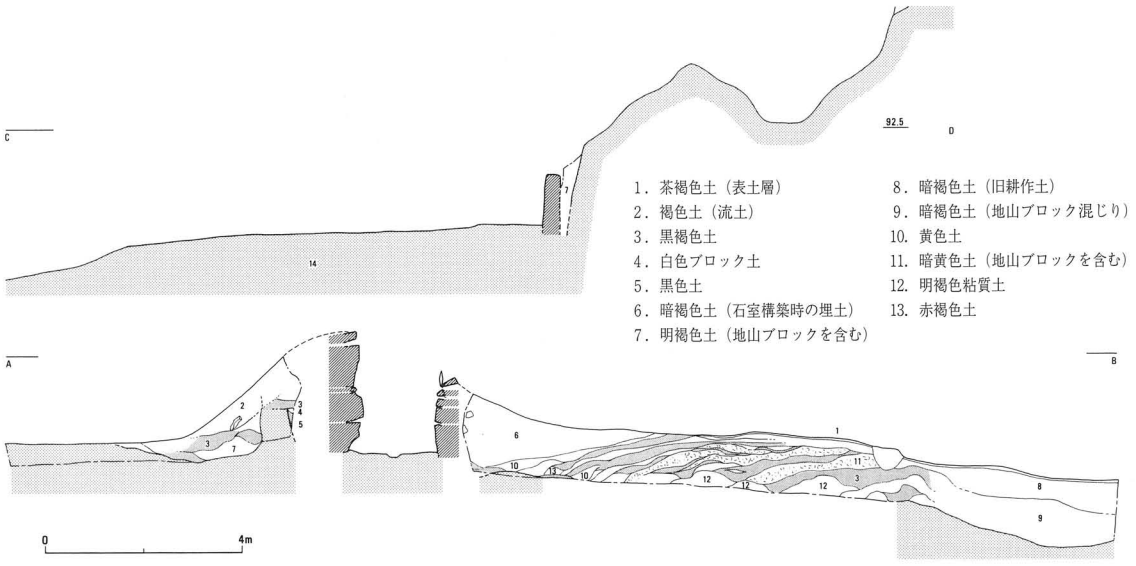
A　墳　丘

1号墳の立地する場所は北西から南東へ緩やかに伸びる斜面であるが、背後は段差5m程度の急斜面となっている。その急斜面を一部カットして周溝として利用しているようである。

墳丘の遺存状況は極めて悪く、現状では東西7m南北12mの不整形で、最高所で3m程度の高さを持



第5図　1号墳平面図（1：200）



第6図　1号墳墳丘断面図（1：160）

第７図　１号墳石室平面図（１：50）

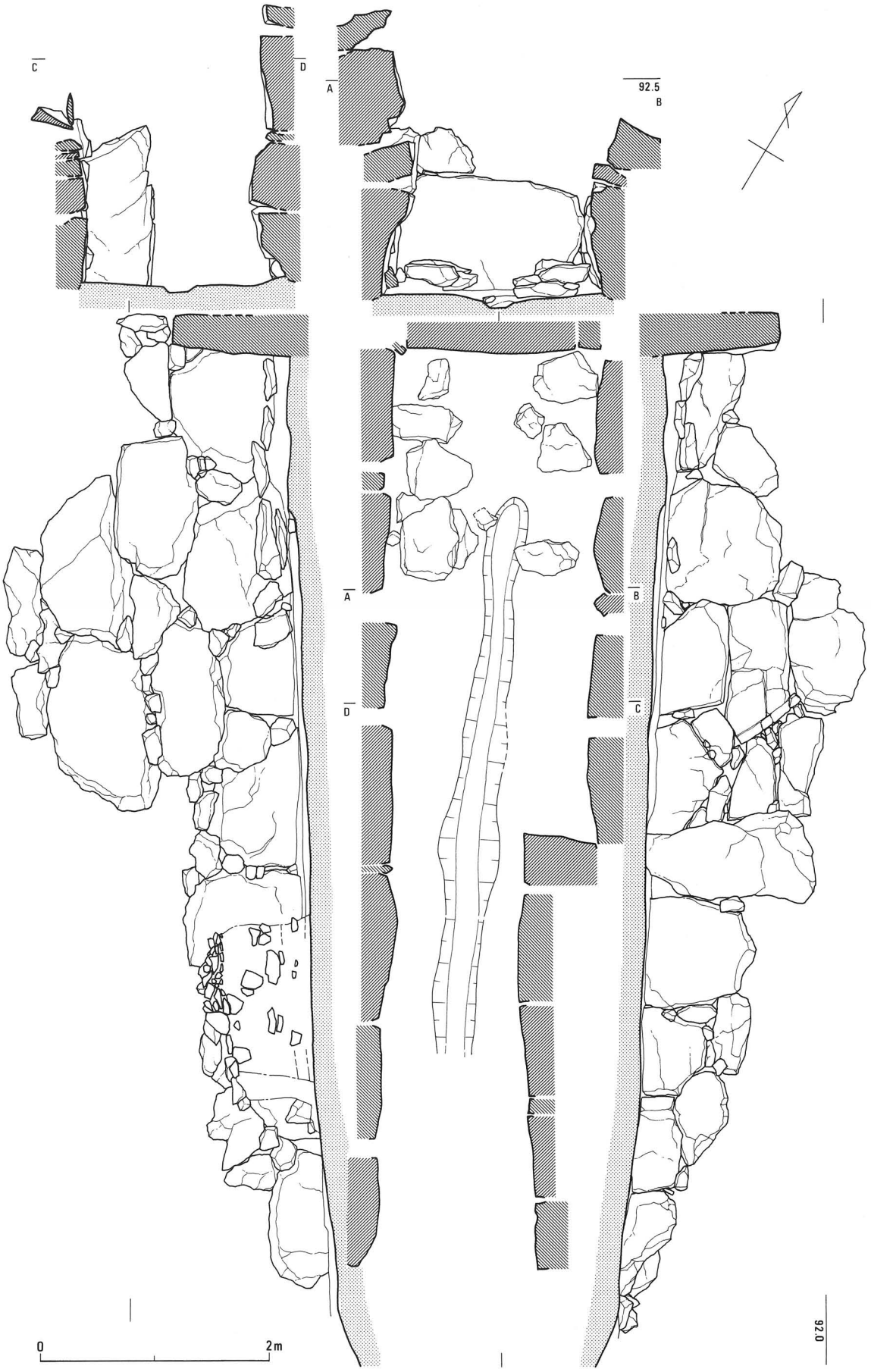
つ。そのうち本来の形状を保っていると見られるのは、石室北側から北東部のわずかな部分のみである。墳丘基底部の高さは山側の周溝底と石室南端で2.5mの差がある。

墳丘の構築方法については、石室主軸方向には断ち割りを行っていないので詳細は不明であるが、石室に直行するトレンチでの所見を示す。それによると石室の遺存状況の比較的よい西側では、地山を50cm程度掘り込んで石室を構築している状況が認められる。またその外側についても、地山を若干掘り込み、互層の盛土を行っている。東側については後述の互層の盛土を除き、石室構築時の盛土は１層で一気に埋めている。また、石室構築時の地山の掘り込みは若干認められるようであるが、本来の地山レベルが低いためであろうか明瞭ではない。

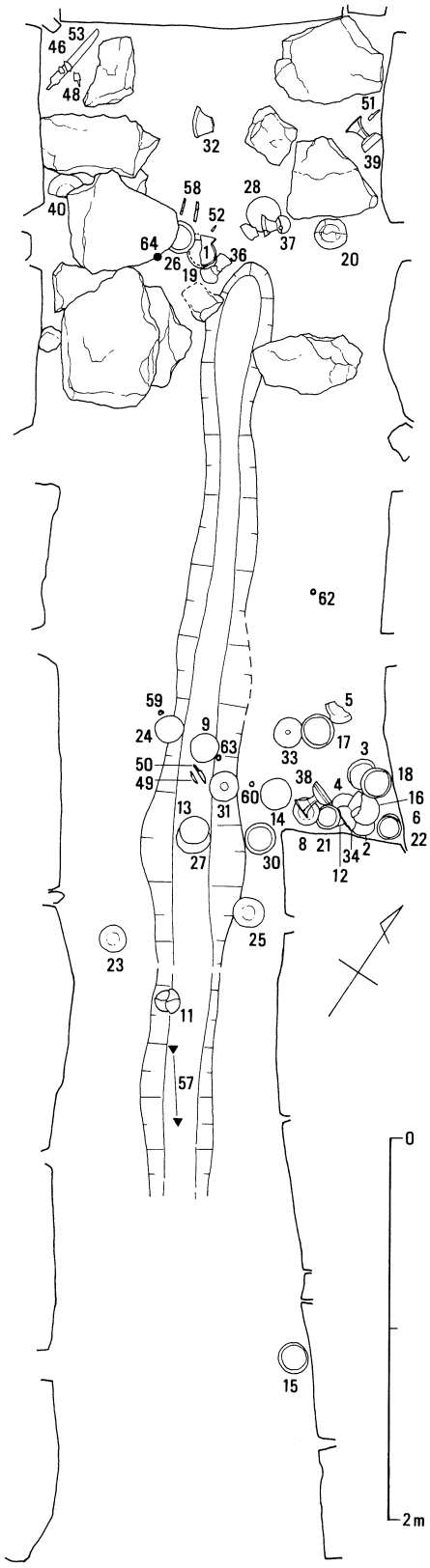
一号墳の墳丘で特筆すべき点は、墳丘北東部に互層の盛土による地形の整形が認められる点である。現状では墳丘はほとんど遺存していないが、よく見ると90m75cmの等高線が大きく石室から北東側に伸びていることに気付く。この部分にトレンチを設定したところ、石室から北東方向へ９mにわたって人為的な互層の盛土が認められた。この部分を墳丘として認めるならば直径が20mを超えることになるが、北側、西側、南側の状況から見るとそれは考えがたい。あるいはこの部分を「突出部」と推定することも不可能ではないが、周囲の状況からはその可能性は薄いだろう。

ここでは北東方向に人為的な盛土が存在し、あるいはそれが削平された造出しあるいは突出部である可能性もあるということに止めておく。

これらの状況から墳丘の当初の規模を推定してみると、径13m、高さ３m程度の円墳と考えられる。



第８図　１号墳石室実測図（１：50）



第９図　１号墳遺物出土状況（１：40）

B　周　溝（第３図）

周溝は石室背後の山側にのみ残っている。

現状で規模は長さ８m、最大幅４m程度であり、深さは山側から最大2.5m、墳丘側からは１m程度である。この周溝下底のラインは現況ではかなり整った円形を呈している。しかしながら試みにこの周溝下底ラインで墳丘を復元してみると直径が10m程度となり、石室の1/3が墳丘からはみ出してしまう。この点からもこの１号墳の墳丘は本来不整形であったことが推定される。

C　石　室（第５・６図）

石室の遺存状況は悪く、天井石はすべて外されている。また、石室側壁については基本的には１段、最大でも４段、羨道も基本的に１段、多くても２段程度しか石材が遺存していない。奥壁も高さ１m程度の薄い板状の石が１石遺存しているのみである。

現状の羨道入り口部分から奥に向かって約1.5mから3.7mの部分には閉塞石が残っていた。現状で高さ1.1mである。この閉塞石については表面は拳大から人頭大の角礫で覆われているが、これらの石を除去するとその内部にはほとんど礫は存在せず、土を盛り上げた後に表面に石を貼ったような状態であった。

床面は奥壁よりも羨道入り口側が約40cm低くなっている。また、石室から羨道へ向かってほぼ中軸上に30～50cm、深さ10cm、長さ５mの素掘りの排水溝が存在している。

石室は現状で全長8.5m、石室長４m、石室最大幅1.7m、羨道長4.5m、羨道最大幅1.2mの左片袖式の横穴式石室である。石室の高さについては右側壁の石材から推定することができる。というのはこの部分は高さ50cmを超える石を３段に積んだ上に高さ20cm強の小さな石が高さを調節するように積まれているのである。つまりこの石の上に天井石が乗っていたと考えられるので、それから推定の高さは2.5m程度となる。また、羨道の高さは推定できる材料がないので、不明と言わざるを得ない。

石室の奥壁側に左右の側壁に沿うように棺台と思われる扁平な石が置かれている。右側壁側のものは一辺50cm程度の石を３つ並べその間にやや小さ目の石を配置している。長さは約２m幅70cm程度の規模となる。左側壁側のものは、右側よりもやや小さい石を３つ並べている。こちらは長さは同じく約２m、幅60cm程度である。

D　遺物の出土状況（第７図）

１号墳の遺物は一部のものを除く大半が石室内の床面から出土した。奥壁から南約２ｍにかけての左右両側壁沿いには、扁平な石が３～４個並んだ状態でみられ、これらは先述のように棺台となる可能性が高い。遺物はこの石の周辺と袖部のコーナー付近の２箇所に集中しており、各地点において須恵器、鉄器を中心とした遺物が出土した。以下、奥壁側から順にみていく。

奥壁沿いの右側壁とのコーナー部では鉄刀（53）、及び鉄鏃（46・48）が出土した。その地点から右側壁沿いに約0.6ｍ南には須恵器の壷（40）が出土した。また、左側壁沿いの２つの平石の間からは、須恵器の高坏（39）及び刀子（51）が出土した。石室奥壁寄りの中央部には、土師器の甕（１）、須恵器の坏身（19・20・26・28）、𤭯（36・37）、壷（32）、紡錘車の鉄芯と思われる鉄製品（58）などが出土した。さらに、石を除去し、精査した段階でガラス小玉（64）が出土したため、他の玉類の探査につとめたが、この１個体の発見にとどまった。

石の南端から玄室袖部の遺物集中地点まで約２ｍの間は遺物の空白地帯であり、遺物は全くみられなかった。中央よりやや左側壁寄りに鉄地金銅張の耳環１個（62）が出土したのみである。

最も遺物が集中して出土したのは袖部のコーナー付近から玄室と羨道の境界部分にかけてである。遺物は須恵器蓋坏、高坏、壷、鉄鏃（49・50）などがあり、銀製の耳環が一対（59・60）および鉄地金銅張の耳環が１個（63）出土した。63の耳環については先の62と対になるものと考えられる。これらの遺物は、１箇所にまとめられた状態で出土したことから、追葬のときにかつて副葬されていたものを片付けたものと推測される。

その他、石室の閉塞石埋土中から須恵器の破片や鉄製馬具、不明鉄器などが出土し、閉塞石を除去した後に検出した床面からも須恵器の坏蓋（11）が出土した。また、この付近からも鉄地金銅張の耳環が１個（61）出土した。さらに、閉塞石の外側からも須恵器の坏身が１個（15）出土した。

以上の出土状況からは、棺が据えられていたと推定される奥壁に近い部分に遺体の埋葬が行われ、奥壁付近の遺物はこの遺体に伴っていたと考えられる。また、片づけられた遺物の中及び閉塞石付近から出土した耳環の個数からは、遺体は少なくとも３体あったことが推測される。

E　出土遺物

出土遺物には土器と金属製品、そしてガラス製品がある。以下、順に概要を述べる。

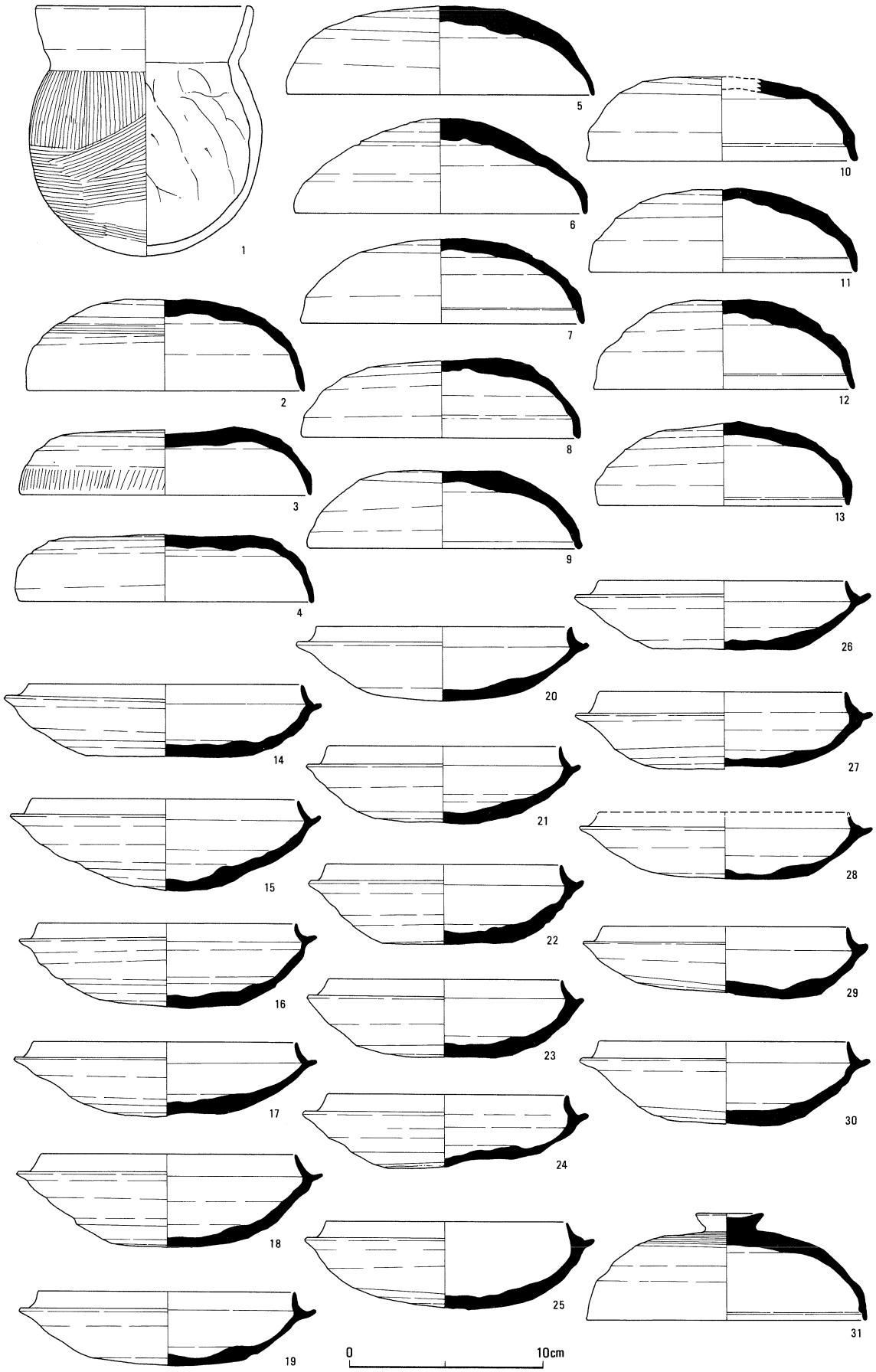
１．土　器（第10-12図）　土師器と須恵器がある。土器の総出土個体数は45個体で、うち土師器は１個体にすぎない。ほかの44個体はすべて須恵器である。

土師器（１）　球形の胴部をもつ小形の甕である。頸部から立ち上がる口縁部の外面にはわずかな段をもち、二重口縁の痕跡をかすかにとどめる。胴部内面はヘラ削り、外面はハケメを施している。

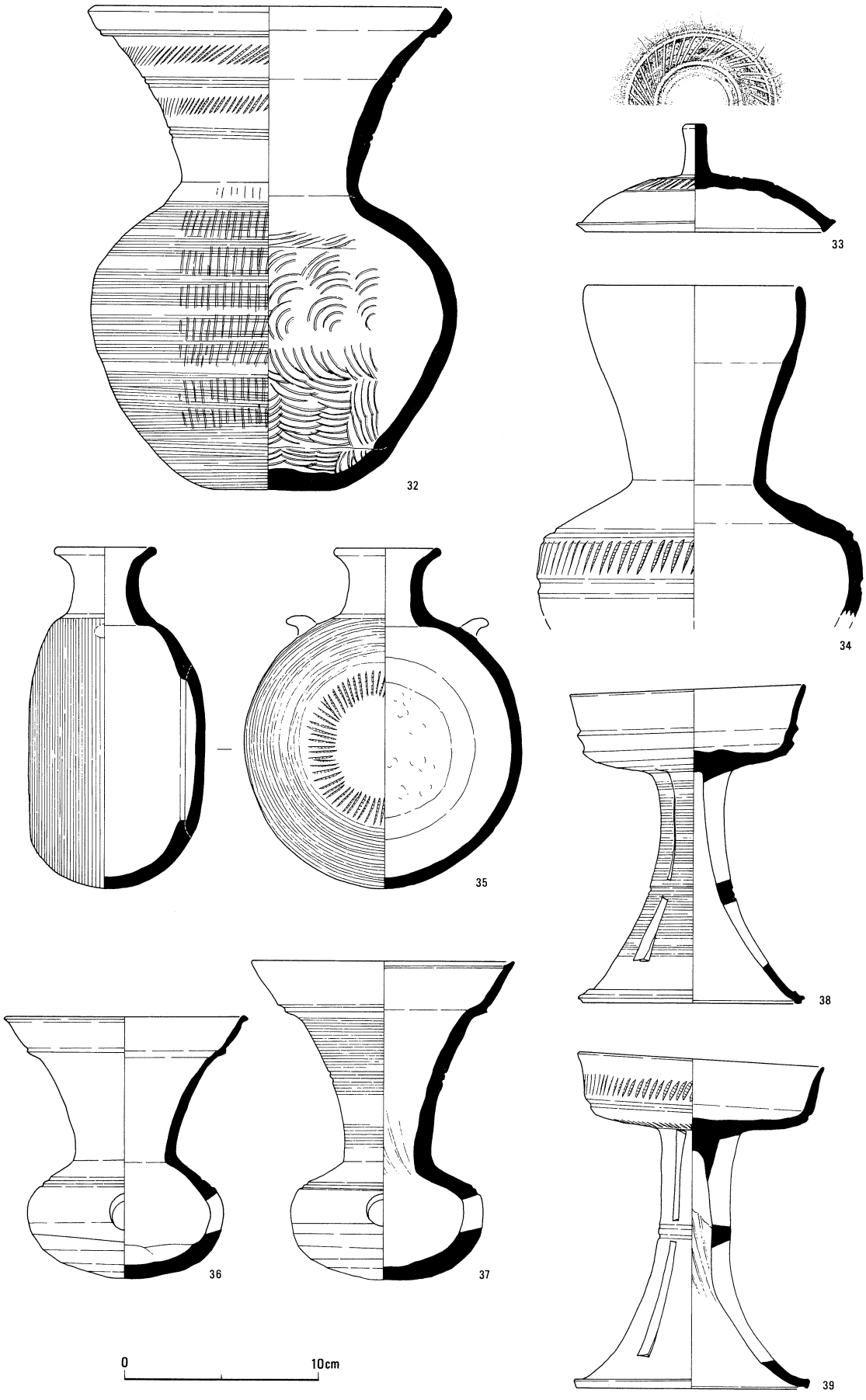
須恵器（２-45）　須恵器には坏蓋、坏身、有蓋高坏蓋、広口壷、長頸壷、壷蓋、提瓶、無蓋高坏、𤭯などがある。

坏類は、いずれも蓋にはかえりをもたない、坏Ｈと分類される形態のもので、胎土や焼成の違いから３種類に分かれるようで、生産地の違いを示すものかもしれない。

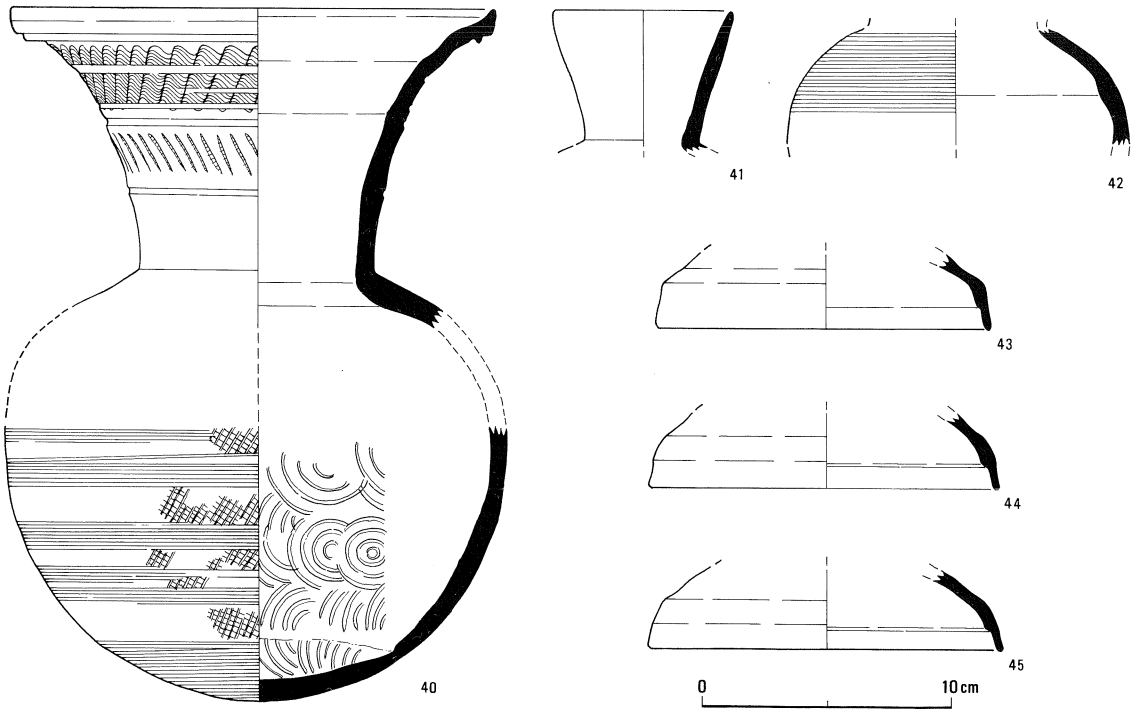
坏蓋（２-13、43-45）は法量、製作手法や形態から３種類に分類できる。２が１類で、口径14.3cm、高さ4.8cmである。口縁部の立ち上がりが他よりも大きい。天井部の周辺にはカキ目を加える。天井部はヘラ切り後に回転ヘラ削りを施しているが、中央部にはヘラが当たらず、ｂ手法（１）に分類される。２類（３-６）は、口径が14.7cmから15.8cmまで、高さは3.5cmから4.9cmである。このうち、３・４は



第10図　1号墳出土遺物1（1：3）



第11図　1号墳出土遺物２（１：３）



第12図　1号墳出土遺物3（1：3）

低く平らな天井部をもつもので、形態的には他と区別される。3の口縁外面には縦方向のヘラ描き文を加えている。2類の口縁端部は丸くおさめる。製作手法は、いずれも天井部を残さず回転ヘラ削りするａ手法である。3類（7-13・43-45）は口径が13.2cmから14.3cm、器高が4.0cmから4.4cmのもので、口縁部内面に段の痕跡をもつものが多く認められる。口縁端部近くに残すもの（9・13）と、やや高い位置にもつもの（7・8・10-12・43-45）とがあり、ほとんどが後者である。9の内面中央には、同心円文の痕跡が残る。製作手法はヘラ切り後に周辺部だけを回転ヘラ削りするｂ手法が多く認められる。他はａ手法である。

坏身（14-30）には、胎土や焼成などから、坏蓋との対応関係が推定できるものがいくつか存在する。身14と蓋4、身17と蓋2、身22と蓋12がセット関係をもつと思われる。このことを含めて分類すると、17が1類に相当する。口径13.1cm、器高は3.9cmで、ａ手法。2類（14・18）は、口径が14cm弱、器高は3.7cmと4.8cmである。いずれもａ手法である。その他は3類に属し、口径は11.8cmから13.4cmまで12cm台に集中する。製作手法はａ、ｂ手法が半々である。これらは法量以外には、坏蓋ほど形態上の差異はみられない。

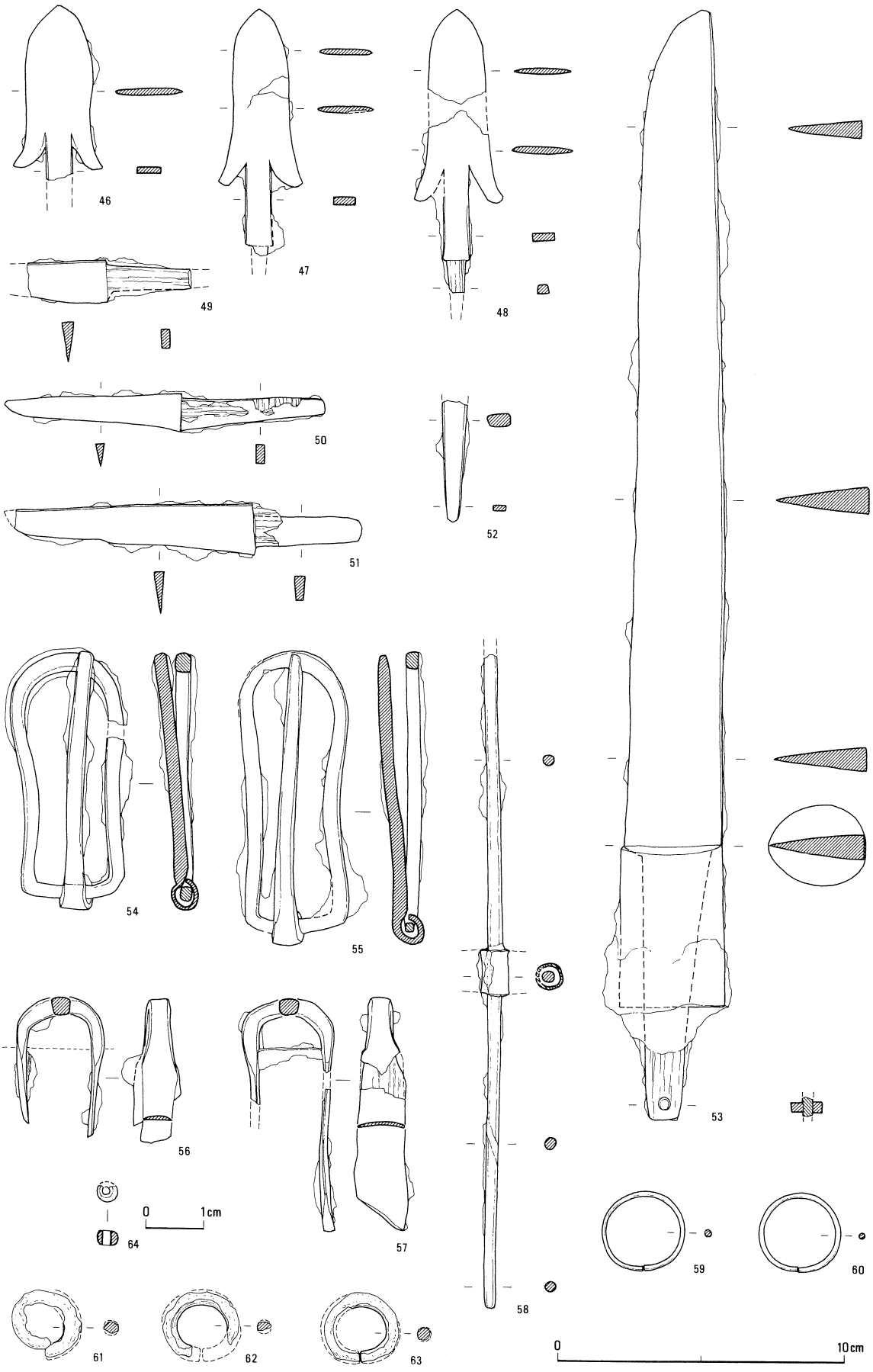
無蓋高坏蓋（31）は天井部にカキ目を施し、口縁部内面に明確な段をつくるものである。形態は坏蓋1類に類似する。

広口壷（32・40）は2個体あり、いずれも頸部を凹線文によって3段に区切り、刻目文や波状文を加える。口縁部のつくりは異なる。

長頸壷（34）は、胴部から口縁部までしか残らないので、下半部の形状は不明である。よく張った肩部と胴部中央に凹線文を施し、間に刻目文を加える。精良な胎土で焼成はやや甘い。

壷蓋（33）は長頸壷の蓋である。中央に棒状の高いつまみをつけ、周囲に放射状の刻目文を斜めに巡らせている。口縁部には外傾する端面をもち、特異な形状である。胎土焼成とも34と同様である。

提瓶（35）は、口縁部をそのまま丸くおさめたもので、肩には棒状把手の痕跡を残す。胴部の片面に



第13図　1号墳出土遺物4（1：2）

刻目文がある。

無蓋高坏（38・39）は小さな坏部に長脚がつくもので、脚台には3方2段透しがある。同形だが、坏部や脚端のつくりは異なる。

甕（36・37）は、頸部の長短が認められる。

以上の他に、提瓶あるいは壷かと思われる破片（41・42）が出土している。

2．金属製品　　鉄刀1、鉄鏃3、刀子4、絞具2、紡錘車芯棒1、不明鉄器2、耳環5がある。

鉄刀（53）　刃渡り29cm、現長38.5cm、刃部幅3.4cmで、柄部には長さ5.5cmの鏨が付く。柄頭ちかくに目釘がある。

鉄鏃（46-48）　いずれも腸抉柳葉である。鏃身の大きさにはややばらつきがみられる。関には棘状突起はない。

刀子（49-52）　同様の形状をもつ。完存する50は細身で、茎の糸巻き痕が残る。52も刀子の茎と思われるが、厚さの割りに幅が狭い。

絞具（54・55）　同形同大のもので、鉄製。先端は丸みを帯び。中程をやや狭めている。馬具であると思われる。

紡錘車芯棒（58）　長さ22.6cm、直径約4mmの鉄製棒状品で、一端を欠く。中央部に、幅1.6cmの鉄板を巻き付けている。この位置に紡錘車が装着され、鉄板は芯棒との固定するための留め具の性格をもつと思われるが、他にこのような例を知らない。木製紡錘車の存在をうかがわせるものである。

不明鉄器（56・57）　中央部を半環状とし、両端を平たく叩き伸ばした鉄製品である。木材を挟み込むか、木材に打ち込まれていたもので、環状部分は面取りをして丸みを帯びる。いずれも羨道部の閉塞石下底付近から絞具とともに出土しており、馬具に関連するものかもしれない。

耳環（59-63）　銀環と金環がある。59・60は同形同大の銀環で、ペアをなす。表面は黒く酸化するが断口は白銀色を呈する。61は錆化して鉄芯だけが遺存する。62・63は緑青で覆われているが、部分的に金箔をとどめている。セット関係にあったと思われる。

3．ガラス製品　　ガラス小玉（64）が1点ある。濃青色を呈し、半分近くを欠失する。

註

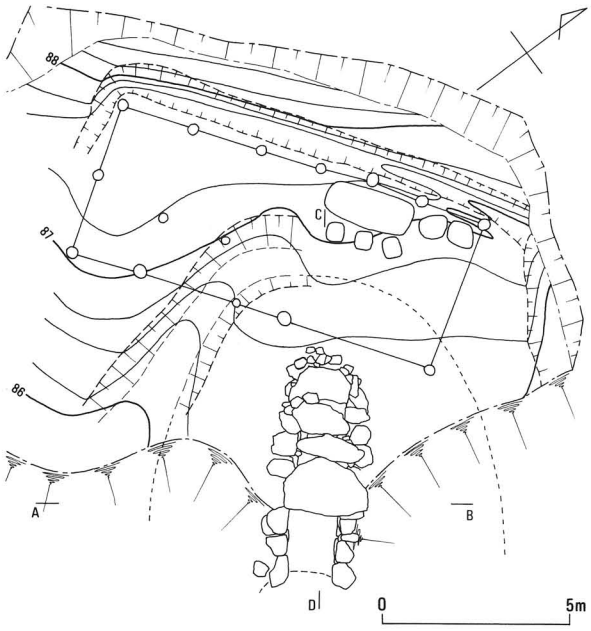
1　須恵器坏類の製作手法の分類は、下記文献によった。
『大枝山古墳群』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第8冊　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1989

3　2号墳

A　墳　丘

本古墳群が位置する斜面は田畑に利用するため、段々に造成されている。2号墳の調査前の状況は、かつて畑地として造成使用されていたため、全くの平地の状態であった。石室部分は上位の畑面に、入り口部分は下位の田んぼ面上に位置する。このため、古墳の墳丘を想定させる条件は何もなかった。しかし、僅かに石室の天井石、及び入り口部分の側壁と思われる石材が露出していたことから、横穴式石室墳であることが判明した（図版3）。

従って、墳丘の規模については全く不明といわざるをえない。ただ、発掘調査で石室主軸の左上方部に周溝と思われる弧状の溝が検出されている（第14図）。この溝が本墳の周溝になると考えると、石室主軸に直交する墳丘の最大径は10m弱になると想定される。



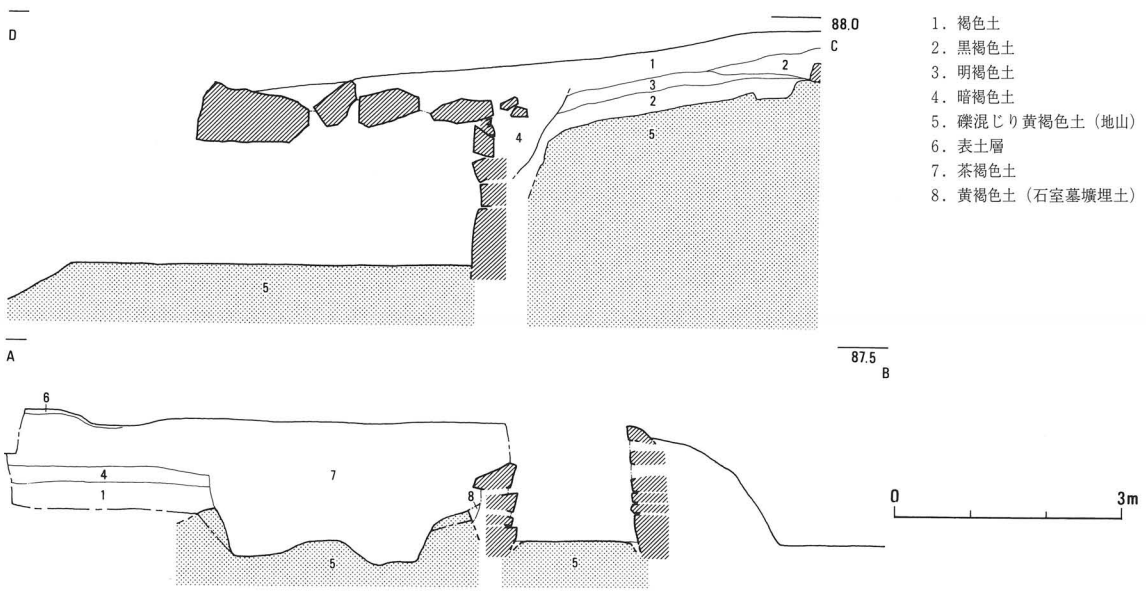
第14図　2号墳平面図（1：200）

次に、石室主軸ラインでの墳丘径であるが、前述の弧状の溝、及び石室の遺存状況から推定すると、約9m位に復元できようか。入り口部分の側壁の石がもう少し続いていたとすれば、自ずとこの値は大きくなる。

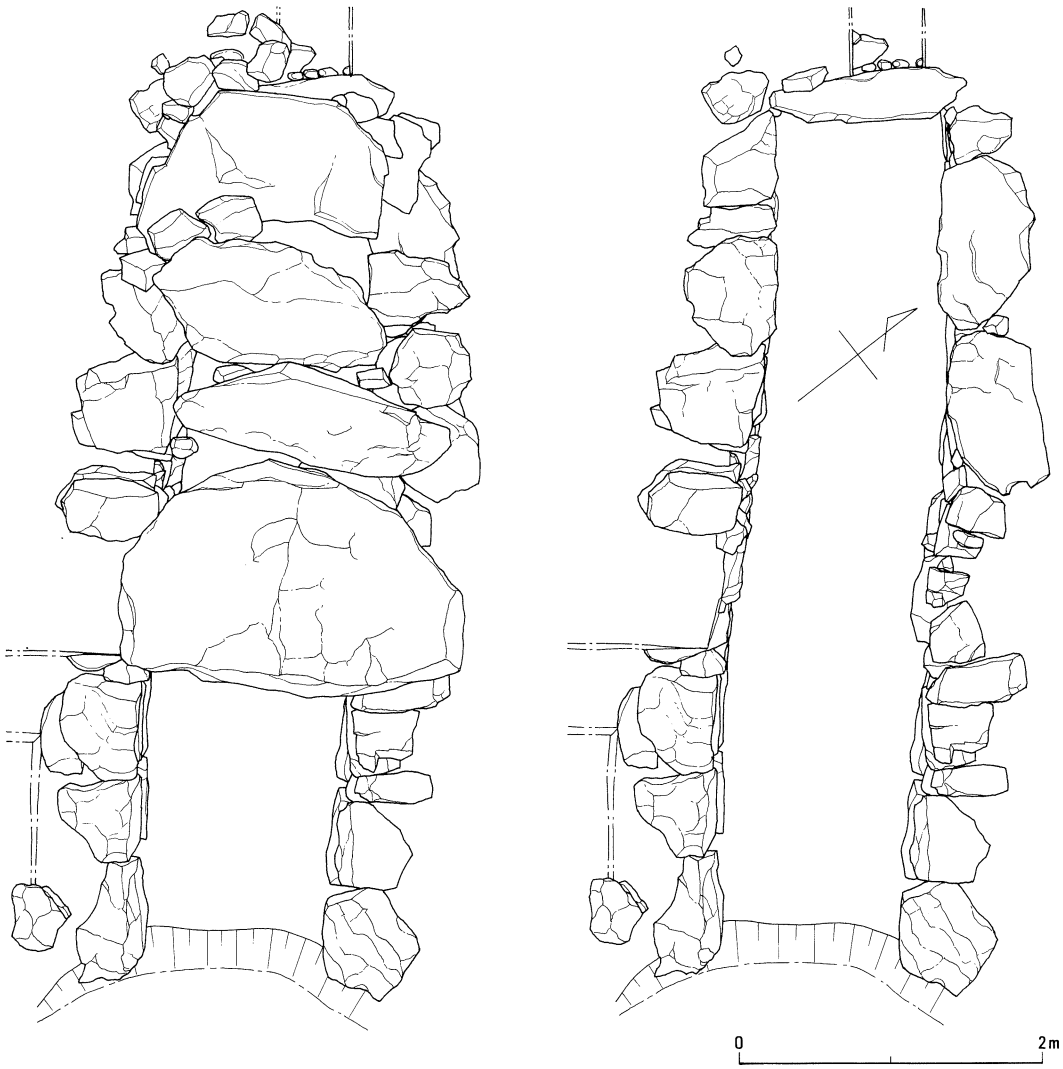
いずれにしても、直径10m前後の円墳であることには間違いあるまい。高さについての手がかりはなく不明である。

B　周　溝

周溝と思われる弧状の溝は石室主軸の左上方で検出されただけである（第14図）。このことは主軸上方から右方向にかけては周溝底面の



第15図　2号墳墳丘断面図（1：150）



第16図　2号墳石室実測図1（1：50）

レベルがもう少し高かったことが考えられる。遺存している溝の長さは約7mにわたる。幅は山側から谷側に向かって若干広くなる。検出面での幅は山側で約2m、谷側で約2.5mである。底面での幅は山側で約1m、谷側で約1.5mである。底面での傾斜はかなりきつく、山側と谷側の比高差は約80cmである。

石室主軸ライン上で、石室掘り方と溝との距離は約2mである。

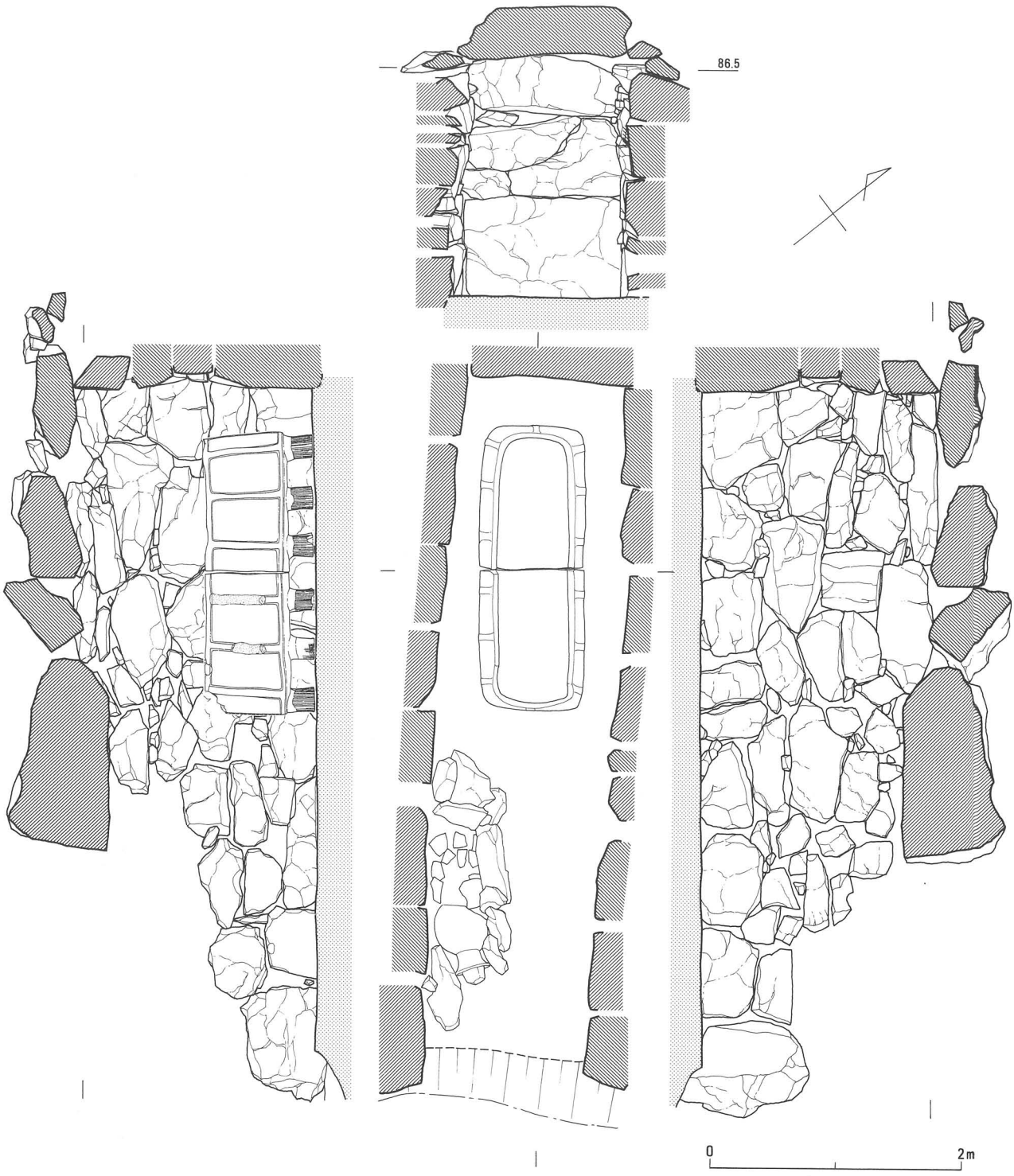
溝からの出土遺物はなかった。

C　石　室（第16・17図）

床面での現存長5.6m、幅1.25～1.4m、高さ1.6～1.9mを測る無袖式の横穴式石室である。天井石は奥壁側から4枚が残っていた。4枚目の石が調査前に露出していたものである。5枚目以降が失われていると同時に、両側壁の石も上半部が失われている。

奥壁の石組みは大きく3段に分けることができる。下段に高さ80cm強の方形の一枚石を配置し、その上の中段に約60cmの高さで3個の石を組み合わせている。上段には高さ約40cm強の一枚石を使用している。

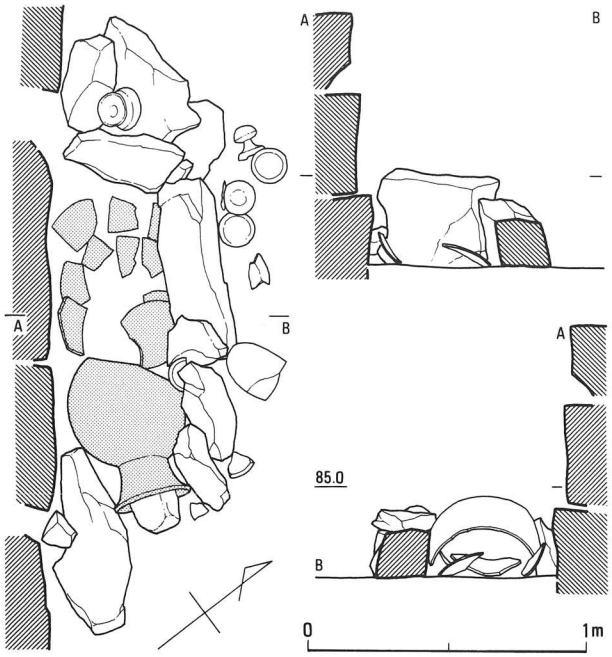
側壁はいずれも持ち送りではなく、ほぼ垂直に積まれている。使用されている石材は50～100cm位



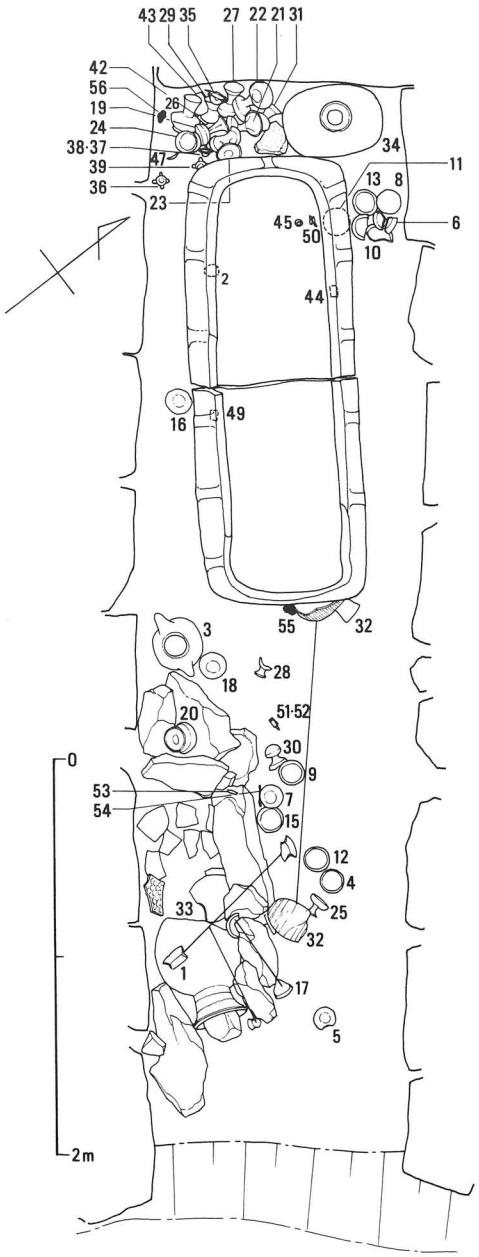
第17図　2号墳石室実測図2（1：50）

の大きさで、特に一定の基準はないようである。石積みは乱石積みのようであるが、よく観察すると4段に積まれているようにも見られる。入り口部分の小口両側壁の石は奥壁側の石と比べると、石を立てたように配置されている。これは入り口に近い状況を暗示しているのかもしれない。

時間的制約の中で、石室の石材を除去して掘り方を検出するまでにはいたっていないが、奥壁の裏のトレンチでは裏込め石が確認されている。



第18図　箱式石棺実測図（１：30）



第19図　２号墳遺物出土状況（１：40）

D　箱式石棺

石室手前の南西壁面に沿って、１基の箱式石棺が設置されている。陶棺との位置関係から追葬と考えられる。北東側には４個の角礫を列べて側壁とし、南側は石室側壁をほぼそのまま利用するが、石室の入口側には１個の細長い角礫を添える。このため、石棺の主軸は石室とやや斜交する。幅50cm、高さ35cmの板石を立てて奥の小口とする。小口の外側にはさらに３個の角礫を積み重ねている。

須恵器甕の胴部下半を割って、破片をまばらに棺内に敷いて土器床とする。土器床をなす破片はすべて器表を上面となっているので、遺骸の覆の可能性もある。土器床は、石棺の奥半分に限られ、石棺中央にはやや大きめの破片を両側に立てる。甕の上半部は、口縁部を手前に向けて両側壁の間に置かれる。口頸部には円礫を差し込んで棺の小口としている。頸部以下の胴上半部は、遺骸の一部を覆う形となっている。蓋石は検出されなかった。周囲にもそれらしい石材は見あたらなかったので、もともと存在しなかった可能性が高い。

石棺内法は、長さ1.05m、最大幅0.43m。棺内からは副葬品は出土せず、遺骸の頭位方向は不明である。

E　遺物の出土状況（第19図）

横穴式石室内の遺物は、石室奥（１群）と手前側の床面（２群）、陶棺内（３群）に大きく分かれて出土した。石室奥の１群は、陶棺と奥壁の間約40cm程の空間（A群）、奥壁に向かって右側、陶棺と側壁の間（B群）、陶棺の左側（C群）に細別される。

A群には須恵器、馬具、武器、鉄滓がある。右側に大形横瓶が、左側空間に瑞、高坏、長頸壷が隙間なく出土した。瑞や高坏など比較的器高のあるものは、多くが倒れた状態で出土したが、本来は正立し

た状態で副葬されたと思われた。横瓶と他の須恵器の間には板石が１個置かれていた。土器の支持用かもしれない。左側の土器群とともに雲珠、辻金具などの馬具一式が出土した。雲珠に錆着して鉄鏃の頸部と考えられる鉄器が１点ある。精査したが鏃身は発見されなかった。あるいは錆化してしまったのかも知れない。奥壁に向かって左端には鉄滓１個が置かれていた。本グループは須恵器坏類を含まないのが特徴で、先述した供献形態の器種に限られる。

Ｂ群は須恵器の坏類のみからなる。うち１点は陶棺の脚間に位置する。一部の個体は破損して出土したが、本来は完形であったと考えられる。３個の坏身は正立して、２個の坏蓋は逆転して出土した。蓋を開けて供献したような出土状況である。

Ｃ群は須恵器坏身１点と土師器甕（２）で、坏身は逆転して、甕は陶棺脚間から正立して出土した。

第２群は、陶棺前面から、手前の箱式石棺付近にかけてのもので、須恵器、土師器、鉄製武器、鉄滓がある。横瓶（32）や坏身（17)、土師器甕（１）のように破片となって離れて出土することが示すように、少なくともこれらのいくつかは後世の攪乱を受けたことが明らかである。原位置を留めていると判断されるのは、次のとおりである。

土師器甑（３）は箱式石棺の奥に位置し、他古墳出土例の多くと同様、倒立して置かれている。鉄滓は陶棺前面中央の脚付近に位置する。須恵器坏類は箱式石棺の右側に配置される。その多くは原位置を保つと判断される。17・18以外の坏身は正立し、坏蓋は逆転するもの（４）と正立するもの（５・７）の両者がある。高坏（20）は完形で、箱式石棺奥の小口外石の上に逆転して置かれていた。須恵器の多くは箱式石棺の埋葬時に副葬された可能性がある。鉄滓（55）は陶棺手前の足下に置かれ、陶棺埋葬を意識したものであろう。

第３群は、陶棺内出土の遺物で、耳環１、鞘尻金具１、刀装具片１、不明鉄器１からなる。耳環と不明鉄器及び鞘尻金具は奥の北東側から、刀装具は中央の南西側から出土した。すべて陶棺底面からの出土であるが、棺内の少なくとも一部は攪乱を受けていて、これらが副葬品のすべてでないことはいうまでもない。

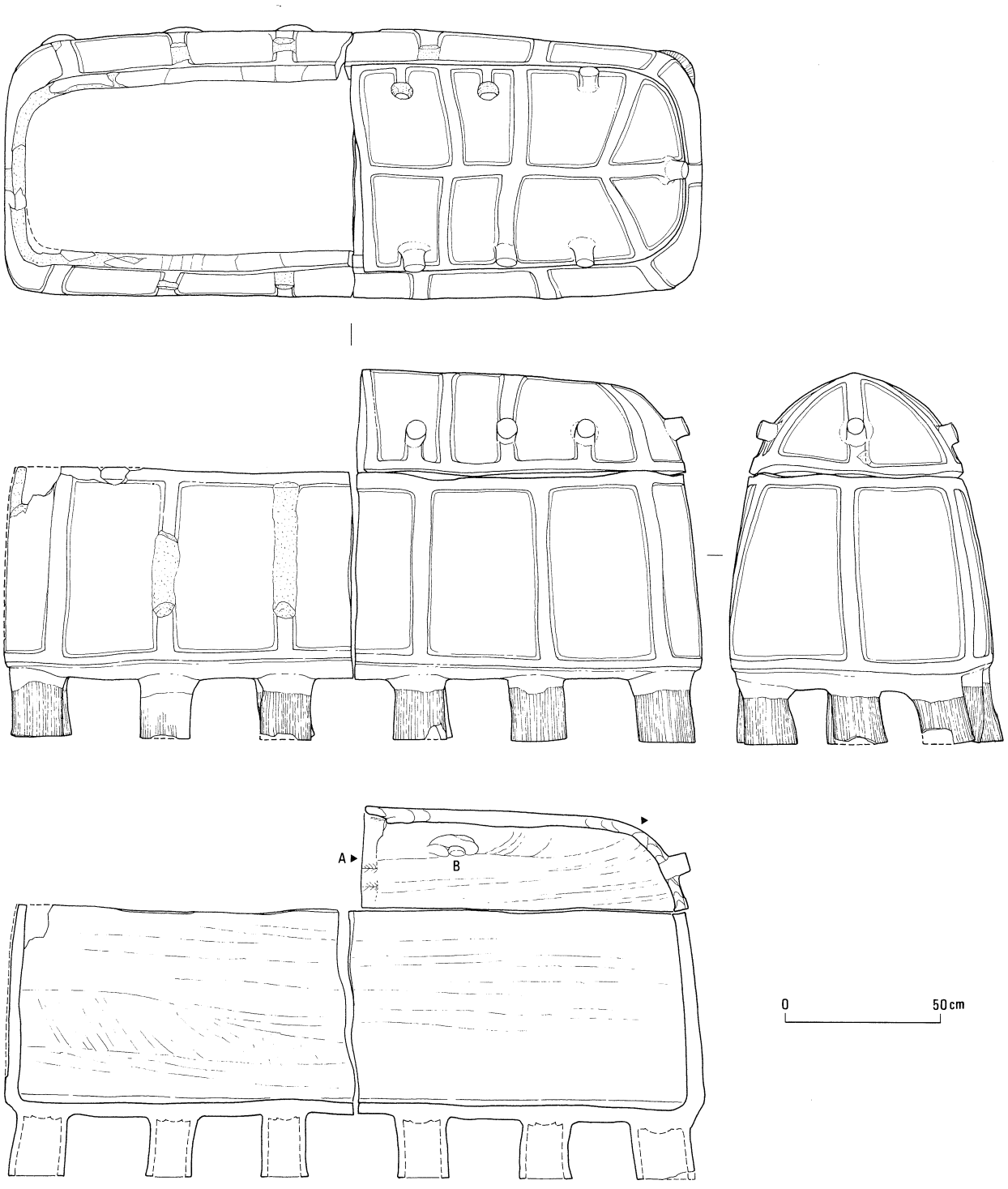
Ｆ　陶　棺（第20図）

土師式亀甲形陶棺が1基ある。石室中央奥の、地山を平坦に削り込んだ床面にそのまま置かれていた。焼成前に４分割され、手前側の蓋部の大半を失っているほかは、保存状態は比較的良好である。全長2.25m、高さ1.19m、最大幅0.87mで、棺底下面から身部上端までの高さは0.86m、脚部高0.2m、蓋部の高さは0.33mである。明赤褐色で、良好に焼成されている。黒斑や赤色顔料および化粧土の塗布は認められない。

身部と蓋部の内外面はナデ仕上げで、タタキなどの痕跡は認められない。

蓋部には14個の突起が付く。現存するのは内５個で、断面は円形、直径・長さともに６cmをはかる。身部下端と、蓋部との合わせ目に横位の突帯２列がある。蓋部天井の主軸に沿う突帯と、これら２列の突帯の間には、縦位の突帯がそれぞれ配置される。縦位突帯の位置は、蓋部と身部では必ずしも一致しない。縦位突帯は横位突帯の後に付けられている。遺存する片側の蓋部では、縦位突帯から離れて位置する５個の突起の下部には短い突帯が付けられ、これが本陶棺の外見上の特徴となっている。封じ穴（Ｂ）は本来直径15cmほどで、２段階に分けて封じている。蓋同士の接合部の天井近くには、受け部と重ね部を作り、広葉樹の葉を間に置いて接着を防止した痕跡がある。

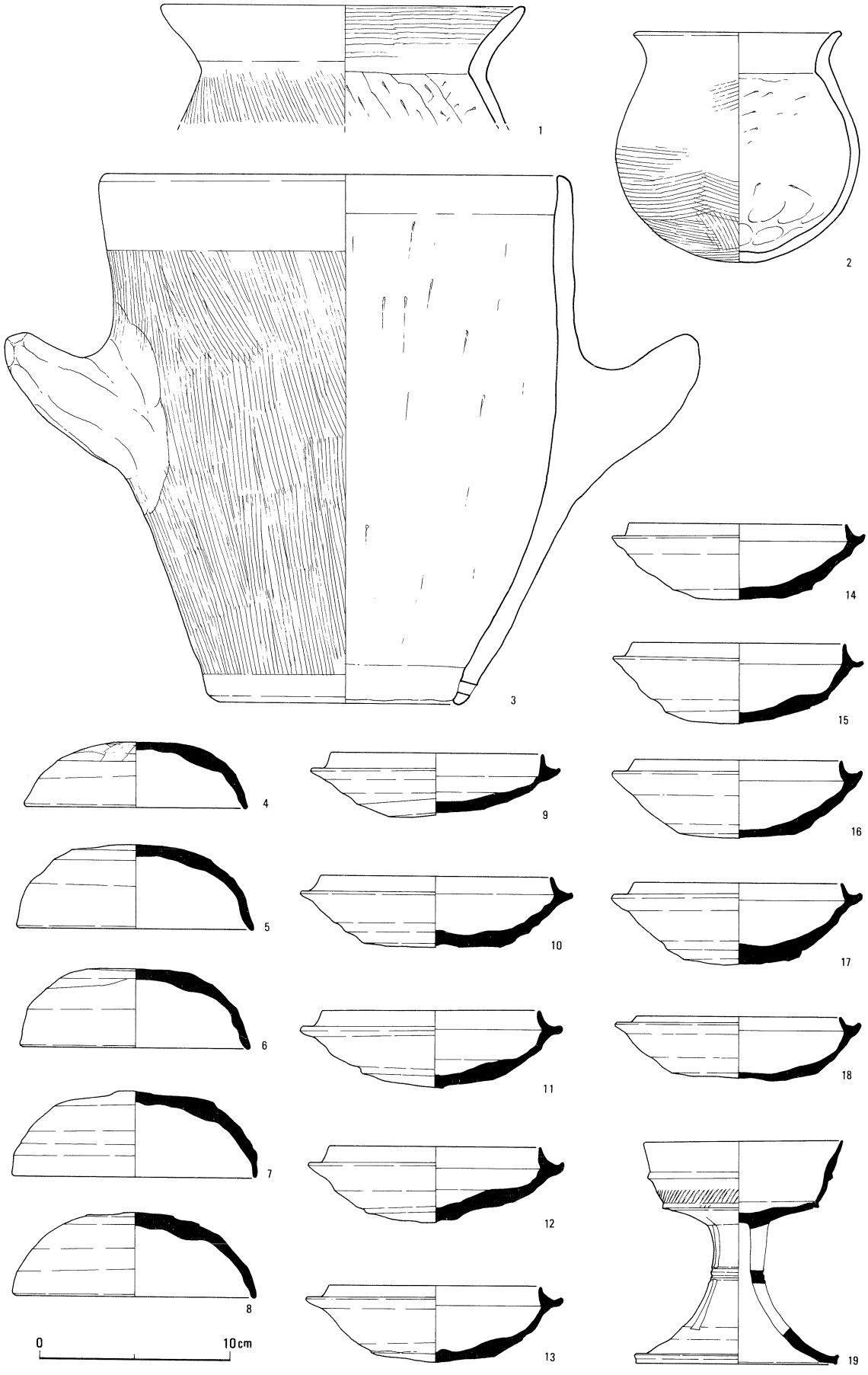
脚部は直径18cm程度の円筒形で、縦３列、横６列。全体で18本あり、いずれも厚さ約２cm。外面は



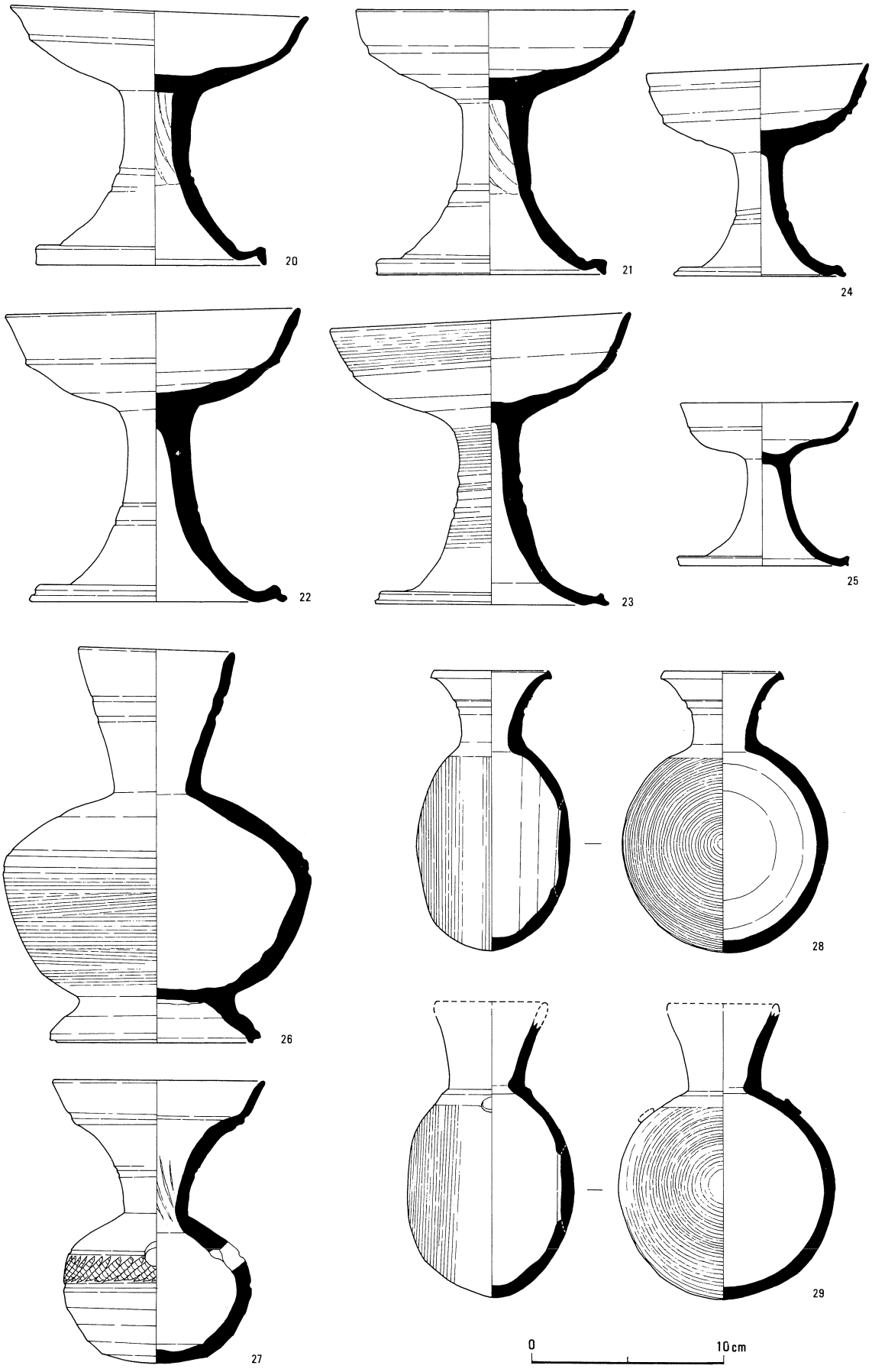
第20図　陶棺実測図（１：20）

タテハケを施し、内面は縦方向にナデ仕上げする。粘土紐を積み上げて成形するが、粘土紐の接合面は、通常の円筒埴輪などと逆で、外傾する。脚と身部の接合については、破損により観察可能な１、２の例では、脚部上面に円座状の粘土を置いて内径を狭めたのちに、円盤状の粘土塊で封じたようである。

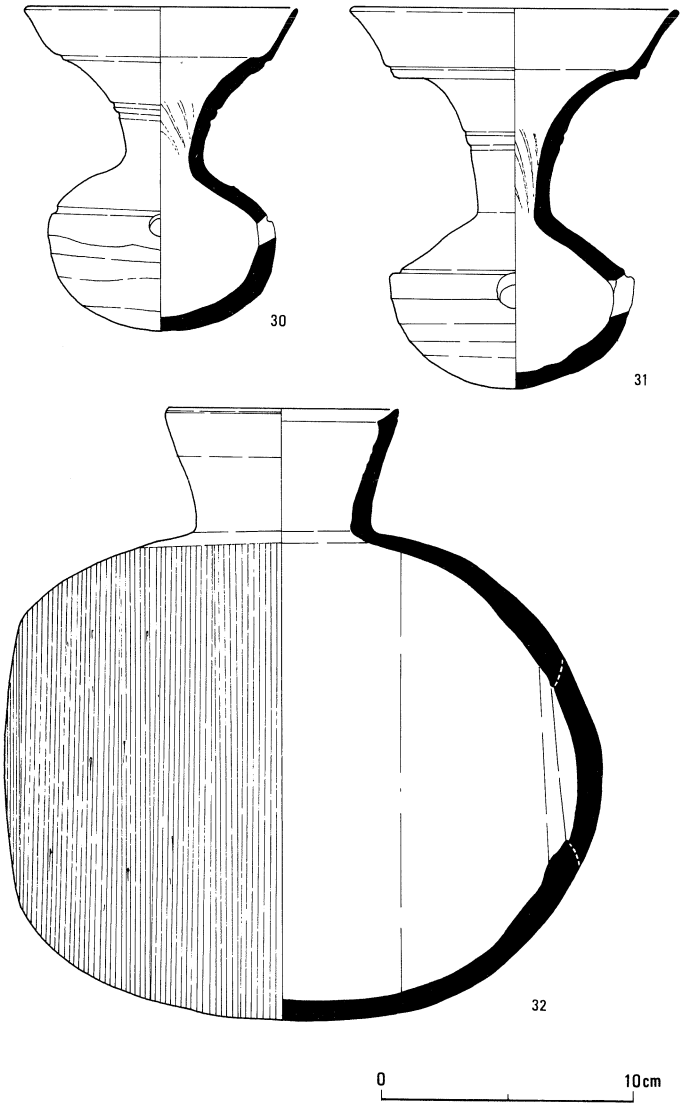
以上の特徴および観察によって復元される製作工程は、村上幸雄・橋本惣司両氏の案(1)と基本的に共通する。



第21図　２号墳出土遺物１（１：３）



第22図　２号墳出土遺物２（１：３）



第23図　2号墳出土遺物3（1：3）

G　出土遺物

遺物には土器、金属製品、鉄滓がある。以下、種類ごとに説明する。

1．土　器（第21-25図）　土師器と須恵器の合計34個体が出土した。うち須恵器甕1点は埋葬施設の一部として利用されたもので、あとは副葬品である。土師器は、甕2と甑1の3個体で、須恵器は、坏蓋5、坏身10、無蓋高坏7、台付長頸壷1、提瓶2、𤭯3、横瓶2、甕1の合計31個体がある。

土師器　甕は、いずれも外反する口縁部をもつもので、端部を丸く収める。1は口縁部を主体とした破片で、全形は不明である。煮炊きにともなう煤が付着する。2は口径10.4cm、器高12.0cmの小形品だが、胴部には煮沸使用による赤変が認められる。口縁部の一部を欠く。甑（3）は口径24.0cm、高さ27.5cmで、上方が開く円筒の胴部両側に把手を付けたもので、口縁部と底部にヨコナデ調整を加える。内面はヘラ削り成形し、底部に一対の孔を穿つ。

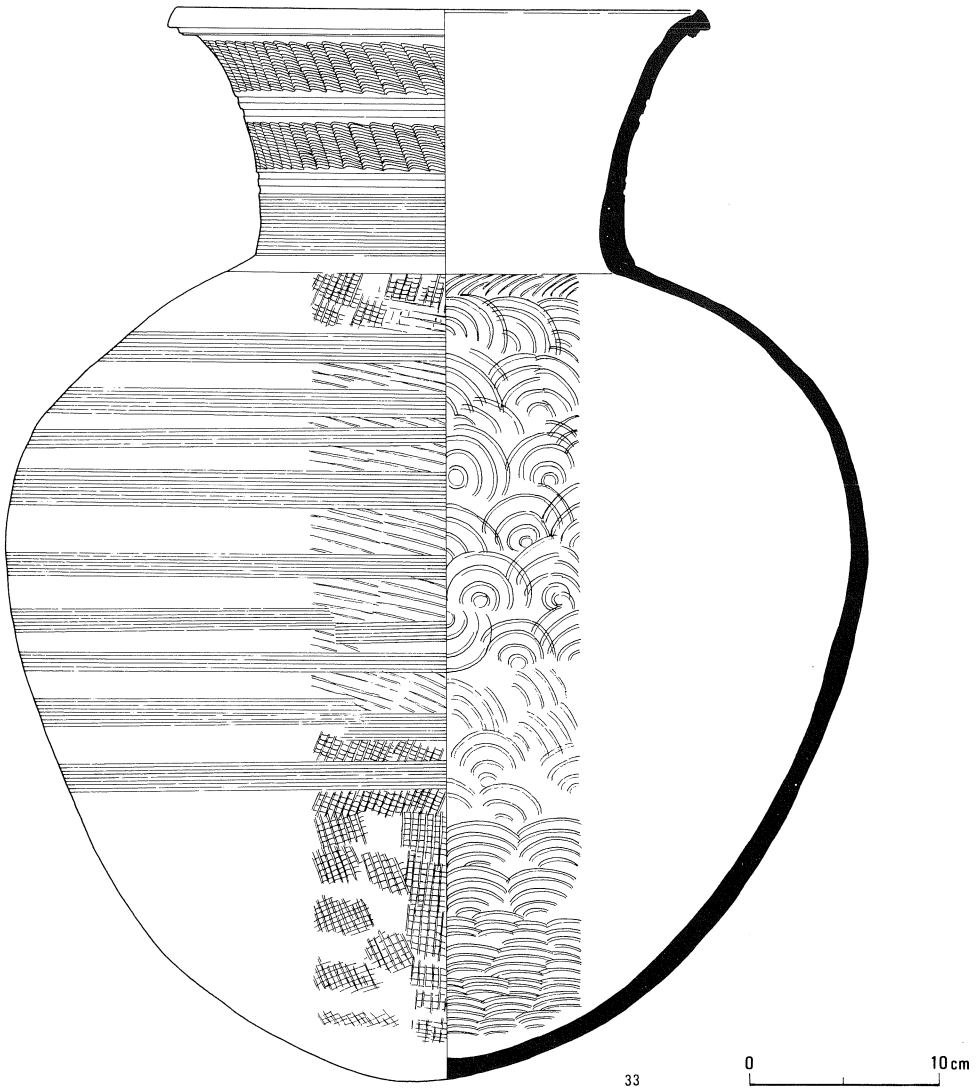
須恵器　胎土や焼成などから産地が異なる可能性のある、少なくとも3種が存在する。

坏蓋（4-8）は、口径が11.7cmから12.7cm、器高は3.4cmから4.5cmで、法量は比較的共通する。製作手法はa手法が1点、b手法が2点、c手法が2点とさまざまである。このうち4は最も小さく、製作手法は分類上a類に属するものの、不定方向のヘラ削りが目立ち、通常のa手法とは趣を異にする。器面に黒色斑粒が多く認められることを含め、他と区別されるものである。しかし、これに対応する坏身は存在しない。4を5類、それ以外のものを4類とする。

坏身（9-18）は口径が10.6cmから11.8cmで、11cm近くに集中する。器高は3.4cmから4.3cmで、4cm近辺に集中する。製作手法は9だけがb手法で、他はすべてc手法である。すべて4類に属する。

無蓋高坏にはA・B・Cの3形態がある。A（19）は、小形の坏部に3方2段透しの入ったやや短めの脚台をもつものである。坏部下半に刻み目文を施す。B（20-24）は、段をもって外に開く大形の坏部に長い脚台部をもつもので、脚台中央に2条の凹線文を施し2段に区画するが、いずれも透しはない。C（25）は、B類を小形化した形態の低脚のものである。ただし脚台には凹線文はない。

台付長頸壷（26）は、外に張り出した短い脚台の付くもので、口径7.7cm、器高20.6cm。頸部と肩部



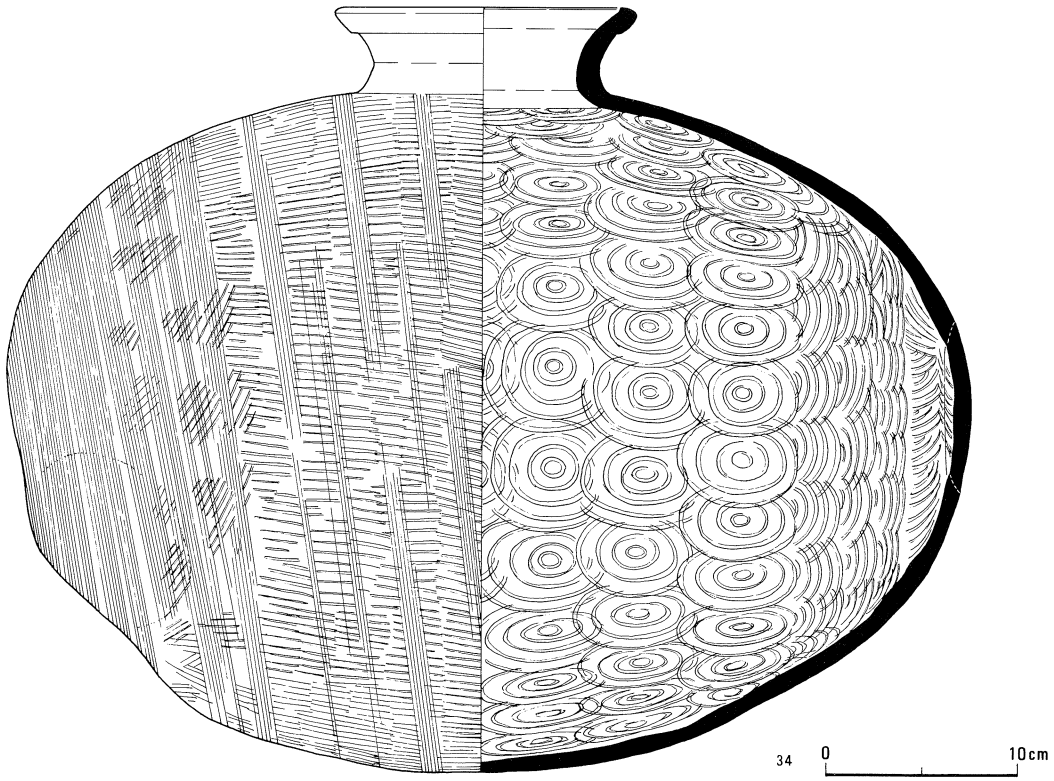
第24図　2号墳出土遺物4（1：4）

に2条の凹線文を、胴部下半にはカキ目を施す。石室北西隅で他の一括遺物とともに出土した。

提瓶（28・29）の内、28は外方に開く口縁部に端面を作るもので、頸部に幅広い2条の凹線文を施す。肩部の片側を欠失するが、もともと耳は付けられていなかったようである。29は直口のもので、肩にはボタン状の耳を付ける。図示した裏面の胴部中央に×印のヘラ記号をとどめるが、全体に使用による磨滅が著しく、薄れている。

甕（27・30・31）は、肩部の張りの度合いや装飾の有無、焼成など個体による差異が認められるが、基本的には口縁部が広く発達した形態をもつ。

横瓶（32・34）は、器高24.3cm、胴部長23.7cmの小形のものと、器高40cm、胴部長50.4cmの大形品がある。前者（32）はやや開きながら直立する口縁をもち、端部は内傾した面をなす。後者（34）は陶棺の奥に据え付けられていたもので、外に開く口縁部を肥厚させ、卵形の胴部形態をもつほか、成形手法や焼成等も32と異なる。片側の胴部外面には、焼成時についた坏類口縁の痕跡がある。その直径は12.5と13cmなので、4類の坏蓋に相当すると思われる。この横瓶の内部に堆積した土を取り除く際に、砂鉄が存在することに気づいた。土をすべて水洗して砂鉄を回収したが、量は多くない。砂鉄あるいは砂鉄の多く含む土を意識的に入れてあったのか、それとも自然に流入した土に比較的多くの砂鉄が含ま



第25図　2号墳出土遺物5（1：4）

れていたのか、判断することが困難である。

甕（33）は、口径27.6cm、器高57.1cm。棒状具による沈線で頸部を3段に区画し波状文とカキ目で加飾する。肩が張った胴部は、中央部と上下でタタキ目の工具を替えている。箱式石棺の一部として利用されたものだが、破片の接合により、ほとんど完形に復元されたので、箱式石棺の埋葬時に完形品であったものを破壊して使用したこと、そして棺内については攪乱が及ばなかったことを示すものと思われる。

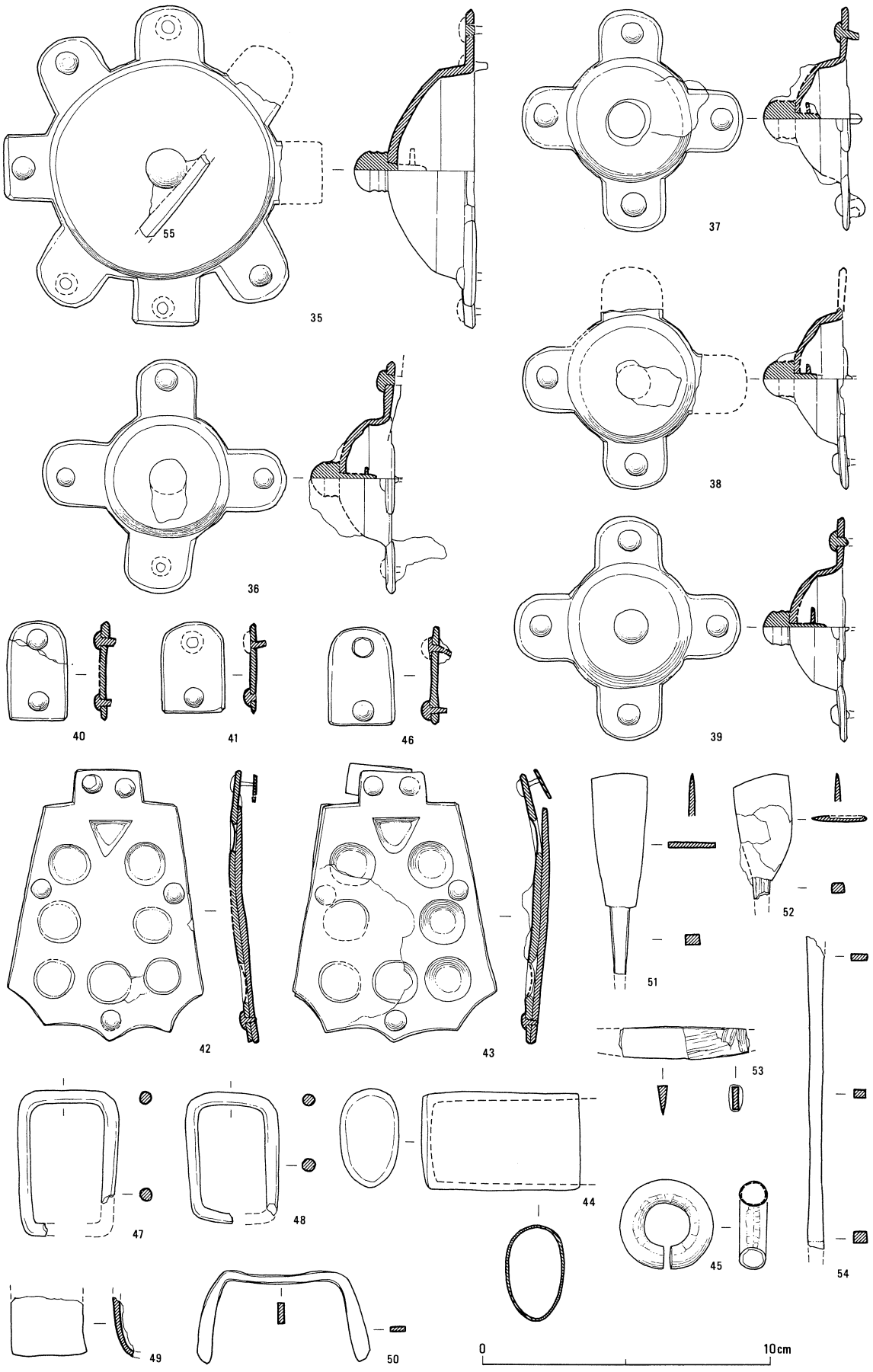
2．金属製品（第26図）　馬具、鉄鏃、刀装具、刀子、不明鉄器、耳環がある。馬具は陶棺奥から、刀装具と耳環、そして不明鉄器は陶棺内から出土した。鉄鏃はおもに陶棺の手前から出土している。

馬　具（35-43・46-48）　雲珠1、杏葉2、辻金具4、革金具3、絞具2がある。

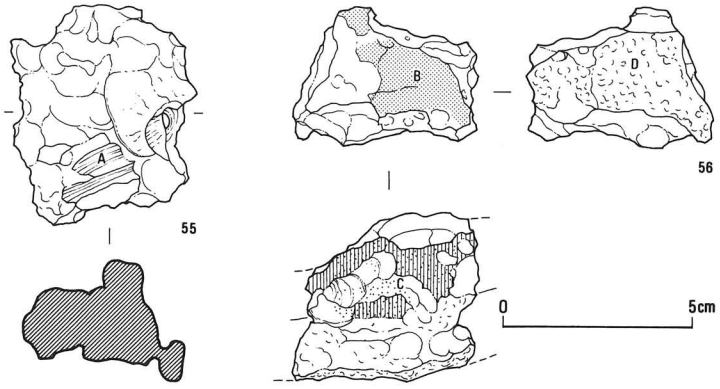
雲珠（35）は鉄地金銅張製で、中央に直径7.7cm、高さ2.7cmの半球状の鉢がつく形態をなし、鉢部には稜をもつ。鉢の上には側面に2条の凹線文を施した宝珠がつく。8脚で、両側と下方に方形脚がある。他の5脚は半円形を呈する。脚には各1本の鋲があり、革帯に装着する。鉢の内面には宝珠の脚が突出するが、欠失する。

杏葉（42・43）は鉄地金銅張で、棘葉形杏葉とよばれるもので、下辺に5棘をつくりだす。棘の突出は小さい。2枚の鉄地を3本の鋲で止めたもので、角張った肩をなし、7個の円文と上部に三角文を配する。上端には幅広の取付部があり、2鋲で止める。高さ9.4cm、幅約7cm。

辻金具（36-39）は4点とも同形のもので、径4.5cm、高さ1.5cmの鉢がつく。雲珠と同様に、鉢には稜をもつ。鉢の中央には宝珠がつき、凹線文を施すようである。4本の半円形脚をもち、各1本の鋲で革帯を止める。鉢部の内面中央には宝珠の脚が突出し、これに薄い方形鉄版を挿す。36では裏面の鋲付近に革帯の痕跡が観察される。



第26図　２号墳出土遺物６（１：２）



第27図　2号墳出土鉄滓（1：2）

革金具（40・41・46）は鉄地金銅張で、長さ約3.5cm、幅2.2cm。大きさにはややばらつきがみられる。一端が半円形、他が方形をなし、2本の鋲をもつ。

47・48は、直径5mm程の鉄製棒状品を方形に成形したものである。47の長さは5cm、幅3.5cmである。針棒部が発見されていないが、絞具の一部と思われる。あるいは革帯の連結金具かもしれない。

鉄　鏃（51・52・54・55）　51・52の鉄身はいずれも方頭式である。52は左右不対象であるが、先端が鋭利につくられているので、ここでは鉄鏃に分類する。54・55は鏃身部を欠くが、長頸式鉄鏃の頸部と思われる。55は雲珠に錆付いて出土した。

刀装具（44・49）　44は鞘尻金具で、長さ5.6cm、幅3.5cm、厚さ2.1cm。鉄製で内部には木質が付着する。49は厚さ2mm、幅2.6cmの破片で、鎺（はばき）と思われる。材質は不詳だが鉄製の可能性がある。

刀子（53）　小形品で、刃と束の両端を欠く。束部には木質とともに樹皮状物で巻いた痕跡がみられる。

不明鉄器（50）　幅7mm、厚さ2.5mmの鉄材の両側を折り曲げて、木材に打ち込みやすく先端を鋭利にしたもの。小形の鍥状製品である。

耳環（45）　銀環で、外形は高さ3.1cm、直径0.9cmの太形品であるが、中空で、銀板を円形の筒状に成形したもので、両端には筒の直径よりも小さい円盤を当て、筒端を外から折り込んで固定している。内側は放射状に研磨した痕跡が認められる。保存状態は良好だが、一部に金色を呈する箇所があり、金が混入している可能性がある。

3．鉄　滓（第27図）　55は、長さ5.8cm、幅4.8cm、厚さ2.7cm、重量100gで、調査時に一部を欠損する。気孔および木炭痕（A）が観察される。一部に長石粒を噛む。製錬滓と思われる。56は、長さ4.9cm、幅3.7cm、厚さ4.2cm、重量68gで、底面には礫を含む粘土が付着する（D）。炉内残留滓を小片に破砕したもので、破面には半溶融状態の砂鉄（C）が観察される。砂鉄製錬滓と思われる。両者とも自然科学的分析は未実施である。

註

1　村上幸雄・橋本惣司「亀甲形陶棺の製作工程について」『考古学研究』第26巻 第2号　考古学研究会　1979

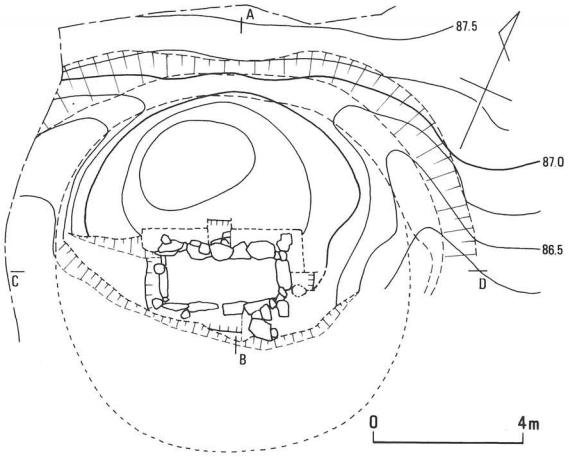
4　3号墳

A　墳　丘（第28・29図）

3号墳は、2号墳の南西に隣接する。それぞれの周溝外側の立ち上がり間の距離は約2mにすぎない。古墳築造時期は、2号墳に先行する。調査前の地形は平坦で、放棄されていたものの、かつては畑地として利用されていたと思われる。排土工事によって石室が発見されるまで、この位置に古墳が存在するとは考えられなかった。

墳丘は円形で、中央の石室から南東側が失われている。これは過去の畑地造成に伴うもので、数mの落差の崖面をなしている。北東から南西にかけての石室主軸に沿った直径は10mで、石室中心から北西の墳裾までの距離が5.0mなので、直径10mの円墳と判断される。現存する墳丘頂部の石室床面からの高さは1.8mであるが、本来は2.5m程度はあったと思われる。

墳丘の遺存部分は、おもに地山削り出しとなっていて、盛土は石室を中心に部分的に残されていた。石室墓壙北西側の盛土下底部は、黄褐色土の地山となっていて、墳丘築成前に地山を削平したことがうかがえる。北東側には旧表土を残す。葺石や埴輪などの外表施設は存在しない。



第28図　3号墳平面図（1：200）

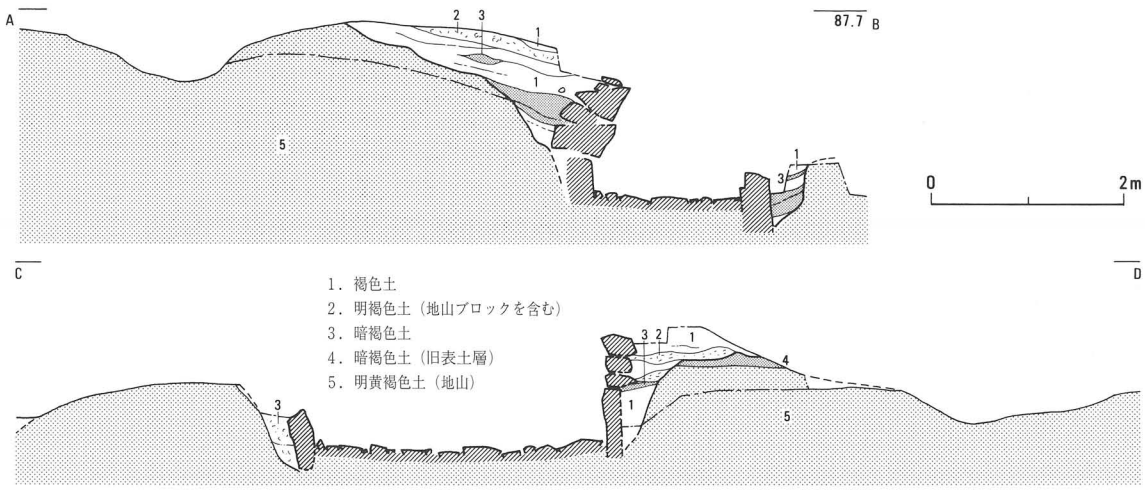
B　周　溝

墳丘北西の山側に幅2～3mの周溝が存在する。溝底の幅は0.6mから1m程度で、外に緩く立ち上がる。周溝は墳丘の北東側で自然に消滅し、南西側では過去の造成により破壊されている。本古墳は北西から南東に下る斜面上に造られているため、墳丘の全周を巡ることはなかったと考えられる。

周溝内からは遺物等は発見されなかった。

C　石　室

墳丘中央に1基の竪穴式石室が存在する。他には埋葬施設はない。外表施設は存在しない。



第29図　3号墳墳丘断面図（1：80）

工事に伴い発見されたため、南東側の側壁と南西側小口壁面の大半は、すでに失われていた。工事の際の攪乱は一部石室内にもおよび、遺構検出の段階では若干数の石材が石室内に崩落していた。これらのなかには確実に蓋石といえるものは存在しなかった。木蓋を用いた可能性もある。

墳丘中央に、長さ2.3m、幅1.5m、深さ約1.6mの長方形墓壙を掘って、石室を構築する。墓壙の中程から上部の壁面傾斜はやや緩く、2段掘りとなっている。現存する石室上端は、墓壙の上端よりも高く位置する。墳丘断面図に示すように、墓壙内の埋土層と盛土層の関係も整合するので、墓壙内に石室下底の石材を配列した後、石室の構築と墳丘の築造が同時に進行されたとみられる。

石室の長軸は真北から49度東偏する。石室床面の平面形は、胴張りの長方形をなし、最大幅はほぼ中央に位置する。内部の寸法は、長さ1.5m、最大幅0.8m、高さ約0.7m、北東小口部幅0.6m、南西小口部幅0.65mである。

角礫凝灰岩の角礫を石材に使用する。両側壁の最下段には厚さ約15cmの板石を各4枚用いる。小口にはこれよりもやや薄手の板石を同様に立て、隙間に小形の石材を用いる。南西小口の石材はやや低いが、これは両隣の側壁側と高さを揃えた結果であると思われる。小口に向かい右側の幅17.5cmの石材は、上端を工事中に破損したものである。これらのことから、本石室が、小口側に羨道部をもつ、いわゆる竪穴系横口式石室であった可能性は完全には否定できないものの、墓壙の立ち上がりが両小口側とも一致することからも、その可能性は低いと考えられる。

立石の上に細長い石材を横にしてさらに2段積み上げている。北西側壁ではこれら上部の石材はかなり内傾して持ち送り状を呈する。当初は、後世の移動かとも思われたが、墓壙の立ち割り調査の結果、これらの2段の石材の間には外から楔状に石が積まれ、構築当初から意図されたものであることが判明した。この持ち送りが反対側の側壁でも実施されていたならば、石室の上面観は比較的狭い長方形をなしていたと想定される。

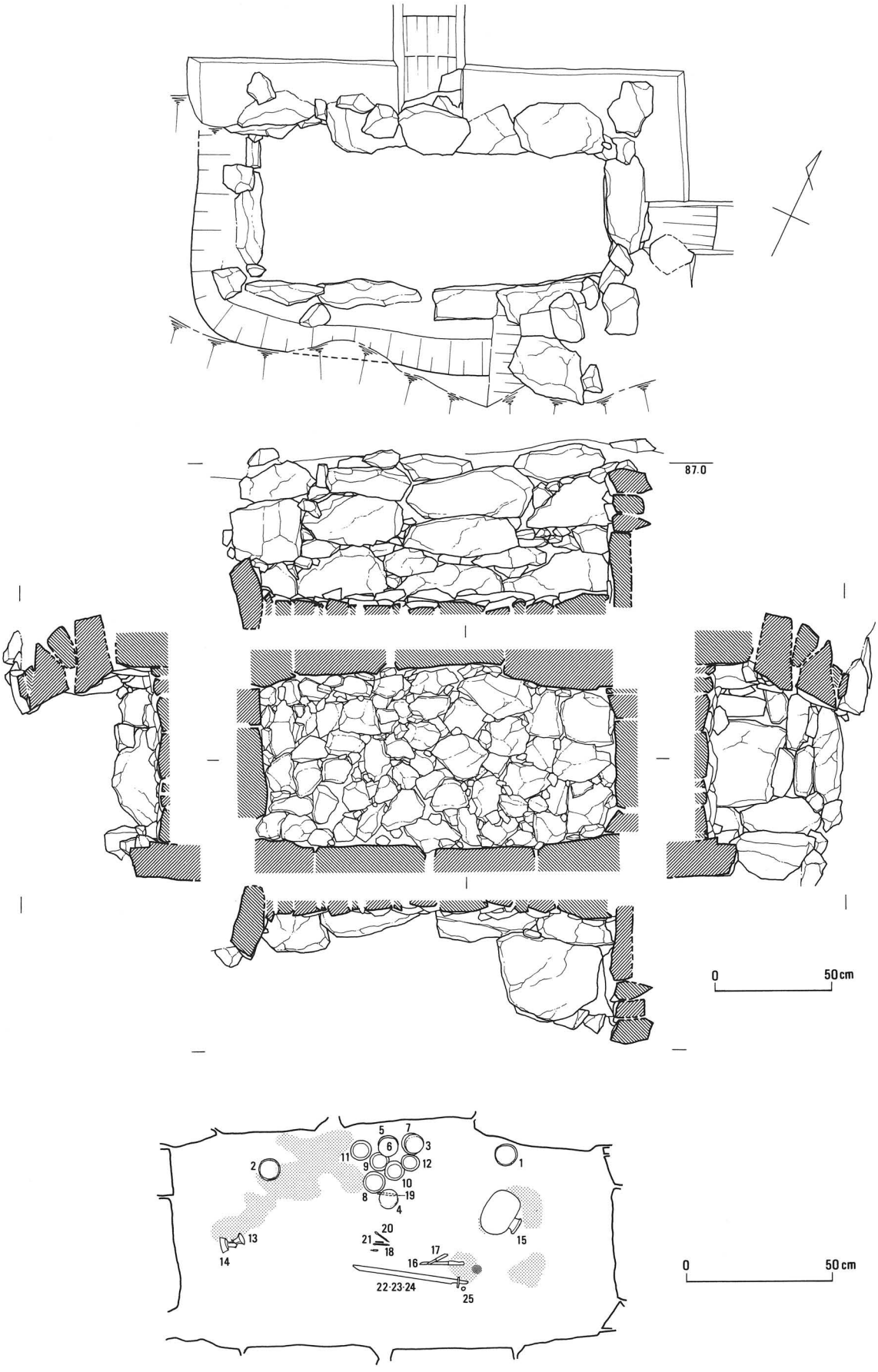
D　遺物の出土状況（第30図）

遺物は、石室床面のほぼ全体から出土している。これらは大きく分けると石室長軸から北側の須恵器と、中央から南にかけての金属製品に分けられる。

須恵器は、石室の東中央に横瓶（15）が置かれ、反対西側に高坏2個体（13・14）が出土した。高坏は坏類は、基本的に石室中央の北側壁に沿って一括して出土したが、坏蓋1・2はやや離れて位置する。坏類の出土状況で特徴的なのは、いずれも坏身は正立して、坏蓋は逆転して置かれていることである。このうち、坏蓋5・6と坏身7・坏蓋3はそれぞれ重なり合う。坏身と蓋が同等に取り扱われている状況が見受けられる。こうした坏類の出土状況の説明としては、食物供献の反映であるとする立場をとれば、坏蓋もまた容器として利用されたことを示していると考えられる。

金属製品としては、鉄刀（22・16）、刀子（17）、鉄鏃（18-21）からなる武器・工具類と耳環（25）がある。大刀（22）は、石室中央のやや南寄りの位置に切先を西に向けて置かれる。刀身には鍔（23）や責金具（24）などが付属する。大刀の北側には小刀（16）と刀子が平行して置かれている。鉄鏃は石室中央部にほぼまとまって出土したが、1点（19）のみやや離れて、坏蓋（4）の下から出土した。耳環は1点だけの出土で、大刀の束部付近から出土している。

遺骸の痕跡あるいは木棺の使用を示す形跡はいずれも確認されなかった。石室の礫床表面には赤色顔料の付着が認められた。これらのほとんどすべては暗赤色で、ベンガラと思われる。石室中心部の周囲に薄く遺存する（第30図網版）。その他に大刀の柄部近くのごく小範囲に朱と思われる鮮やかな顔料が



第30図　3号墳石室実測図（1：25，1：20）

検出された。鍔の上端には、幾層もの比較的荒い布が付着している。この布面は大刀の北側に向いて湾曲しており、衣類あるいは遺骸を覆った布の一部である可能性がある。これらのことから、遺骸は石室中心部に位置し、頭位は東であったと思われる。

E　出土遺物（第35・36図）

遺物には土器と金属製品がある。

1．土　器（第35図）　土器はすべて須恵器で、15個体ある。内訳は坏蓋６、坏身６、無蓋高坏２、横瓶１である。

坏蓋（1-6）は、法量、製作手法などから２種類に分類できる。１類（１）は、口径14.8cm、器高4.3cmで平坦な天井部をもつ。肩には段の痕跡がみられる。口縁端部には明瞭な段がつく。天井部外面は丁寧に回転ヘラ削りするが、中心部にヘラがおよばない箇所があり、分類上はｂ手法である。

３類（2-6）は、口径が13.0cmから14.0cmまで、13.5cm内外のものである。器高は約４cm程度だが、６は5.1cmある。いずれも口縁内面のやや上部に段の痕跡をもつ特徴がある。製作手法は、５がｂ手法で、あとはすべてａ手法である。４の天井部にはＣ形のヘラ記号がある。

坏身（7-12）も蓋と同じく１類と３類の２者に分類できる。７は焼成や胎土などから１とペアになるもので、１類に属する。他の３類とくらべ口縁部の立ち上がりが大きく、端部をやや肥厚させる。底部内面にはタタキの当て具による同心円文を残す。口径13.1cm、器高4.5cmで、ａ手法。

３類は、口径が11.9cmから12.8cmまで、器高は3.7cmから4.2cmまでのもので、すべてａ手法である。そのうち12は坏蓋４と同様のヘラ記号があり、セット関係をなす。

無蓋高坏（13・14）はいずれも比較的短脚で、ほぼ同じ大きさのものだが、坏部の形状や脚端部の収め方が大きく相違する。13は丸みを帯びた坏部から外に湾曲して開いた口縁部をもち、坏部外面には１帯の刻み目文を施している。脚台には長方形の３方透しをもち、脚端は肥厚させ、内傾する端面に２条の凹線文を加える。14は、坏部と、直線的に開く口縁部との間に突帯を巡らせたもので、脚台に三角形の３方透しがある。脚端には、外傾する平坦面をつくる。両者とも自然釉のかかる堅緻な焼成である。

横瓶（15）は口径11.6cm、器高25.5cm、胴部長31.8cm、同径22.0cmで、短い頸部から開く口縁外面を肥厚させ、端部を内側にナデつけている。

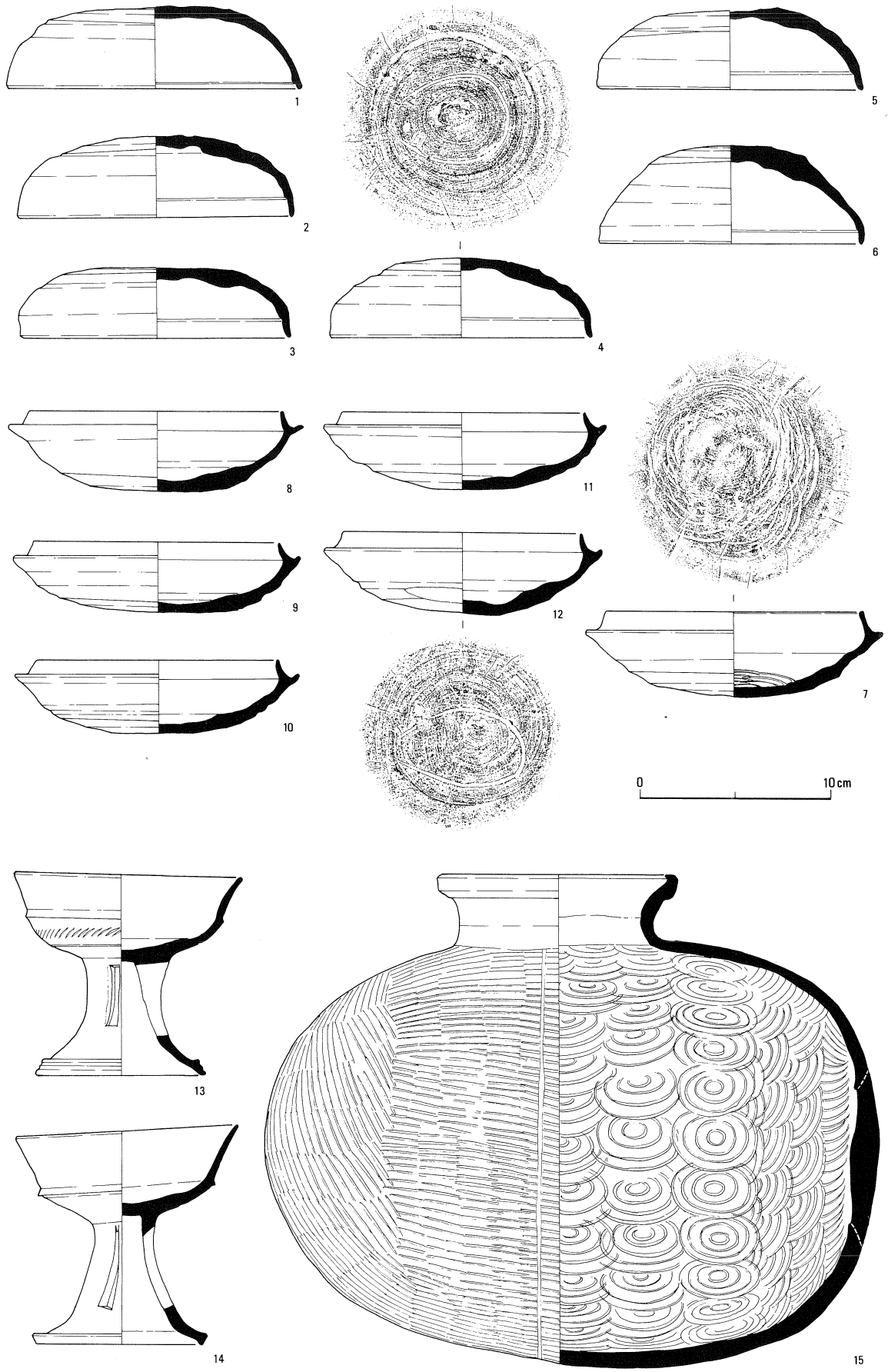
2．金属製品（第36図）　大刀１、小刀１、刀子１、鉄鏃４、耳環１が出土した。

大刀（22）　現長76.6cmだが、先端を欠失している。刃部は幅3.6cm、厚さ0.8cmで、鞘の木質が付着する。束部には 鎺（はばき）と鍔（23）が装着された状態で出土した。鍔の束側には責金具（24）が付属し、柄の一部が遺存していた。柄は、木質の上に幅５mmの獣皮状の紐を巻き付けたもので、一部には目釘が残る。紐と目釘の材質は不明である。刀身の柄頭側は刃部側に傾斜した形状を示すが、遺存状態が悪く明確な端面を示さないことや、柄部が短すぎることからみて、欠損している可能性がある。鍔は水滴形で、長方形の透しを６箇所に配置する。高さ７cm、幅６cm、厚さ１cmで、外周が厚く面をもって作られている。鉄製で、象嵌などは認められない。上端に布が厚く付着する。

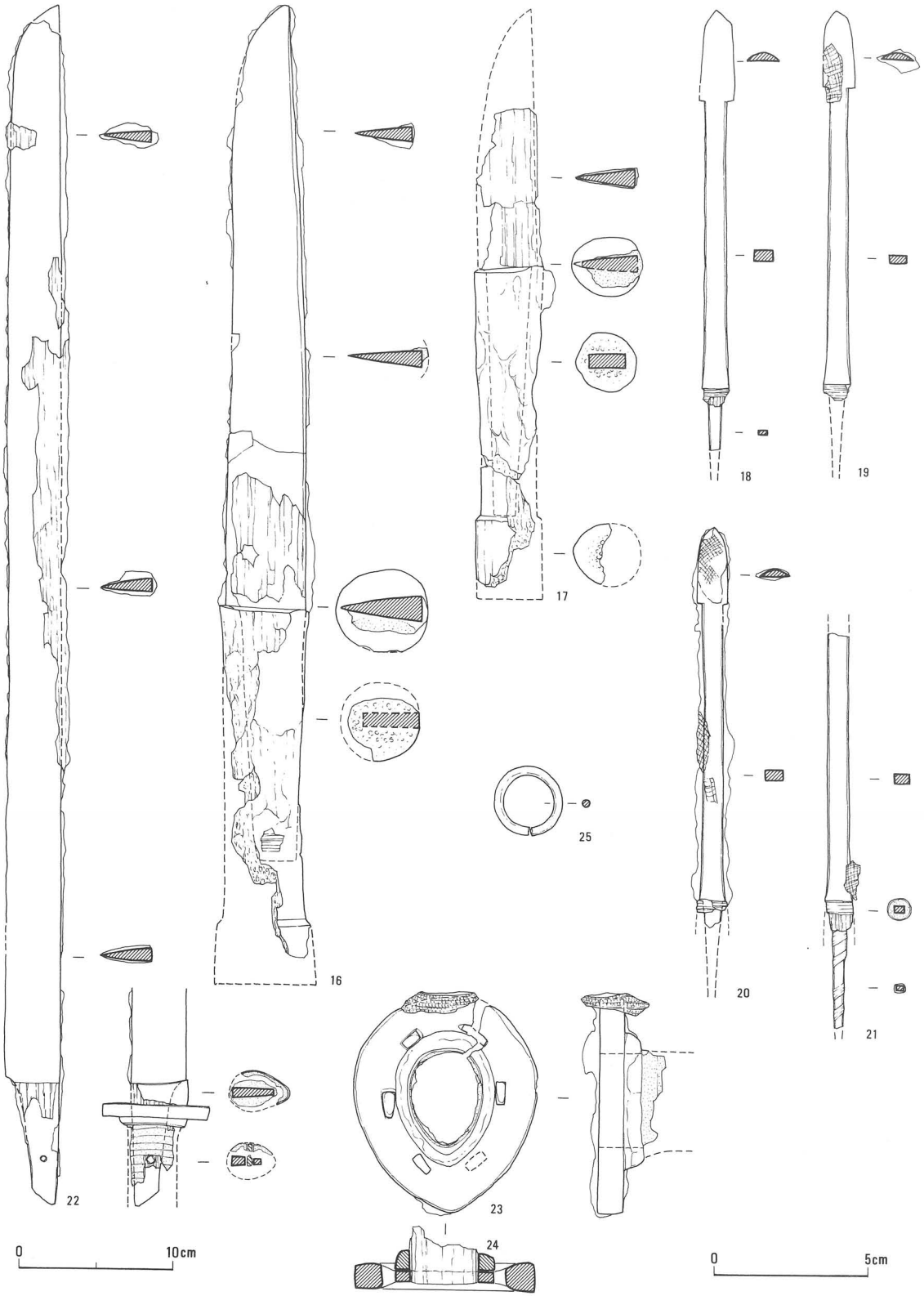
小刀（16）　刃渡り19.5cm、現長30.8cmで、柄は鹿角装で、柄頭はひとまわり太く削り出す。刃部には鞘の木質をとどめる。

刀子（17）　鹿角装で、16に類似する柄部をもつ。刃部と先端を欠き、現長は15.5cmである。

鉄鏃（18-21）　長頸鏃で、同一型式に属する。鏃身は柳葉形で逆刺はもたない。長さ2.5cm～３cm、



第31図　３号墳出土遺物１（１：３）



第32図　3号墳出土遺物2（1：2，1：4）

幅1cmである。断面は片側が湾曲した形態を示す。頸部長は9.5cm前後で、茎には直径1cm程の矢柄の痕跡がつく。矢柄の上には樹皮を巻いている。21では茎の表面を幅3mmの植物質の紐が螺旋状に巻かれている状況が観察される。茎と矢柄との固着を目的とするものであろう。

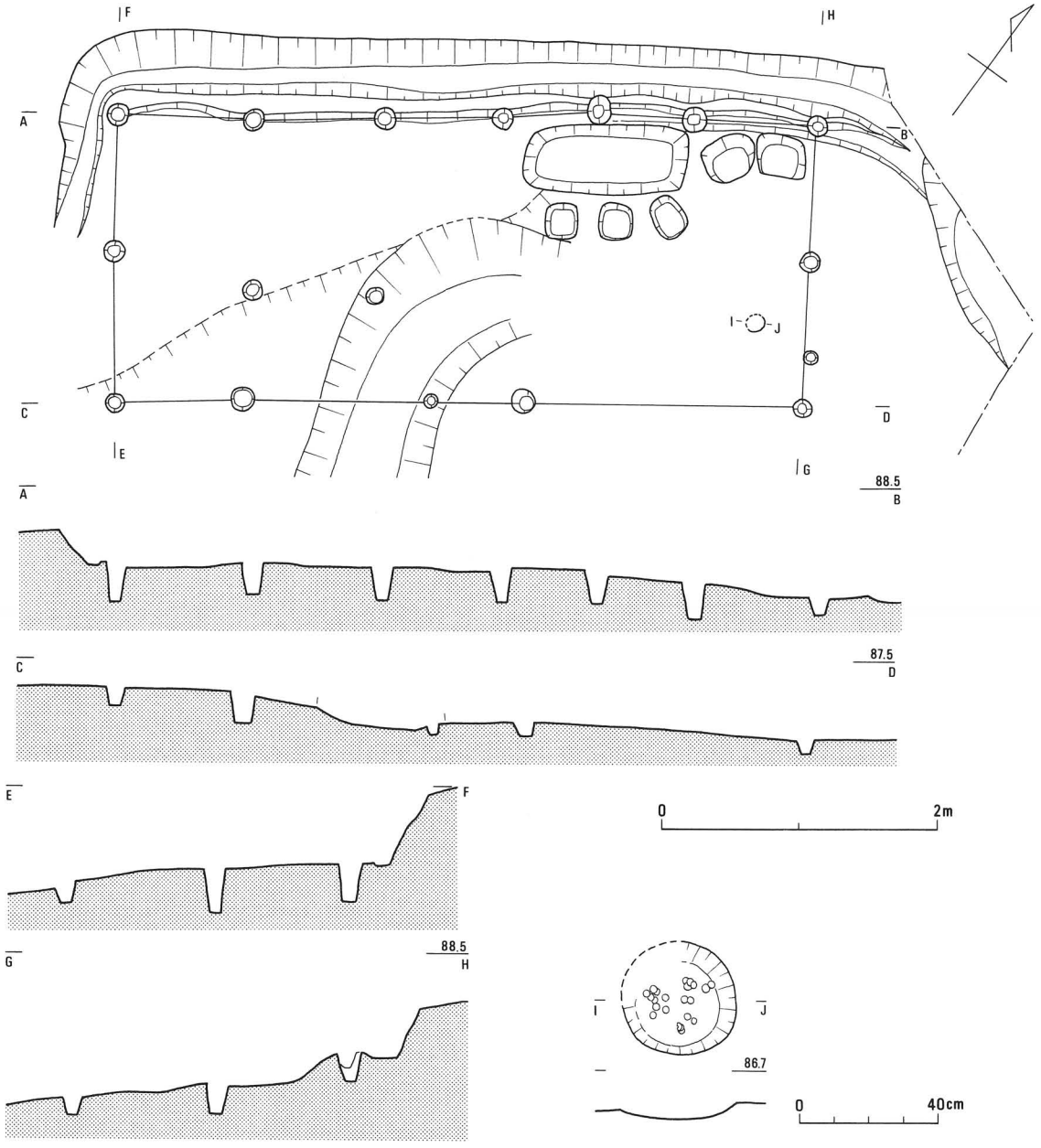
耳環（25）　銀環で、高さ2.2cm、断面径3mmである。表面は黒く酸化している。1個しか検出され

5　中世の遺構・遺物

A　建物跡

２号墳北西部において周溝の埋没後に建てられた、６間×２間で規模にして５ｍ×２ｍの掘立柱建物を検出した。この建物は斜面の山側を高さ60cm程カットして作り出した平坦面に存在している。

山側は柱間６間であるが、谷側は４間で不規則な配置となっている。柱穴は直径20cm弱、深さは山側で30cm程度である。谷側の柱穴はそれよりも浅いものが多いが、これは当時の地表面が削られているためと思われる。また、山側にはこの建物を取り囲むように浅い溝が巡っている。建物の北側の隅には120cm×50cmの方形の掘り込みが１つ、30cm×30cm程度の方形の掘り込みが５つ存在しているが、これらの性格は不明である。



第33図　建物跡・土坑実測図（１：50，１：20）

建物東側の隅では直径30cm、深さ５cm程度の浅い掘り込みが存在し、その中から銅銭が26枚あまり出土した。出土銭の詳細については別表のとおりである。

この建物の時期であるが、出土銭から考えてみると年代の下限は12世紀初頭となっている。ところがこの建物に隣接する２号墳の石室埋土からも銅銭が出土しており、その下限は13世紀半ばとなる。２号墳出土の銅銭は、その位置関係から見てこの建物と一連のものであるという可能性の非常に高いものであり、その年代観からもこの建物は13世紀代のものであると推定できよう。

B　出土遺物（第34図、表１）

建物跡を検出する過程で微量の土器片と、先述した土坑から銭貨が出土した。また、建物跡の下方に位置する２号墳の横穴式石室内から銭貨が、石室周辺から少量の土器が出土している。後者も建物跡に示される居住に関連するものと考えられる。これらの他に建物跡近辺から鉄釘が出土した。

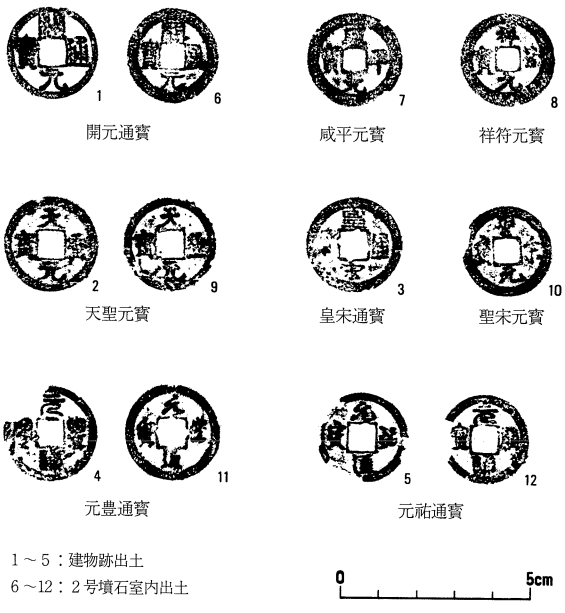
１．銭　貨　建物跡から26枚以上、石室から32枚の銅銭が出土した。いずれも輸入銭で唐代の開元通寶（621年初鋳）を最古とし、淳祐元寶（1241年初鋳）がもっとも新しい。いずれも主体をなすのは北宋銭で、石室からは開禧通寶や淳祐元寶といった南宋銭がわずかに出土している。これらの銭貨が埋納または残された時期については、最新銭である淳祐元寶の初鋳年が上限となる。

２．土　器　建物跡からは土師器の坏類の可能性がある破片が出土しているが、小片で図示できない。２号墳石室周辺から出土したのはいずれも破片だが、須恵器、備前焼、瓦質土器、土師器がある。小片のため図示できないものがほとんどなので、以下、種類別に概略を記す。

須恵器は、勝間田焼の甕と思われる口縁部片等があるが、勝間田焼に通常みられる格子目タタキを胴部にもつものは認められず、量も少ない。埦・坏・皿類は存在しない。備前焼にはすり鉢の破片と壷または甕とみられる胴部片がある。瓦質土器の器種は鍋に限られ、外方に屈曲して直立する口縁のものと、鍔をもち内径して立つ口縁の２種がある。土師器には坏と皿がある。坏は底部をヘラ切りするもので、口径約13cm、高さ3.2cmほどに復元できる個体がある。皿は、ヘラ切りした径7.3cmの底部に短い立ち上がりがつくもので、口径9.3cmである。これらのほとんどは畑地造成などによって二次的に堆積したものだが、基本的には建物が残された時期に属すると考えられる。

銭貨名	初鋳年	石　室	建物跡	合　計
開元通寶	621	1	3	4
太平通寶	976	0	1	1
咸平元寶	998	1	0	1
祥符元寶	1008	1	0	1
天聖元寶	1023	2	0	2
皇宋通寶	1039	1	1	2
熙寧元寶	1068	1	0	1
元豊通寶	1078	1	3	4
元祐通寶	1086	1	1	2
元符通寶	1098	0	1	1
聖宋元寶	1101	1	1	2
大観通寶	1107	2	0	2
政和通寶	1111	2	0	2
開禧通寶	1205	1	0	1
淳祐元寶	1241	1	0	1
不　明		16	15＋	31＋
合　計		32	26＋	58＋

表１　出土銭貨一覧表



第34図　出土銭貨拓影

Ⅳ　まとめ

1　古墳の築造と埋葬時期

的場古墳群は前章で述べたように、ほとんどが埋葬施設に横穴式石室をもつ。美作地方における横穴式石室の初現は、津山市福田に所在する中宮１号墳[1]で、片袖式の石室には石材を横長に多用し、持ち送りによる特徴的な石室形態をもっている。中宮１号墳出土の須恵器は、陶邑編年のTK10型式にほぼ併行する時期のもので、築造はおおむね６世紀の中頃と推定される。ほぼ同時期に属するものとしては真庭郡八束村四ツ塚１号墳[2]や落合町神毛１号墳（稲荷山古墳）[3]が存在するものの、石室形態は中宮１号墳よりは新相を示し、横穴式石室をもつ古墳は当時きわめて少なかったようである。

その後の横穴式石室墳の展開状況については、個々の古墳の調査事例は多いが、石室形態について編年の試みがある[4]程度で、まだ詳細にはあとづけられていないのが現状である。のちに説明するように、的場古墳群は美作地域においても重要な位置をしめる古墳群のひとつと考えられるので、まず調査した３古墳について築造時期を検討し、以後の評価に備えることとする。

A　須恵器の年代

各古墳から出土した須恵器について坏類を主体に検討する。前章では坏の寸法と形態、そして製作手法から１類から５類までに分類した。各古墳の類別は、基本的には古墳間相互に共通するが、やや相違をみせる部分もあるので、以下整理する。

１号墳からは、１・２・３類の坏類が出土している。これらは型式学的には新旧の傾向をもつものと推定され、１類坏蓋の寸法は、口径14.3cm、器高4.8cmでｂ手法、坏身は口径13.1cm、器高3.9cm、ａ手法である。同坏身は口径13.1cm、器高3.9cm。２類坏蓋の口径は幅をもち約15cm前後、器高は3.5cmのものと４cm台後半の２者がある。すべてａ手法。２類坏身は口径14cm弱でａ手法。3類坏蓋の口径は13cm台後半に集中する。ｂ手法が多く、ａ手法も存在する。大半は口縁端部からやや離れた内面に段状の起伏をもつ特徴的な形態を示す。同坏身は口径12cm台で、ａ手法とｂ手法が半分ずつ存在し、ｃ手法が１点だけ認められる。

２号墳出土の坏類は、４・５類がある。４類坏蓋は口径が約12.5cm、器高約４cmでｂ・ｃ両手法が半々の割合でみられる。同坏身は口径約11cmで、ｃ手法のみが存在する。５類は、口径11.8cmの坏蓋が１点存在する。特異なａ手法である。

３号墳には１・３類が存在する。１類坏蓋は口径14.8cm、器高4.3cm、ｂ手法。同坏身は口径13.1cm、器高4.5cmでａ手法。３類坏蓋は口径が13.5cmから14cmに集中し、大半がａ手法、一部ｂ手法のものがある。同坏身は口径が12.5cm、器高は４cmほどで、すべてａ手法である。

以上の類別のうち１類については、坏蓋口縁端部の形態や坏身口縁部の立ち上がりから３号墳の１類が１号墳の１類よりも古相を示すと考えられるが、ここでは両者を一括してとりあつかう。これらの５類別は、ほぼ連続する須恵器坏の型式として位置づけられるので、型式名としては的場Ⅰ式からⅤ式と呼びかえて使用する。製作手法との関連では、以上みてきたようにｃ手法がⅣ式に多く存在し、Ⅲ式にはｂ手法が特徴的に存在する。同じ手法は、Ⅰ式にも一部存在するものの、Ⅲ式では回転ヘラ削りが天井部および底部の縁辺部に限られ、あきらかに製作工程の簡略化を示しているに対し、Ⅰ式では回転ヘ

ラ削りの対象となる範囲が広く、明確に区別されるものである。またⅣ式ではａ手法は存在しない。

これらの坏諸型式と、須恵器の陶邑編年[5]との関係については、Ⅰ式がＭＴ85ないしＴＫ43様式、Ⅱ式がＴＫ43様式、Ⅲ式がＴＫ209様式古段階、Ⅳ式がＴＫ209様式新段階にそれぞれ併行すると考えられる。Ⅴ式はⅣ式よりも新しい様相をもつので、ＴＫ217様式に相当することとなり、的場１～３号墳の須恵器坏類は、６世紀後半から７世紀前葉にかけてのものと位置づけられる。坏類以外では、３号墳の無蓋高坏は出土須恵器のなかでももっとも古相を示すもので、陶邑編年のＭＴ15様式からＴＫ10様式にかけての高坏に相当する。したがって、須恵器年代の上限は、６世紀前葉近くまでさかのぼる可能性があるということになる。

Ｂ　古墳築造と追葬

以上の須恵器年代と古墳の所属時期がどのような関係にあるのか、つぎに検討する。

１号墳では、Ⅰ式坏はいずれも石室袖部の隅から他の多くの須恵器とともに出土した。このなかにはⅡおよびⅢ型式の坏類も存在する。１号墳では出土耳環の数から少なくとも３体の埋葬が行われていたとみられる。いっぽう、須恵器には破損するものも多く、石室内が攪乱を受けていることが明らかであるが、この袖部の土器類の出土状況は比較的現状を留めていると判断される。また、石室奥から出土した坏身にはｃ手法をもつもの（26）が存在する。これらのことから、３型式の坏類は同時に用いられた可能性が高いとみられる。すなわち、古墳築造とそれに伴う初葬は、最新型式であるⅢ式の段階に行われたと考えられる。したがって、想定される追葬もほぼ同じ年代になされたこととなる。したがって、本古墳は、およそ７世紀初頭頃の築造と思われる。

２号墳においては、石室中央の陶棺が古墳の主人公である。この陶棺に供えられた坏類はいずれもⅣ式で、これが古墳築造時期の上限を示すと考えられる。Ⅴ式の坏蓋は、石室手前の箱式石棺の近くから出土しているので、追葬の時期を示す可能性が高い。築造は７世紀前葉、追葬が７世紀中葉初め頃であろうか。

３号墳は、竪穴式石室であることに加え、耳環の数からみて単葬であった可能性が高い。須恵器坏類も一度に供献された様相を示し、Ⅰ式の坏類は、Ⅲ式の坏類とそれぞれ組み合わされた状態で出土している。これら２型式の新しいものが、古墳築造および埋葬時期の上限を示す。したがって、本古墳はⅢ型式期の築造であり、須恵器の全体的な様相としては１号墳よりもあきらかに古相を示しているにもかかわらず、基本的には１号墳とほぼ同時期に造られたと判断される。

Ｃ　須恵器の使用と埋納

このようにみてくれば、１・３号墳ではかなり長期間にわたり須恵器が伝世されたこととなる。もっとも古相を示す３号墳出土無蓋高坏（13・14）が、約半世紀以上にわたり使用されていたとはやはり考えにくいので、これらについては少なくともⅠ式の坏類と同様の時期における地方窯の様相を示す事例と考えた方がよいのかもしれない。

いっぽう、今回出土した須恵器には、かなりの長期間の使用を示すものが存在するのも事実であり、このことについて簡単に触れておく。それは須恵器にみられる使用痕の存在である[6]。使用痕は磨滅痕として認識できる。磨滅の度合いは高い順にＡ、Ｂ、Ｃと区分した。磨滅度Ａは、ほぼ全面にわたり激しい磨滅が認められるもので、カキ目やヘラ記号がすり減って稀薄になる例がある。磨滅度Ｂは特定部位にある程度の拡がりをもつ顕著な磨滅が認められるものである。磨滅度Ｃとしたのは、坏でいえば口縁部などのわずかな一部に磨滅が観察できるもので、指先でかすかに認識できるものが多い。これら

表２　１号墳出土須恵器観察表

番号	器種	口径	器高	技法の特徴		回転	胎　土	色　調	残存率	備　　考
				外　面	内　面					
2	坏　蓋	14.3	4.8	天井部の三分の一ほどを回転ヘラ削りする．肩部にカキ目状の細かい条線を施す．ａ手法	ヨコナデ後、仕上げナデ		砂礫はあまり認められない	灰色、黒色小斑粒	ほぼ完形	17の蓋．磨滅Ｃ
3	坏　蓋	14.8	3.5	天井部を回転ヘラ削りする．口縁部上面に鋭利な器具で刻み目文を施す．ａ手法	ヨコナデ調整後、仕上げナデ	正	長石角礫を少量含む	灰色、黒色小斑粒	完　形	磨滅Ｃ
4	坏　蓋	15.1	3.6	天井部を回転ヘラ削りする．ａ手法	ヨコナデ調整後、仕上げナデ	正	長石角礫を少量含む	灰色、黒色小斑粒	完　形	14の蓋．磨滅Ｃ
5	坏　蓋	15.8	4.7	天井部の約三分の二を回転ヘラ削りする．ａ手法	ヨコナデ調整	正	２mm程の長石角礫を多く含む	外面暗灰色、内面灰色、黒色の小斑粒あり	70 %	石室手前出土破片と接合
6	坏　蓋	14.7	4.9	天井部の三分の一ほどを回転ヘラ削りする．ａ手法	粘土紐の巻き上げ痕跡．ヨコナデ後、仕上げナデ	正	２mm程の長石角礫を含む	灰色、黒色小斑粒	ほぼ完形	磨滅Ｃ
7	坏　蓋	14.3	4.4	天井部の三分の一ほどを回転ヘラ削りする．ｂ手法	口縁部に退化した段をとどめる	正	３mm以下の長石角礫を含む	外面黒灰色、内面灰色	完　形	ヘラ記号、磨滅Ｃ
8	坏　蓋	13.9	4.2	天井部の約半分を回転ヘラ削りする．ｂ手法	ヨコナデ調整	正	２mm程の長石角礫を多く含む	一部暗黒色、他は灰色．黒色小斑粒	完　形	30の蓋．磨滅Ｃ
9	坏　蓋	14.1	4.0	天井部の三分の一を回転ヘラ削りする．ｂ手法	中央にスタンプ押圧痕あり．口縁端部に段痕跡の条線を施す．ヨコナデ調整後、ナデ仕上げ	正	２～３mmの長石礫を多く含む	白灰色	完　形	磨滅Ｃ
10	坏　蓋	14.0	4.4	天井部の約半分程を回転ヘラ削りする．ｂ手法	ヨコナデ調整	正	２mm程の長石角礫を多く含む	暗灰色	90 %	磨滅Ｃ
11	坏　蓋	13.7	4.4	天井部の約三分の一を回転ヘラ削りする．ａ手法	ヨコナデ調整．口縁端部付近に条線をとどめる	逆	２mm程の長石角礫を含む	暗灰色、黒色小斑粒	ほぼ完形	石室手前出土の破片と接合．磨滅Ｃ
12	坏　蓋	13.4	4.6	天井部約三分の一を回転ヘラ削りする．ａ手法	ヨコナデ調整	正	２mm程度の長石角礫を多く含む	外面一部黒灰色、他は灰色内面青灰色	完　形	22の蓋．磨滅Ｃ
13	坏　蓋	13.2	4.3	天井部の約半分を回転ヘラ削りする．ｂ手法	ヨコナデ後、仕上げナデ．口縁端部に段をわずかにとどめる	正	２mm程の長石角礫を含む	灰色	完　形	
14	坏　身	13.9	3.7	底部の約半分を回転ヘラ削りする．ａ手法	ヨコナデ調整後、仕上げナデ	正	２mm以下の砂粒を含む	暗灰色	ほぼ完形	４の身．磨滅Ｃ
15	坏　身	13.4	4.7	底部の小範囲を回転ヘラ削りする．ａ手法	ヨコナデ調整後、仕上げナデ	正	長石砂粒を含む	暗灰色、黒色斑粒	ほぼ完形	
16	坏　身	12.9	4.5	ヨコナデ調整は荒い条線を残す．底部の約半分を回転ヘラ削りする．ａ手法	ヨコナデ調整後、仕上げナデ	正	長石の砂粒を含む	暗灰色、黒色斑粒	ほぼ完形	磨滅Ｃ
17	坏　身	13.1	3.9	底部の三分の一を回転ヘラ削りする．ａ手法	ヨコナデ調整後、仕上げナデ	不明	２mmの長石角礫を少量含む	暗灰色、黒斑粒	完　形	２の身．一部に暗緑色自然釉．磨滅Ｃ
18	坏　身	13.8	4.8	底部約半分を回転ヘラ削りする．ａ手法	ヨコナデ調整	正	長石等の砂粒を多く含む	暗灰色、黒色斑粒	ほぼ完形	
19	坏　身	13.2	3.8	器面剥落のため調整等不明	同左	不明	２～３mmの長石礫を多く含む	淡黄灰色	ほぼ完形	焼成不良．器面の剥落著しい
20	坏　身	13.1	3.9	器面剥落のため調整等不明	ヨコナデ調整	不明	２～３mmの長石礫を含む	外面黒灰色、内面淡黄灰色	ほぼ完形	焼成不良．器面の剥落著しい
21	坏　身	11.9	4.0	底部約三分の一を回転ヘラ削りする．ｂ手法	ヨコナデ調整	正	２mm程の長石角礫を多く含む	外面暗灰色、内面灰色、黒色斑粒	ほぼ完形	磨滅Ｃ
22	坏　身	11.9	4.2	底部の約三分の一を回転ヘラ削りする．ｂ手法	ヨコナデ調整	正	２mm程の長石角礫を多く含む	外面一部黒灰色、他は灰色	完　形	12の身．磨滅Ｃ
23	坏　身	11.8	4.0	底部の約半分を回転ヘラ削りする．ａ手法	ヨコナデ調整後、仕上げナデ	正	２mm程の長石角礫を多く含む	灰色	ほぼ完形	
24	坏　身	12.0	3.9	底部縁辺部のみを回転ヘラ削りする．ｂ手法	ヨコナデ調整後、ナデ仕上げ	正	長石砂粒を含む	白灰色	完　形	磨滅Ｃ
25	坏　身	12.7	4.6	底部の約半分を丁寧に回転ヘラ削りする．ａ手法	ヨコナデ調整後、仕上げナデ	正	長石等の砂粒を多く含む	外面一部黒灰色、他は暗灰色、黒色小斑粒	完　形	磨滅Ｃ
26	坏　身	12.7	3.6	底部は回転ヘラ切り後、ナデ調整を施す．ｃ手法	ヨコナデ調整後、ナデ仕上げ	正	２mmの長石角礫を多く含む	外面灰色、内面白灰色	完　形	磨滅Ｃ．回転方向はヘラ切り時
27	坏　身	12.6	4.0	底部の三分の一を回転ヘラ削りする．ａ手法	ヨコナデ調整後、仕上げナデ	正	３mm以下の長石角礫を多く含む	暗灰色	完　形	磨滅Ｃ
28	坏　身	13.0	3.4+	不明	器面の剥落のため調整等不明	不明	２～３mmの長石礫を含む	淡黄灰色	ほぼ完形	器面の剥落著しい
29	坏　身	12.7	3.8	底部の約半分を回転ヘラ削りする．ｂ手法	ヨコナデ調整．底面ナデ仕上げ	正	２mm程の長石角礫を多く含む	暗灰色	75 %	磨滅Ｃ
30	坏　身	12.9	4.4	底部約三分の一を回転ヘラ削りする．ａ手法	ヨコナデ調整	正	５mm以下の長石角礫を多く含む	外面暗灰色、内面灰色、黒色斑粒	完　形	８の身．磨滅Ｃ
31	有蓋高坏蓋	14.5	5.5	天井部の約三分の一を回転ヘラ削りし、その上にカキ目を施す	口縁端部に段をもつ．天井部は仕上げナデを施す	正	２mm程の長石角礫を多く含む	外面暗灰色、内面白灰色、黒色の小斑粒あり	完　形	磨滅Ｃ
33	長頸壷蓋	12.0	5.5	ヨコナデ調整．天井部に３条の凹線文を施し、間にハケメ工具で列点文を巡らせる	天井部は仕上げナデを施す	正？	長石の砂粒を含む	淡茶灰色	完　形	34の蓋、つまみ部磨滅Ｂ
34	長頸壷	10.5	－	ヨコナデ調整	ヨコナデ調整	不明	長石の砂粒を含む	外面淡茶灰色、内面淡茶色	肩部以上	
35	提　瓶	5.0	17.3	胴部と口縁部を別に作り、接合する．	胴部の片側に封じ痕	不明	２mm程の長石角礫を含む	暗灰色、一部黒灰色	90 %	磨滅Ｂ
39	無蓋高坏	11.8	16.8	脚台部２段３方透し穴．口縁部ハケメ工具による列点文、坏部底面ヘラ描き放射線文					完　形	

表２　１号墳出土須恵器観察表(続き)

番号	器種	口径	器高	技法の特徴		回転	胎　土	色　調	残存率	備　　考
				外　面	内　面					
40	壷	18.9	27.5	体部は叩き成形の後、カキ目を施す.口縁部は幅１cmほど拡張する.頸部には３条の凹線文を施し、３区画した上段に波状文を中段に列点文を施す	胴部以下に同心円叩き目を残し、上半部をヨコナデする	不明	２mm以下の長石角礫を含む	暗灰色ないし黒灰色、一部灰色	60 %	磨滅B
41	提瓶？	7.0	－			不明	２mm程の長石角礫を多く含む	黒灰色	口縁部	磨滅B
42	壷？	－	－	胴部上半をカキ目調整する	ヨコナデ調整	不明	３mm以下の長石角礫を多く含む	灰色	胴部片	
43	坏　蓋	13.2	－		口縁部に退化した段をとどめる	不明	２mm程の長石角礫を含む	暗灰色	口縁部片	
44	坏　蓋	13.8	－		〃	不明	２mm程の長石角礫を含む	暗灰色	口縁部片	
45	坏　蓋	13.9	－		〃	不明	２mm程の長石角礫を含む	暗灰色	口縁部片	

表３　２号墳出土須恵器観察表

番号	器種	口径	器高	技法の特徴		回転	胎　土	色　調	残存率	備　　考
				外　面	内　面					
4	坏　蓋	11.8	3.4	天井部の約半分を回転ヘラ削りするが、一部方向不定．a手法	ヨコナデ調整後、荒くナデ仕上げ	正	砂粒を多く含む	外面暗灰色、内面灰色、黒色斑粒	完　形	坏身として使用された可能性もある．磨滅B
5	坏　蓋	12.0	4.4	天井部はヘラ切り後、縁辺部のみ回転ヘラ削りし、ナデ仕上げ．b手法	ヨコナデ調整後、ナデ仕上げ	逆	２mmの長石角礫を含む	暗灰色	ほぼ完形	身とセットで焼成した痕跡．回転ヘラ削りのみ逆方向、緑褐色自然釉、ハゲあり．磨滅B
6	坏　蓋	11.7	4.1	天井部はヘラ切り後､縁辺部のみ回転ヘラ削りし､ナデ仕上げ.ｂ手法	ヨコナデ調整後、ナデ仕上げ	正	２mmの長石角礫を含む	外面暗灰色、内面灰色	ほぼ完形	磨滅B
7	坏　蓋	12.7	4.5	天井部はヘラ切り後、ナデ仕上げ．ｃ手法	ヨコナデ調整後、中央部を指押さえする	正	数mmの角礫を少量含む	外面灰色、内面白灰色	ほぼ完形	焼成やや不良．磨滅C
8	坏　蓋	12.6	4.4	天井部はヘラ切り後、ナデ仕上げ．ｃ手法	ヨコナデ調整後、小範囲をナデ仕上げ	正	２mm以下の長石砂粒を含む	白灰色	ほぼ完形	焼成不良．磨滅B
9	坏　身	10.9	3.4	底部の約半分を回転ヘラ削りする．ｂ手法	ヨコナデ調整後、ナデ仕上げ	正	数mmの角礫を少量含む	灰色	完　形	口縁の一部は焼成前に変形する．磨滅B
10	坏　身	11.8	3.7	底部は回転ヘラ切り後、ナデ仕上げ．ｃ手法	ヨコナデ調整	正	２mm以下の長石砂粒を含む	灰色	完　形	半分に割れている
11	坏　身	11.0	4.1	底部回転ヘラ切りナデ仕上げ．ｃ手法	ヨコナデ調整	正	２mm以下の長石砂粒を多く含む	一部黒灰色、灰色	完　形	磨滅B
12	坏　身	11.0	4.0	底部回転ヘラ切り後、ナデ仕上げ．ｃ手法	ヨコナデ調整後、ナデ仕上げ	不明	２mmの長石角礫を少量含む	灰色	ほぼ完形	焼成やや甘い．磨滅B
13	坏　身	11.1	4.0	底部回転ヘラ削り後、ナデ仕上げ．ｃ手法	ヨコナデ調整	不明	２mmの長石角礫を多く含む	外面一部灰色、他は黒灰色、内面一部黒灰色､他は灰色	ほぼ完形	磨滅C
14	坏　身	11.3	4.1	底部、回転ヘラ切り後、ナデ仕上げ．ｃ手法	ヨコナデ調整後、ナデ仕上げ	不明	２mmの長石角礫を多く含む	外面一部暗灰色、他は灰色	80 %	磨滅C
15	坏　身	10.8	4.2	底部は回転ヘラ切り後、ナデ調整．ｃ手法	ヨコナデ調整	正＊	長石等の砂粒を含む	灰色、内面に黒色斑粒	完　形	磨滅C
16	坏　身	10.6	4.1	底部回転ヘラ切り後、ナデ仕上げ．ｃ手法	ヨコナデ調整後、ナデ仕上げ	不明	２mm以下の長石砂粒を含む	外面淡黄灰色、内面暗灰色	ほぼ完形	緑褐色自然釉．磨滅C
17	坏　身	10.8	4.3	底部、回転ヘラ切り後、ナデ仕上げ．ｃ手法	ヨコナデ調整後、ナデ仕上げ	正？	２mmの長石角礫を少量含む	灰色	完　形	磨滅B
18	坏　身	10.6	3.4	底部回転ヘラ切り後、ナデ仕上げ．ｃ手法	ヨコナデ調整後、ナデ仕上げ	不明	長石砂粒を多く含む	灰色	完　形	磨滅B
19	無蓋高坏	10.1	11.7	脚台は２段３方透し穴．坏部には２条の突帯を巡らせ、間に刻み目文を施す	坏部はヨコナデ調整後、底面をナデ仕上げ	不明	長石砂粒を含む	外面暗灰色、一部黒灰色、内面暗灰色	完　形	磨滅C
20	無蓋高坏	14.8	13.0	口縁部に屈曲する段をもつ	坏部はヨコナデ調整後、底面をナデ仕上げ	正？	長石等の砂粒を含む	一部黒灰色、他は暗灰色	ほぼ完形	坏部焼け歪み激しい．磨滅B
21	無蓋高坏	14.0	14.2	坏屈曲部に浅い凹線を施す	ヨコナデ後、ナデ仕上げ	正	２mm以下の長石砂粒を含む	一部黒灰色、他は暗灰色	完　形	磨滅B
22	無蓋高坏	14.8	15.1	坏屈曲部に段をもつ	ヨコナデ後、ナデ仕上げ	不明	２mm以下の長石砂粒を含む	一部黒灰色、他は淡黄灰色	完　形	瓦質に近く焼成不良．器肌荒れ
23	無蓋高坏	15.5	15.2	坏部底面は回転ヘラ削りしてヨコナデ調整	ヨコナデ後、ナデ仕上げ	正	２mm以下の長石砂粒を多く含む	一部暗灰色、他は灰色	完　形	磨滅B
24	無蓋高坏	11.2	11.1	坏部に突帯の名残の段、２条を巡らせる．脚台部に浅い２条の凹線文を施す	ヨコナデ調整	不明	２mmの長石角礫を含む	暗灰色	完　形	磨滅C
25	無蓋高坏	9.3	8.5	坏部に１条の凹線を施す	ヨコナデ調整	不明	２mmの長石角礫を少量含む	暗灰色	90 %	磨滅B
26	長頸壷	7.7	20.6	肩部に２条の凹線を巡らせ、胴部下半にはカキ目を施す		不明	２～３mmの長石角礫を多く含む	暗灰色、一部黒灰色	完　形	磨滅C
27	甕	10.7	14.7	胴部に２条の凹線を巡らせ、間にクシ状工具による刻み目文を施す．胴部下半を回転ヘラ削りする	ヨコナデ調整、絞り目	正	２～３mmの長石角礫を多く含む	灰色	ほぼ完形	雲珠が付着．磨滅B
28	提　瓶	6.0	14.5	体部両面にカキ目を施す．把手や突起はもたない	片面を粘土円盤で封じる	不明	長石等の砂粒を含む	外面:一部黒灰色､他は灰色、内面:暗灰色	70 %	陶棺前面で遊離して破片で出土．緑褐色自然釉．磨滅B

表３　２号墳出土須恵器観察表(続き)

番号	器種	口径	器高	技法の特徴		回転	胎　土	色　調	残存率	備　　考
				外　面	内　面					
29	提　瓶	5.6	15.4	胴部片側を回転ヘラ削りし、反対側を粘土円盤で封じる．カキ目調整	ヨコナデ調整	不明	2mm以下の角礫を含む	暗灰色、黒色斑粒	口縁の一部を欠く	寸法は復元推定．磨滅A
30	瑤	10.8	12.8	肩部に１条の凹線を施す．胴部の約半分を回転ヘラ削りする	頸部に粘土紐巻き上げ痕、絞り目	正	長石等の砂粒を含む	暗灰色、黒色斑粒	80 %	口縁部焼けひずみ．磨滅B
31	瑤	12.8	15.1	肩部には段をもつ．胴部下半は回転ヘラ削りする	ヨコナデ調整、絞り目	正	2mm以下の長石砂粒を多く含む	外面:一部黒灰色、他は灰色	70 %	一部焼成不良．磨滅B
32	横　瓶	9.0	24.3	体部の成形には叩きを用いない．向かって左側半分を回転ヘラ削りした後、全面にカキ目調整	ヨコナデ調整、一端を粘土円盤で封じる	正	2～3mmの長石角礫を含む	灰色	90 %	磨滅B
33	甕	27.6	57.1	擬格子目叩き後、上半部を平行叩き目成形、部分カキ目	中央部は同心円叩きを若干ナデる				ほぼ完形	割って箱式石棺の一部に使用．磨滅B
34	横　瓶	14.3	40.1	平行叩き成形後、カキ目調整					完　形	磨滅B

表４　３号墳出土須恵器観察表

番号	器種	口径	器高	技法の特徴		回転	胎　土	色　調	残存率	備　　考
				外　面	内　面					
1	坏　蓋	14.8	4.3	天井部の周辺だけを回転ヘラ削りする．b手法	口縁部に段をもつ．ヨコナデ調整後、仕上げナデ	正	3mm以下の長石などの角礫を多く含む	白灰色	完　形	7の坏身とセット関係．焼成やや甘い．磨滅C
2	坏　蓋	14.0	4.3	天井部の約三分の一を回転ヘラ削りする．a手法	口縁部付近に段の退化した条線を施す．ヨコナデ調整後、仕上げナデ	正	2mm以下の長石砂粒を多く含む	外面:灰色、一部黒灰色、内面:灰色	完　形	磨滅C
3	坏　蓋	13.5	3.6	天井部の約半分を回転ヘラ削りする．a手法	口縁部付近に段の退化した条線を施す．ヨコナデ調整後、仕上げナデ	正	2mmの長石角礫を含む	外面:暗灰色、一部黒灰色、内面:灰色	完　形	磨滅C
4	坏　蓋	13.0	4.1	天井部の約半分を回転ヘラ削りする．a手法	口縁部付近に段の退化した条線を施す．ヨコナデ調整	正	3mm以下の長石角礫を多く含む	灰色	完　形	12の坏身とセット関係．ヘラ記号、磨滅C
5	坏　蓋	13.6	4.2	天井部の約半分を回転ヘラ削りする．b手法	口縁部付近に段の退化した条線を施す．ヨコナデ調整後、仕上げナデ	正	2～3mmの長石角礫を多く含む	外面:暗灰色、一部黒灰色、内面:灰色	完　形	内面中央に灰白色物質付着．磨滅C
6	坏　蓋	13.7	5.1	天井部の約三分の一を回転ヘラ削りする．a手法	口縁部付近に段の退化した浅い条線を施す．ヨコナデ調整	正	2mmの長石角礫を多く含む	外面:暗灰色、内面:灰色	完　形	外面に灰白色物質付着．磨滅C
7	坏　身	13.1	4.5	底部の約三分の二を回転ヘラ削りする．a手法	底部に叩き目(同心円文)痕あり．ヨコナデ調整後、ナデ仕上げ	正	2mm以下の長石等角礫を含む	白灰色	完　形	1の坏蓋とセット関係．焼成不良．磨滅B
8	坏　身	12.8	4.2	底部の約半分を回転ヘラ削りする．a手法	ヨコナデ調整	正	2mm以下の長石角礫を多く含む	外面:灰色、一部黒灰色、内面:灰色	完　形	磨滅C
9	坏　身	12.3	3.7	底部の約半分を回転ヘラ削りする．a手法	ヨコナデ調整後、仕上げナデ	正	2mm以下の長石角礫を多く含む	外面:灰色、一部黒灰色、内面:灰色	完　形	磨滅C
10	坏　身	12.2	3.8	天井部の約半分を回転ヘラ削りする．a手法	ヨコナデ調整後、仕上げナデ	正	2mm以下の長石角礫を多く含む	灰色	完　形	磨滅C
11	坏　身	12.1	4.0	底部の約半分を回転ヘラ削りする．a手法	ヨコナデ調整後、仕上げナデ	正	3mm以下の長石角礫を多く含む	灰色	完　形	磨滅C
12	坏　身	11.9	4.2	底部の約半分を回転ヘラ削りする．a手法	ヨコナデ調整	正	2mm以下の長石角礫を多く含む	灰色	完　形	4の坏蓋とセット関係．ヘラ記号、磨滅C
13	無蓋高坏	11.5	10.6	坏部に突帯の名残の段を巡らせ、段の下に斜刻目文を施す．脚台部には長方形の３方透し穴．脚端に２条の凹線文を施す	ヨコナデ調整	不明	2mm以下の長石角礫を多く含む	暗灰色	60 %	淡褐色自然釉、ハゲあり．磨滅C
14	無蓋高坏	11.6	11.7	坏屈曲部に突帯をもつ．脚台部には三角形の３方透し穴	ヨコナデ調整	不明	角礫を多く含む	暗灰色	70 %	暗緑色自然釉、溶着、ハゲあり．磨滅C
15	横　瓶	11.6	25.5	壷の胴部と同様な手法で体部を形成し、右端を粘土板で塞ぐ．体部の半分(塞いだ側)にはカキ目を施す	閉塞板以外には同心円の当て具痕	不明	2mm以下の長石角礫を含む	灰色	完　形	幅32.3．磨滅B

の観察結果を別表に示した（表2-4備考欄)。これからいえることは、まず第１に多くの須恵器に使用痕と考えられる磨滅が観察されることで、このことは一括遺物である古墳副葬品の解釈に手がかりを与えるものと考えられる。第２には、当然のことかもしれないが器種により磨滅部位の偏在が認められることである。たとえば２号墳出土の無蓋高坏の磨滅度Ｂ例（20・21・23・25）では長脚を呈する脚台中央部分に帯状の磨滅痕が認められた。また提瓶や瑤では胴部および底部に磨滅が広く進行した例がある。このことは、木製器台の使用や須恵器の使用の実態を知る手がかりとなるかもしれない。第３に本古墳群では、埋葬供献にあたり日常的に使用された土器が用いられたことを示す点である。

現在のところ磨滅の度合いについて、共伴する型式との間に相関関係は認められないが、今後意識的に分析すべき課題であろう。

2　古墳群の特徴と問題点

A　墳丘・埋葬・遺物

1号墳の墳丘形態は不明な点も残されるが、直径13mほどの円墳と推定される。片袖式の横穴式石室で全長8.5m、玄室長4m、最大幅は1.7mである。2号墳は直径10mで、無袖式の石室規模は現長5.6m、幅1.4mと、1号墳よりやや小形である。3号墳の直径は10m、未調査の古墳のうち残りの良い5号墳の直径は約12m、石室長8.5m、最大幅は1.9mである。副葬品目においても1・2号墳には馬具が含まれていることが注意され、本古墳群は似た規模の古墳からなると考えられる。

埋葬施設の種類が異なる1号墳と3号墳の築造時期は7世紀初頭頃と推定されるので、巨視的には横穴式石室から竪穴式石室への移行期と捉えられなくもないが、1号墳奥壁はすでに巨石化の傾向を示していることから、むしろこの段階まで竪穴式石室が残存することに注目すべきであろう。

片袖式と無袖式石室の関係は、1・2号墳の築造時期の新旧が示すように、墳丘規模の大小よりも築造時期の差による可能性がある。5号墳では、無袖式石室の奥壁から3.5m手前に箱式石棺の側板らしい板石が2枚、立った状態で残っている。それより手前側には土が厚く堆積しているので、採集された陶棺片は箱式石棺の奥に主埋葬として用いられていた可能性が高い。2号墳よりも墳丘・石室の規模はやや上回るが、石室形態、埋葬形式ともに類似している。

このように考えれば、本古墳群においては陶棺の採用は7世紀前葉になって開始された可能性がある。

遺物については、2号墳における鉄滓供献が注意される。石室前庭部が残存しないため、2点が鉄滓のすべてかどうか不明だが、位置関係からみて陶棺被葬者に向けた供献であることがあきらかである。被葬者と鉄生産との関係を物語る遺物である。また2号墳の飾り馬具の出土は、本墳被葬者が後期群集墳被葬者のなかでも上位に属することを示している。

B　古墳群の立地

的場古墳群の立地する金屋地区から吉井川下流の柵原町までの川沿いには、平地はほとんど存在しない。南下する吉井川の両岸に迫った山地と河床との間に狭い低地が部分的にみられる程度である。現在の集落は丘陵上面あるいは縁辺部の、河床から相対的に高い位置に立地する。こうした傾向は金屋地区でも同様であって、平成10年の台風10号においてもこれらの集落は水没をのがれている。的場古墳群の位置する丘陵下の平地には現在のところ遺跡の存在は確認されていないが、当時においても集落立地としては不向きであったと考えられる。

では的場古墳群の被葬者集団の居住地はどこにもとめられるのだろうか。一般にこの時期の古墳群は、生活の本拠地からやや離れながらもそれを見下ろせる周辺の丘陵上や斜面あるいは山裾に多く立地したと考えられる。的場古墳群の立地と、現在の集落に示される居住適地は、ほぼ一致している。しかし古墳立地の一般的な傾向からは集落と墓域の同居は考えにくいので、被葬者の生活場所は古墳群から離れた位置に想定するのが妥当であろう。現状では具体的な場所を特定できないが、対岸の見内原地区の段丘上、あるいは上流のより離れた場所であった可能性もある。

では的場古墳群の立地の意味は何か。眼下の吉井川の存在をやはり評価するべきであろう。この吉井川は近世においては備前と美作を結ぶ基幹交通路としての役割を果たしてきた。このことは古墳時代においても同様であって、たとえば柵原町月の輪古墳については吉井川と吉野川の合流点を見下ろす立地と舟形埴輪の出土から、水上交通と河川管理を統括した首長像が指摘されている(7)。

金屋地区は大きくみれば津山を中心とする盆地の末端部に、逆にいえば盆地の入口に相当する。本古墳群の被葬者についても、吉井川を利用した物資流通を含む交通関係の管理にあたった集団としての性格が想定される[8]。ただし、そのあり方は地域集団内部においても中央政権との関係においても、月の輪古墳の被葬者とはかなり異なったものであっただろう。

註

1　近藤義郎編『佐良山古墳群の研究』第1冊　津山市　1952

2　近藤義郎『蒜山原　その考古学的調査』　岡山県　1954
　近藤義郎『蒜山原四つ塚古墳群（改訂版）』岡山県八束村　1992

3　『神毛1号墳調査報告書・ムスビ山高塚調査報告書』落合町教育委員会　1969

4　内山敏行・大谷晃二・田中弘志「佐良山古墳群高野山根2号墳について」『古代吉備』第13集　古代吉備研究会　1991

5　陶邑編年については以下の文献によった。
　田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園　1966
　田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981
　山田邦和『須恵器生産の研究』学生社　1988

6　須恵器使用痕に関しては、かつて山田英輔氏から観察方法について教示を受けたことが検討の契機となっている。感謝申し上げます。

7　今井　堯「吉備における古墳被葬者の検討－金蔵山古墳南石室と月の輪古墳造出し粘土槨被葬者の検討－　」『古代吉備』第10集　古代吉備研究会　1988

8　こうした性格は、津山市佐良山古墳群中の中宮古墳群および高野山根古墳群についても同様に指摘される。これらの古墳群が位置するのは吉井川に流入する皿川沿いの東山裾である。津山盆地「世界」からみれば、この福田地区は吉井川流域に発達した平地の南奥にあたる。しかし古墳時代においても完全に閉じた「世界」は存在しない。現国道53号線沿いの皿川流域から旭川流域を経て備前に至るルートも当時から存在していたと考えられるので、この立地は少なくとも一面において的場古墳群と同様の意味をもつと思われる。

写　真　図　版

1．調査区全景

2．1号墳(調査前)

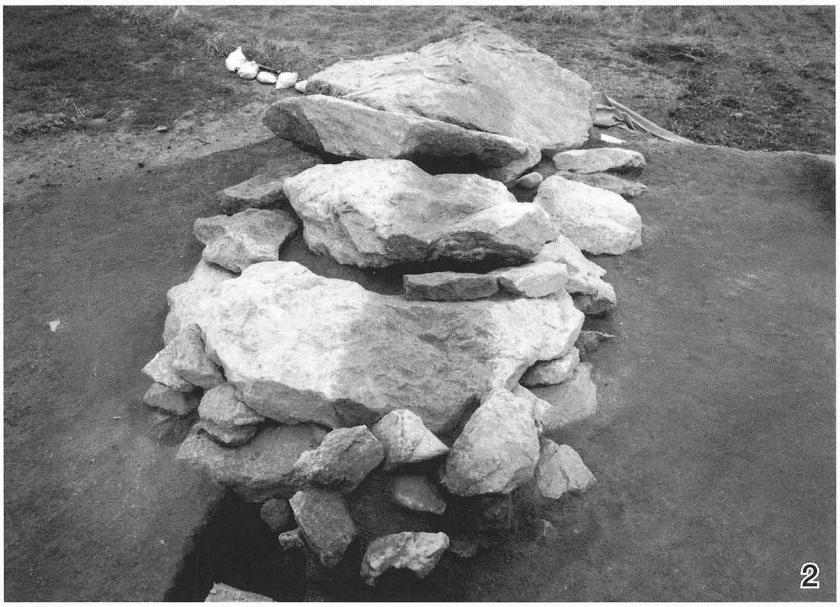
3．1号墳石室

1．1号墳石室(北から)

2．1号墳遺物出土状況
(北西から)

3．1号墳遺物出土状況
(南東から)

1．2 号墳(調査前)



2．2 号墳天井石検出状況
(北西から)

3．2 号墳石室(南東から)

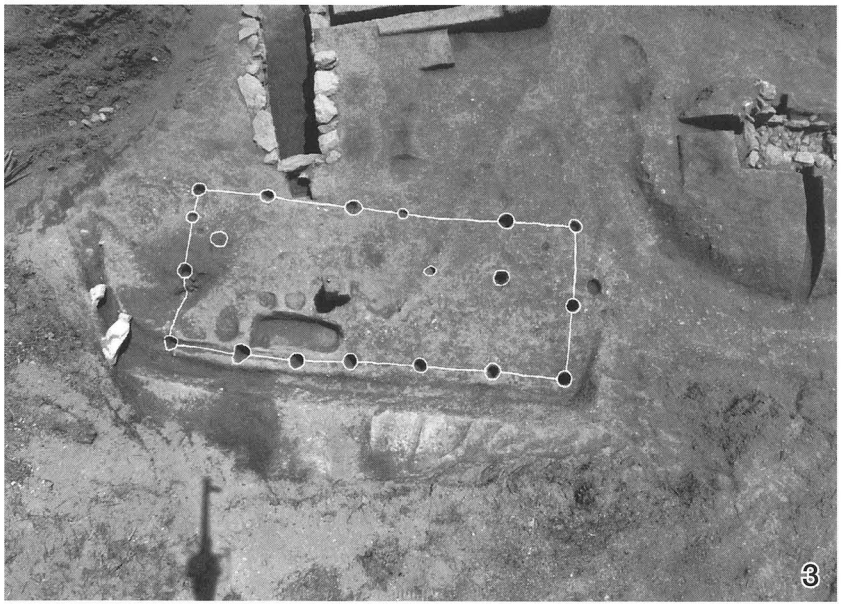
1．2 号墳遺物出土状況
（北から）

2．2 号墳箱式石棺
（北東から）

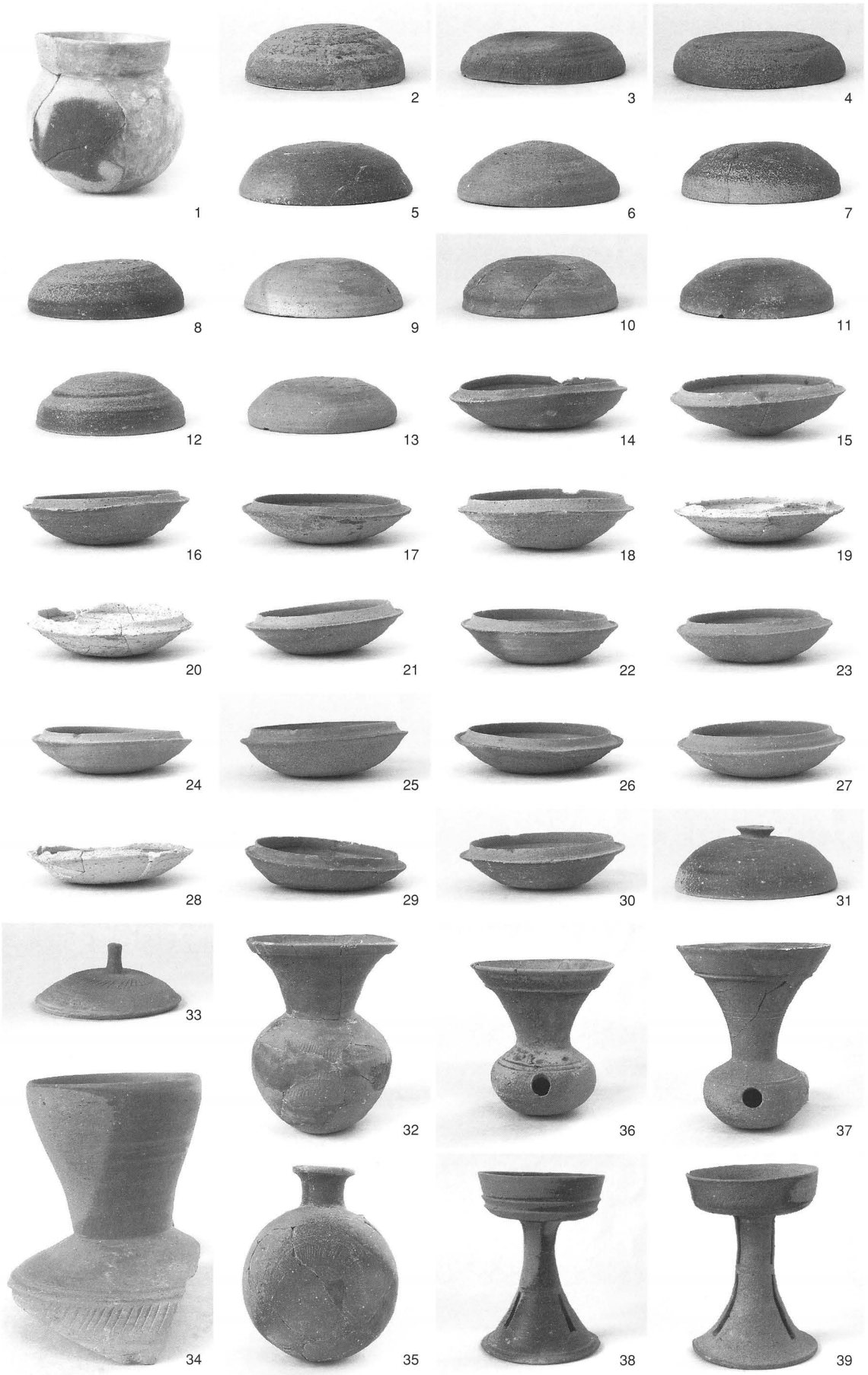
3．2 号墳石室（南東から）

1．3号墳全景(南西から)

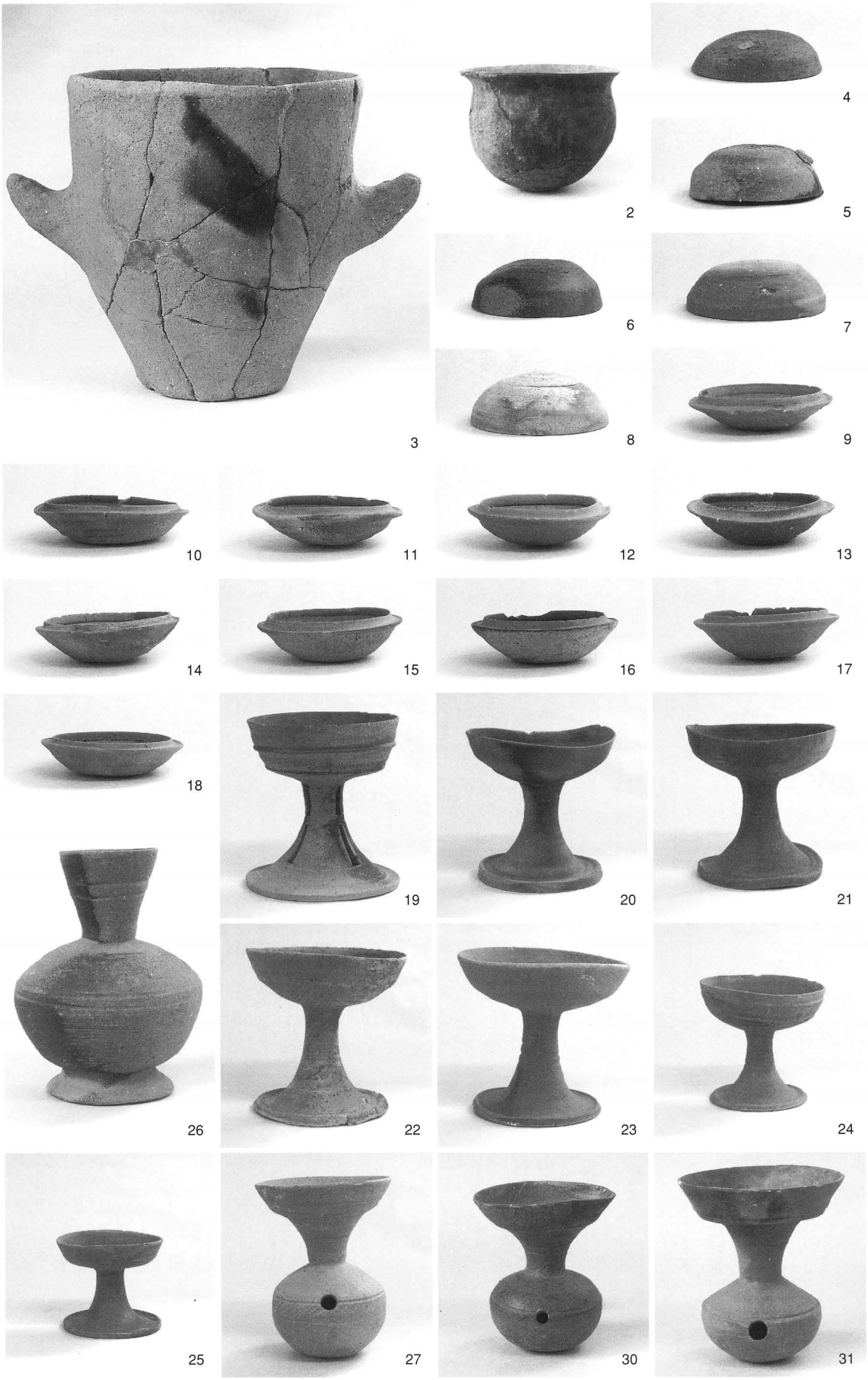
2．3号墳石室(南西から)



3．建物跡


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
33
32
36
37
34
35
38
39

1 号墳出土土器



2 号墳出土土器（1）

28

29

32

33

34

2 号墳出土土器（2）

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

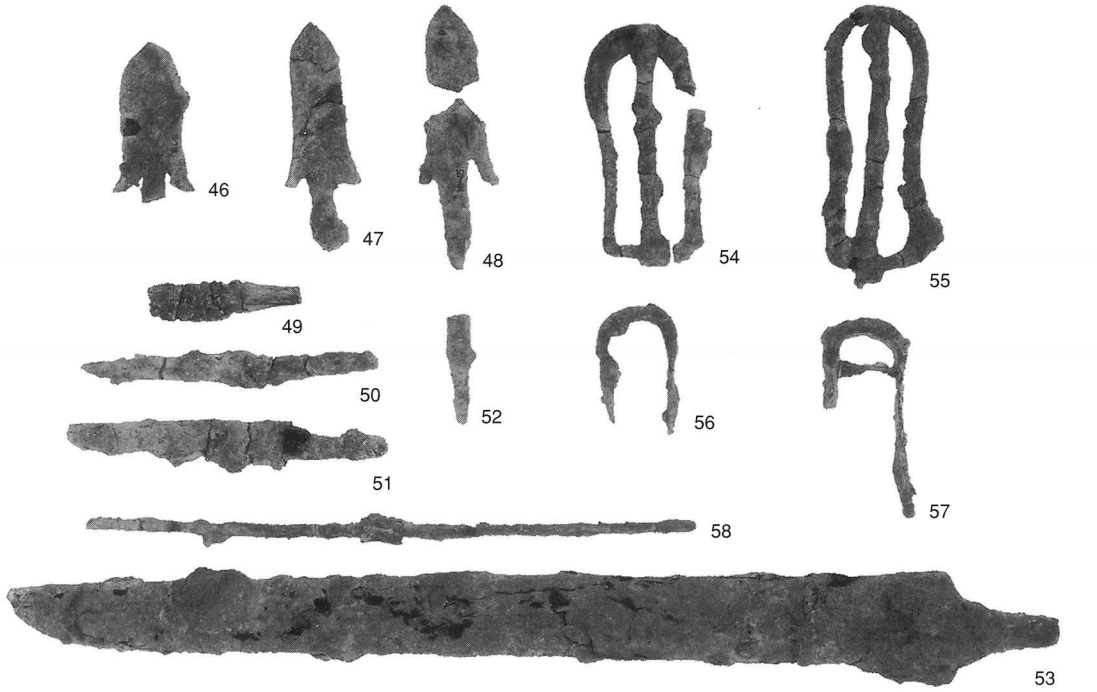
12

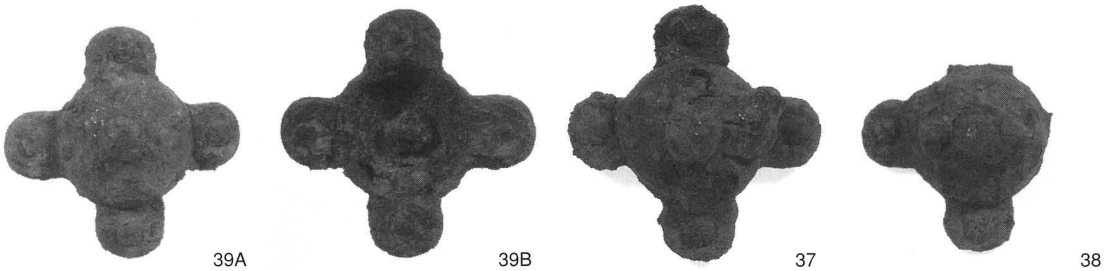
13

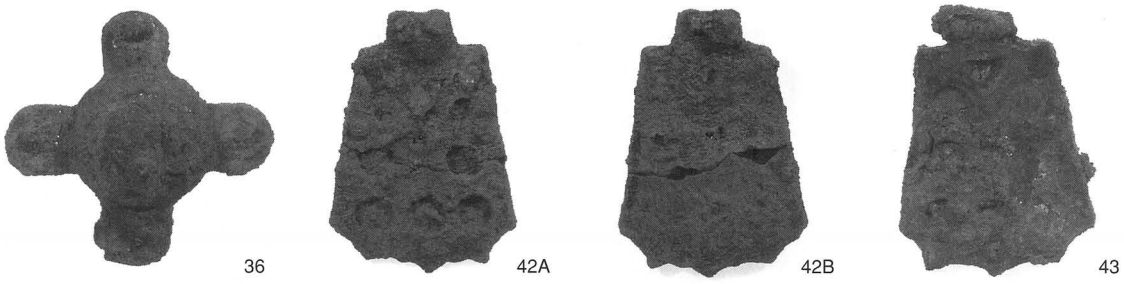
14

15

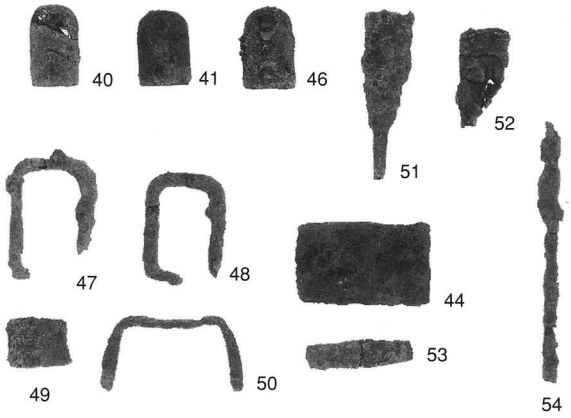
3 号墳出土土器



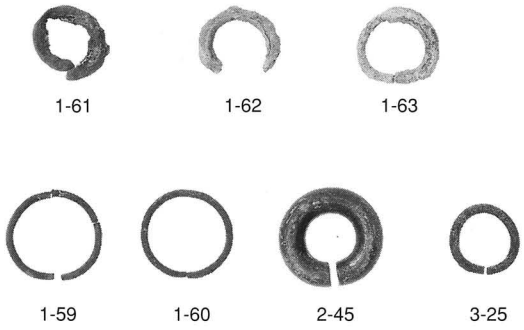




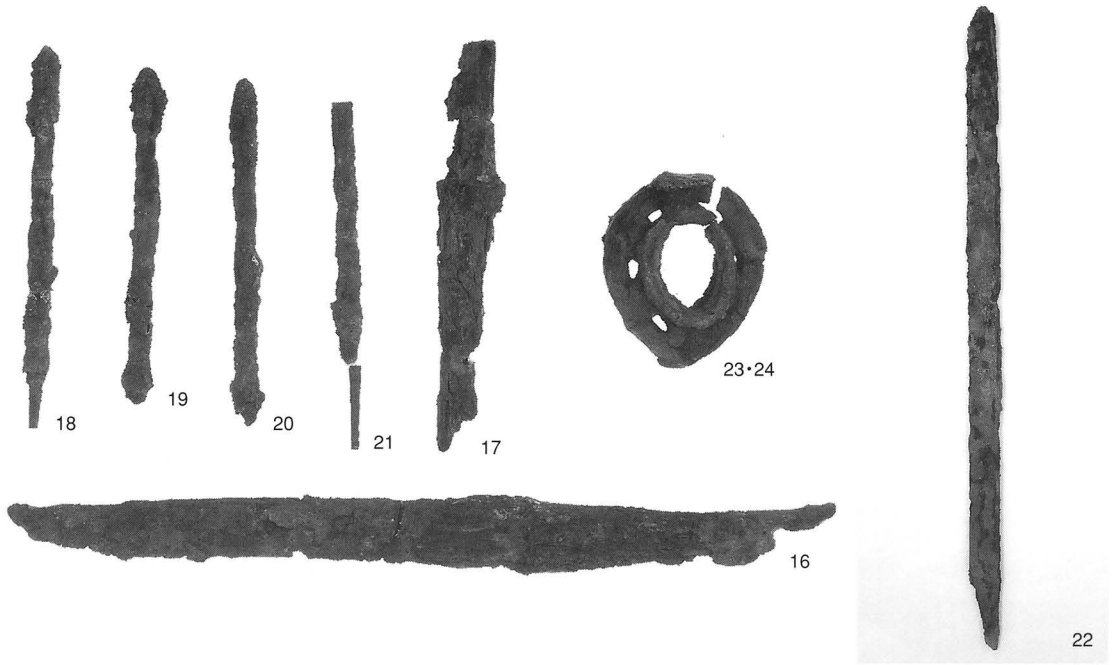
上段：１号墳出土鉄製品、下段：２号墳出土馬具



2号墳出土鉄製品



的場古墳群出土耳環



3号墳出土鉄製品

2号墳出土陶棺

報告書抄録

ふりがな	まとばこふんぐん
書名	的場古墳群
副書名	
巻次	
シリーズ名	津山市埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	第70集
編著者名	中山俊紀・安川豊史・行田裕美・平岡正宏・豊島雪絵
編集機関	津山市教育委員会　津山弥生の里文化財センター
所在地	〒708-0824 岡山県津山市沼600-1　TEL. 0868-24-8413　FAX. 0868-24-8414
発行年月日	2001年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
まとばこふんぐん 的場古墳群	おかやまけんつやまし 岡山県津山市 かなや 金屋367-1他	33203		35°1′50″	134°2′2″	1999.1.21 ～1999.4.30	700m²	牧場造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
的場1号墳	円墳	古墳時代	横穴式石室	土器、鉄器	
的場2号墳	円墳	古墳時代	横穴式石室 陶棺1 箱式石棺1	土器、鉄器 鉄滓	
的場3号墳	円墳	古墳時代	竪穴式石室	土器、鉄器	

印刷データ

紙質　表　　紙／アートポスト220kg
　　本　　文／ニューエイジ 90kg
　　写真図版／ニューエイジ 90kg

レイアウト　Macintosh QuarkXPress

文字　モリサワ　リュウミンL　13級・正体

図面　1200dpi

写真　カ ラ ー／175線 400dpi
　　モノクロ／150線 360dpi

的 場 古 墳 群

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第70集

２００１年３月３１日発行

発行　津山市教育委員会

編集　津山弥生の里文化財センター
　　岡山県津山市沼６００番地の１
　　TEL. 0868-24-8413
印刷　株式会社　廣陽本社
　　岡山県津山市田町22
　　TEL. 0868-22-7221